

みは深さはあるが径は他のものに比べて小さい。礫は赤変しておらず、炭化物も含まれない。加火された痕跡はない。掘り込みの形態やこの付近にはSB1・SB2があったことなどを考慮すると、掘立柱建物跡の柱穴の1つをなす可能性がある。

C類

礫が周辺部よりも密に集まっており、明瞭な掘り込みをもち、下部に底石（配石）をもつもの。炭化物が多く含まれること・埋土が黒くなっていること・ほとんどの礫が赤変していることなどでC類の集石遺構はこの場での加火の可能性が高いと考えられる。

C1類：SI25~41

C類のうち、1基だけで検出し、他と（掘り込みに）切り合い関係がないもの

【SI26】 A1区の南東側の境界近く、SA5（古墳）の床面下で検出された。上部に礫がかなり密に集まっており、上部礫の約半数が赤変しているのが観察できた。最下部には径約15~35cmの10数個の大・巨礫の底石が見られた。底石は全て赤変しており、底石の下は炭化物が多量に混じった黒色土（砂質）が広がっていた。底石の石材としては尾鈴山酸性岩や砂岩を使用していた。また、断面を見ると掘り込み底面から底石が浮いていることが確認できる。

【SI30】 A2区北側の散礫2の下から検出された。散礫2の礫を除き、狭く密集した集石の上部礫を除くと第36図のような状況で、掘り込みの中に礫が詰まっているのが確認できた。この礫から底石まで3層をなすように礫が入っていた。埋土は小礫（径2cmまで）を多量に含んだ黒色土であり、炭化物を含む。

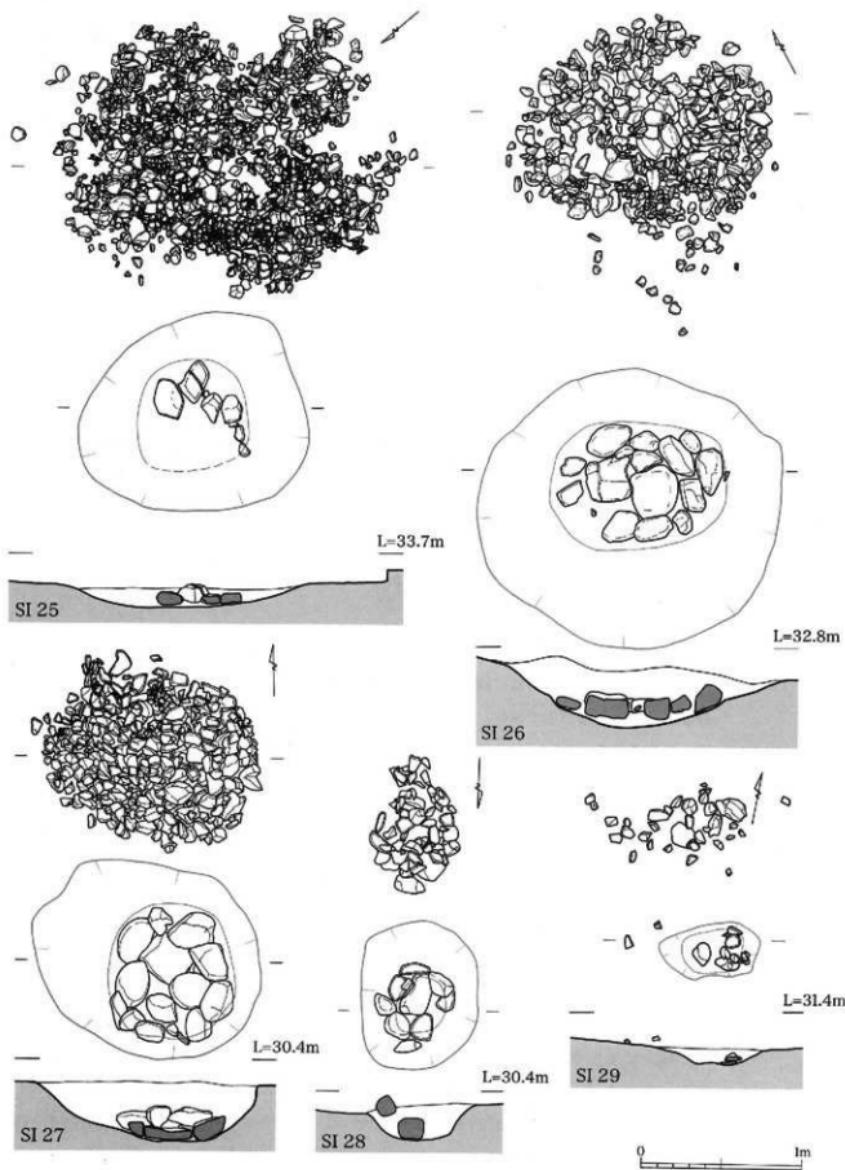
【SI33】 A1区中央部付近から検出した。この付近に集石遺構が集まっている。上部の礫はかなり失われており、検出時には底石が見えていた。底石は大きいもので約30cmで、底石の石材は尾鈴山酸性岩が主であり、円礫である。礫は全て赤変していた。底石と掘り込み底面の間に距離はなく、接している状態である。

C2類：SI42~51

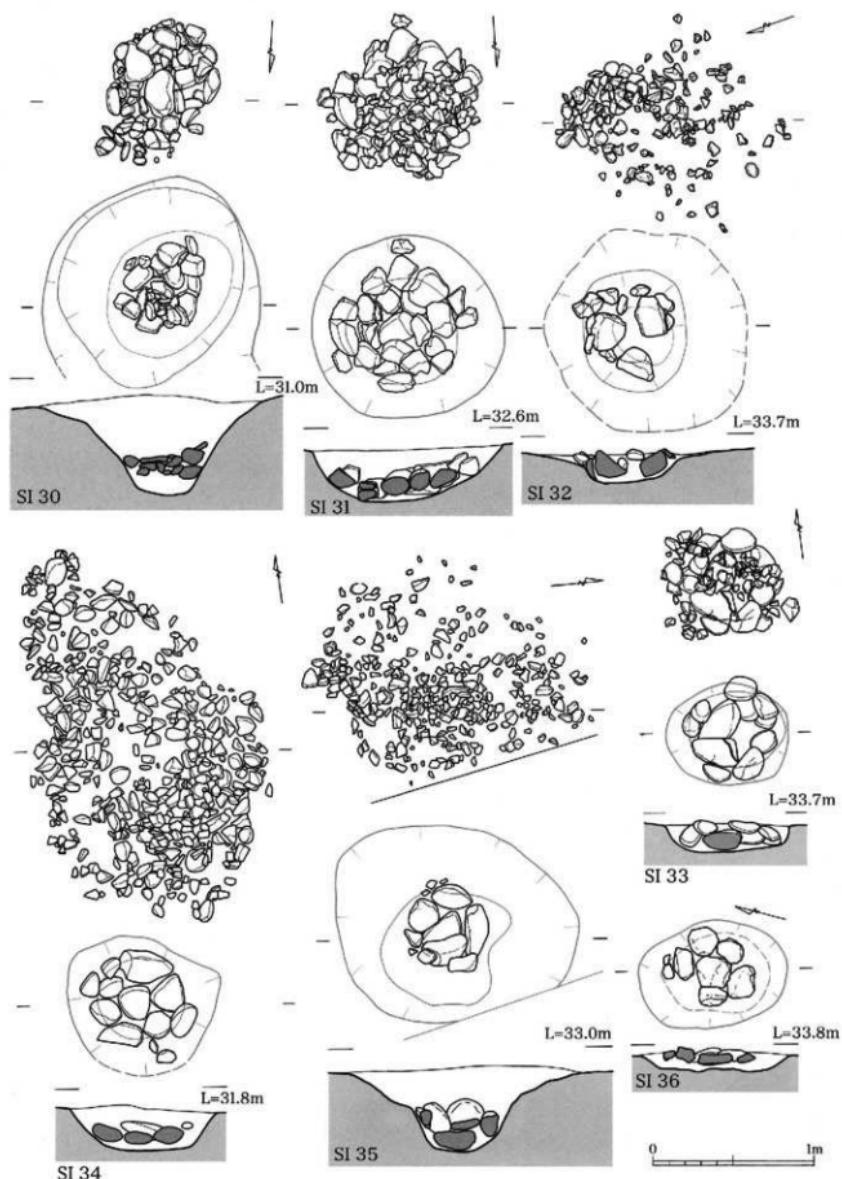
2基のC1類のタイプの集石遺構の掘り込みが切り合った（または非常に近接した）状態で存在したもの。2基は集石のサイズ（礫の広がっている範囲）としては同じ程度であるが、掘り込みの深さに明瞭な違いがあるものとそうではないものがある。2基の掘り込みの深さの違いと掘り込まれた時期の関係ははっきりしない。

【SI42とSI43】 A2区東側の散礫4の下から検出された。上部礫は砂岩の円礫が割れたもので構成され、約4割が赤変していた。底石はSI42・SI43ともに径約20cm~40cmの大礫・巨礫を使用し、石材は尾鈴山酸性岩・砂岩を使用していた。SI42の底石がより赤変していた。埋土は黒色であり、炭化物を含んでいた。掘り込みもSI42がより深いことが観察できた。

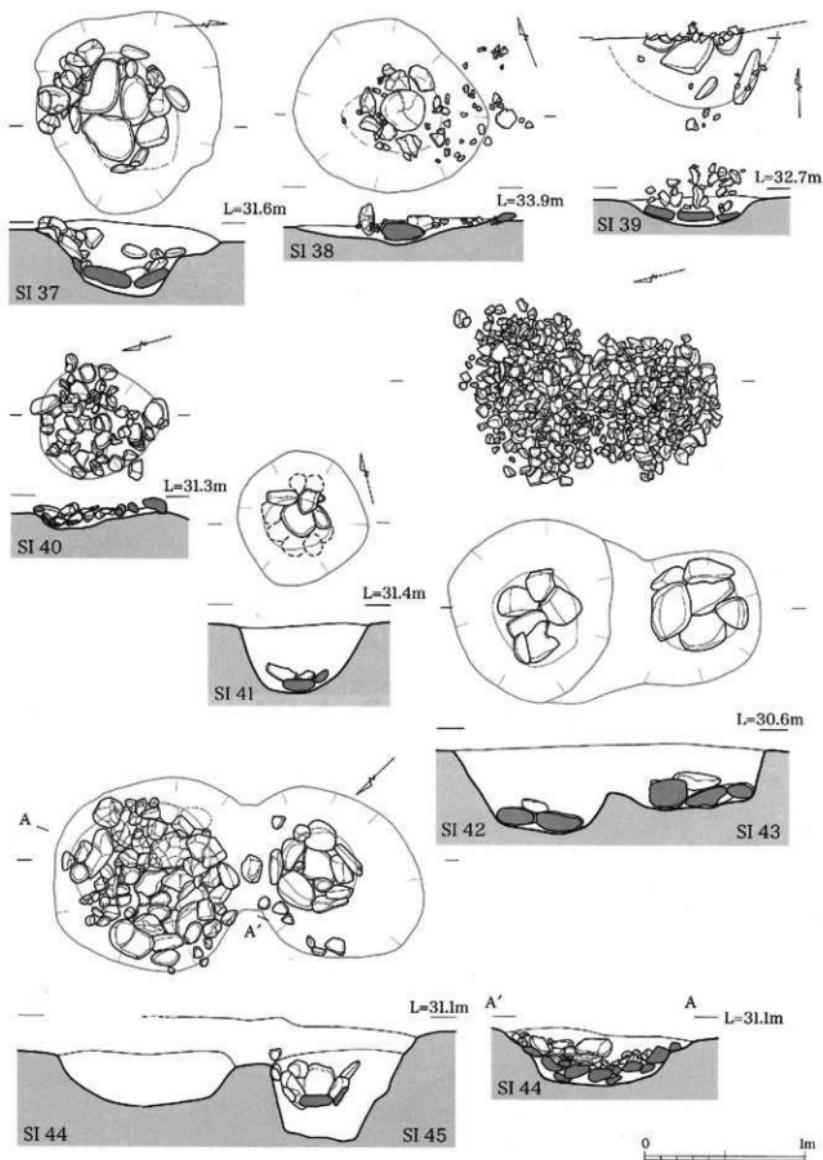
【SI44とSI45】 A2区北側の散礫2の礫を除去していくとSI44がまず検出され、SI44の掘り込みの壁面からSI45の掘り込みが確認された。SI44の底石は径約20~40cmの礫間に径約5~10cmの礫を配する。埋土は炭化物を含んだ黒色土である。SI45の底石はSI44の底石と同サイズのものを配しているが、掘り込み底面から浮いており、その間に黒色の埋土が堆積



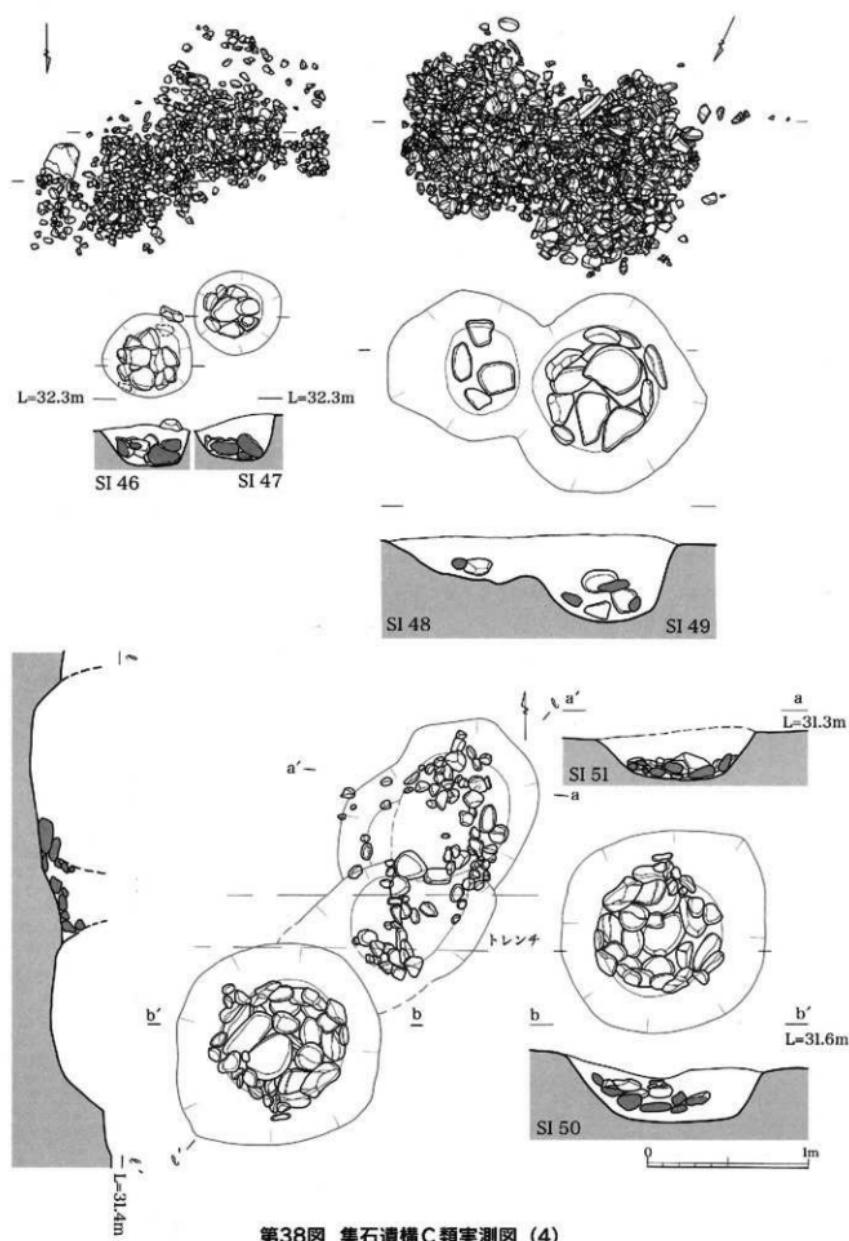
第35図 集石遺構C類実測図（1）



第36図 集石遺構C類実測図(2)



第37図 集石遺構C類実測図（3）



第38図 集石遺構C類実測図(4)

する。掘り込みの壁面には裏込めと考えられる埋土があった。

【SI46とSI47】 A2区中央部から検出された。周囲には炉穴が広がっていた。この2基は他のC2類と違って掘り込みは切り合はず、非常に近接していた。また、掘り込みの深さも2基が同じレベルである。2基は上部礫・底石とともに円礫が割れたもので構成されている。底石は非常にもちろくなってしまっており、取り上げるとぼろぼろに割れた。埋土は黒褐色土であり、焼土塊を多量に含んでいる部分もあった。また、底石にタール状の物質の付着も見られた。

【SI48とSI49】 A2区東側から検出された。この2基の北側には炉穴が広がっていた。礫の石材は砂岩が主である。掘り込みの深さはSI49がかなり深くなってしまっており、第VI層(始良Tn層)に達している。2基の掘り込みの前後関係は切り合いからははつきりしないが、上部礫の断面の様子ではSI49の礫をSI48が切る形になっている。埋土には炭化物を多量に含み、下部は黒色をなしていた。底石は径約15cm~40cmの大礫・巨礫を使用し、石材は尾鈴山酸性岩・砂岩を使用していた。

【SI50とSI51】 A2区北側の散礫2の礫を除去していくとSI50がまず検出された。土層ベルトを挟んだ反対側にSI51が検出された。SI50は上部礫を除くと底石が2層をなすように配されていた。底石は砂岩と尾鈴山酸性岩の円礫が使用されていた。底石は掘り込み底面から浮いた状態であった。埋土は粘性のある暗褐色土であり、炭化物を含む。SI51は最上部の礫は少なかったが、やはり底石を配していた。SI50とSI51の掘り込みの深さは同レベルであったが、2つの掘り込み底面より下層と考えられる位置からも礫を検出している。

第17表 集石遺構観察表

遺構番号	記石	無り込み	長径	短径	深さ	赤化	炭化物	分類	※長径・短径・深さの単位はcm					
									遺構番号	記石	無り込み	長径	短径	深さ
1	x	x	-	-	-	○	なし	A	27	○	○	146	120	37
2	x	x	-	-	-	○	なし	A	28	○	○	92	70	22
3	x	x	-	-	-	○	有り	A	29	○	○	60	732	11
4	x	x	-	-	-	○	なし	A	30	○	○	145	135	63
5	x	x	-	-	-	○	なし	A	31	○	○	120	115	32
6	x	x	-	-	-	○	なし	A	32	○	○	135	126	18
7	x	x	-	-	-	○	なし	A	33	○	○	75	63	18
8	x	x	-	-	-	○	有り	A	34	○	○	154	127	28
9	x	x	-	-	-	○	なし	A	35	○	○	157	127	54
10	x	x	-	-	-	x	なし	A	36	○	○	92	67	12
11	x	x	-	-	-	○	なし	A	37	○	○	131	112	43
12	x	x	-	-	-	○	有り	A	38	○	○	117	101	15
13	x	x	-	-	-	○	有り	A	39	○	○	105	(43)	18
14	x	○	114	104	17	○	有り	B	40	○	○	178	69	11
15	x	○	156	90	20	○	有り	B	41	○	○	85	81	40
16	x	○	87	72	13	○	なし	B	42	○	○	(195)	113	54
17	x	○	110	106	24	○	有り	B	43	○	○	(195)	81	42
18	x	○	104	75	21	○	なし	B	44	○	○	(228)	120	53
19	x	○	115	93	18	○	なし	B	45	○	○	(228)	102	69
20	x	○	130	112	7	○	なし	B	46	○	○	56	54	26
21	x	○	100	63	13	○	なし	B	47	○	○	57	53	27
22	x	○	87	69	34	○	なし	B	48	○	○	(199)	90	50
23	x	○	45	42	24	x	なし	B	49	○	○	(199)	127	69
24	x	○	115	105	11	○	なし	B	50	○	○	142	123	33
25	○	○	147	123	13	○	有り	C1	51	○	○	(316)	93	32
26	○	○	196	175	36	○	有り	C1						

4 土 坑

土坑は、調査区内から多数検出された。土坑の時期は、切り合い関係や埋土中の遺物から、縄文時代～古墳時代にわたり、もっとも集中するのは縄文早期である。分布状況や出土遺物より、縄文時代の所産と判断できたものについて報告する。

縄文早期の土坑は、その配置パターンから以下のA～C群に分類した。本来はC類であり、それが重なりあってB類→A類となる。A類は、意図的に切り合う可能性があり、その重なり方からA-1・2類に細別した。

A類：複雑に切り合って群をなすもの

A-1類：アーベラ状に広がるもの（本来的にはA-2類であり、それが複雑に切り合ったものか）

A-2類：ヤツデ状に広がるもの

B類：2～3基の切りあい関係を持つもの

C類：単独で存在するもの

土坑A・B類は、平面形が長楕円形をし、かつその大半の床面や壁面に焼土が検出された。この特徴は、土坑A・B類が火に関わる遺構であることを示すと考え、土坑A・B類は炉穴と呼ぶことにする。なお、土坑C類のうち、周辺の遺構配置と考えあわせ炉穴に含めた方が良いと判断した場合は、焼土等がなくとも炉穴に含めた場合がある。炉穴と判断した土坑については、「第18表 土坑観察表」に記載している。

調査の経過で述べたように、土坑はVI層面で検出された。土坑の埋土は、周辺の土質と大差ない場合が多く、「シミ」「にじみ」といった状態で認識される場合が多かった。その場合、「シミ」「にじみ」を削り込むと、炭化物や焼土粒を含む、より黒みを増した「シミ」「にじみ」となる。炭化物や焼土粒を含むものは、たいてい床面に焼土面が検出され、炉穴と認定された。遺構の半裁はプランがおおむね明確になった時点でおこない、まず床面を確認、床面から追いかける格好で壁面の検出をおこなった。

遺構検出については、とくに炉穴に困難な場合が多かった。炉穴相互の切り合い関係については、埋土が埋土を切るような場合、判定は困難を極め、とくにA-1・A-2類に顕著である。したがって、炉穴間の切り合い関係について明確でないものもある。しかし、炉穴の床面・壁面の焼土は周辺の土質と明確に区別でき、容易に精査することができた。このほか、炉穴は、散礫を外した時点で検出されたもの、集石遺構のような状態で埋土中に礫が充填されたものなどもみられた。散礫など礫の分布と炉穴の分布が重なる場合、当初、集石遺構と認定していたものが、集石を除き土坑壁面を精査中に焼土が見つかり、追いかけていくと長楕円形のプランの炉穴となつたものもあった。

炉穴床面には、磨石に似た円礫、赤片した大形の自然礫の残されるものがあった。埋土中には土器・石器・多数の赤化礫・炭化物が混じり、とくに床面付近になると焼土塊や細かな炭化物が広がる場合が多くみられた。床面にピット状の浅い掘り込みを持つものもあった。いわゆる連続土坑に伴うブリッジの明確なものではなく、一部の炉穴に限ってその残骸かと思われるものが検出された。

C類のうち、炉穴以外の土坑に遺物・赤化礫の含まれることはほとんどなかった。

A-1類

【SC1～12】(第39図) 密集した炉穴群である。丘陵頂部から下がり始める、A2区中央部で検出された。長軸方向は北東～南西のものと、北西～南東のものとに大きく分けられ、相互に複雑に切り合っている状況である。

調査では、各炉穴の床面が姶良Tn火山灰であったことから床面の把握は容易であった。しかし、炉穴ごとの埋土の差、壁面となるV・VI層と埋土の差は明瞭でなく、切り合いの把握、壁面の把握は困難を極めた。土層断面から切り合いを明確にできなかった場合、床面の高低差や壁面の立ち上がりなども勘案して切り合いを推した。

炉穴床面には、長軸の一端に偏って、焼土面やピット状の浅い掘り込みが確認されたものがいくつもある。また、一端に壁面がわずかに張り出するものがある。これは、いわゆる連結土坑のブリッジの残骸の可能性がある。ほとんどの炉穴には張り出しが確認されず、壁面の崩落等によって完全に失われてしまったか、あるいは一部の炉穴に限ってブリッジ状の施設が構築されたものなのかが考えられる。埋土は全体に軟らかく、炭化物粒を多く含むためか、土色は壁面より若干黒ずむ程度であった。埋土中には繩文土器細片、敲石などの礫石器類、若干の旧石器が出土した。

【SC1】 不整形な土坑で、端部や床面にピット状の落ち込みが複数検出された。複数の土坑の切り合いである可能性がある。

【SC2～5】 明確な切り合い関係を把握できなかった。壁面のカーブ具合などから、おそらくは3基の炉穴(SC2～4)であったと推測される。SC3床面上には赤化礫19点が残されていたが、それは北壁で切られた旧石器時代の礫群SII0のものであろう。SC4は、検出時点では、一見すると集石遺構のような礫のまとまりと、その周辺にはシミ状の暗褐色土が広がっていた。礫は45点あり、赤化礫は10点(全体の約22%)と少ない。礫およびシミ状の広がりをあわせて半裁したところ、礫は埋土上部に混入するばかりであった。SC5はSC4に切られた土坑である。これも複数の土坑の切り合いからなる可能性が残る。

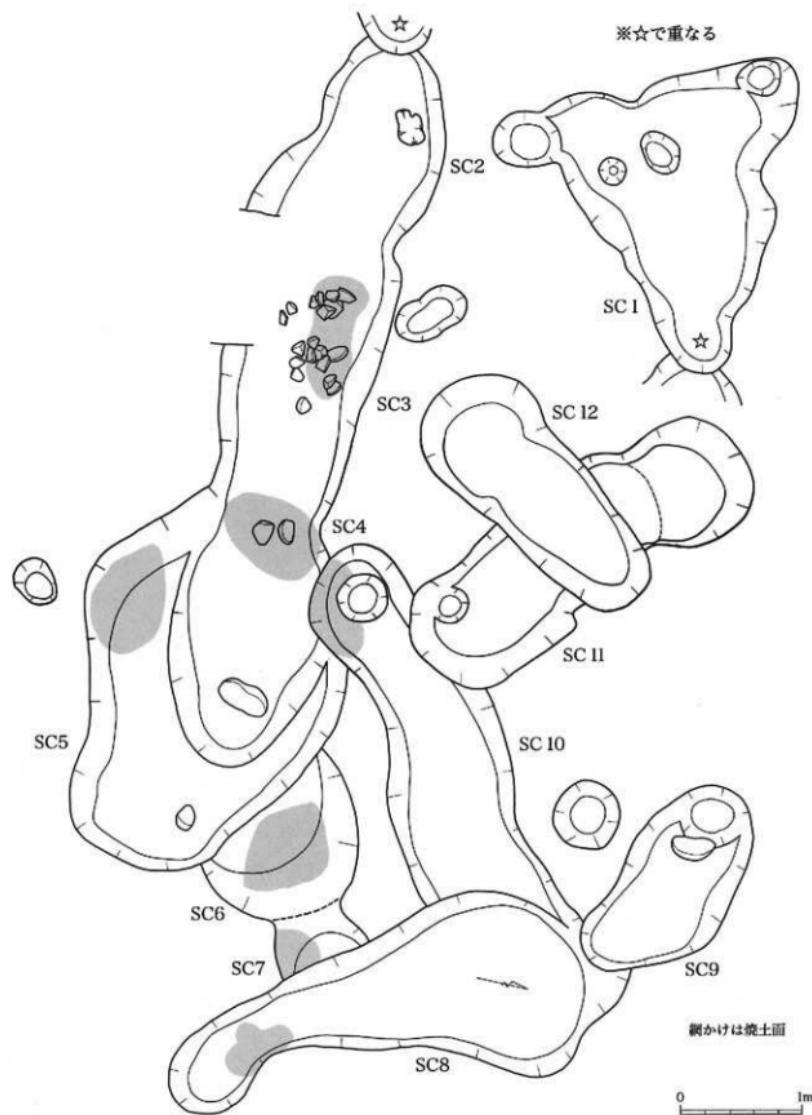
【SC6・7】 床面の立ち上がりから推してSC6の方が新しい可能性があるが、不詳。

【SC8～10】 SC9完掘後、SC8の存在に気付いたため、先後関係は不詳。掘り込みの深さからSC9の方が新しいと推測した。SCI0はSC4側から調査を開始し、最終的にSC8に切られるとわかった。土坑規模からすると、やはり複数の土坑の切り合いからなる可能性が残る。

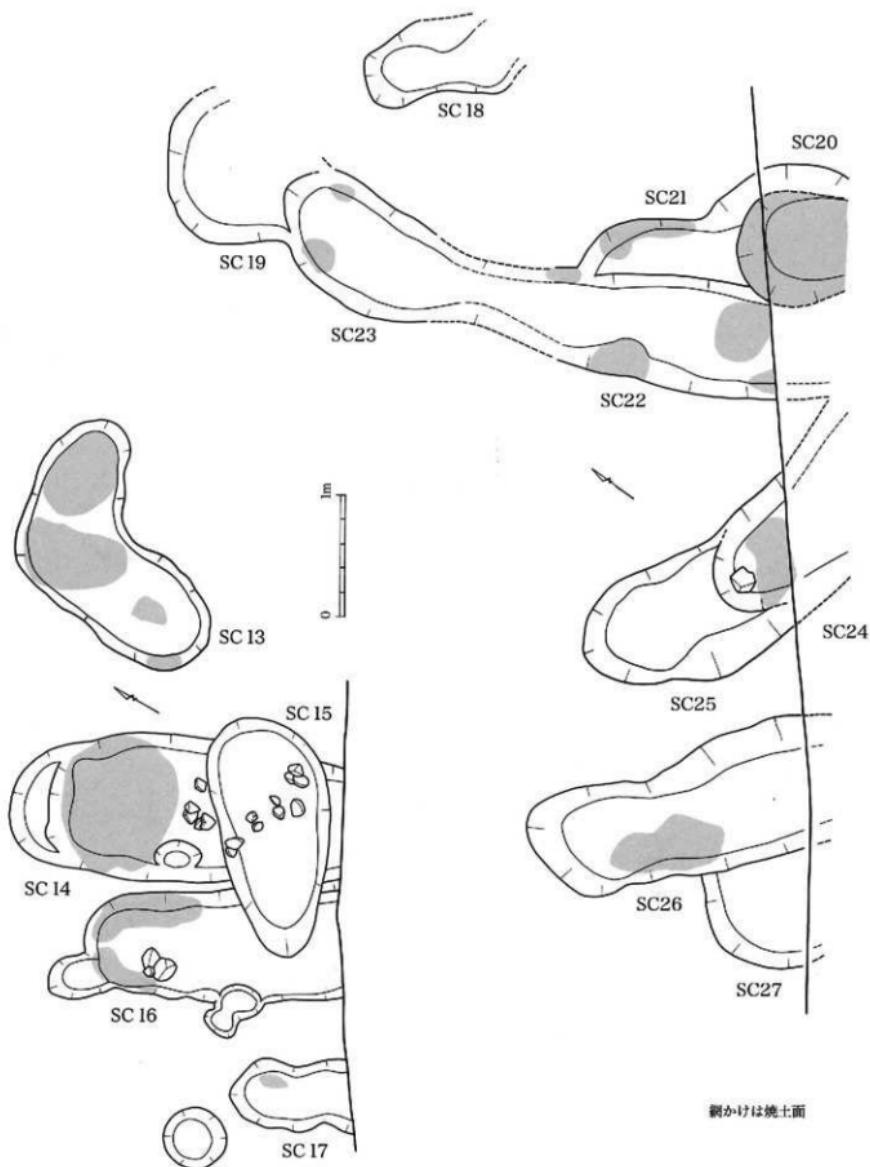
【SC11・12】 全形や切り合いや等、ほかと比べ明確に把握できた。SC11はSC12により直交方向に切られる。SC11・12ともに、壁面がわずかに張り出す箇所がある。これはいわゆる連結土坑のブリッジの残骸かと思われる。埋土中には炭化物がわずかに混じる。

A-2類

【SC13～17・SC18～27】(第41・42図) 丘陵頂部にあたる、A1・A2区境で検出された。東南側は調査区境に接するため、調査できなかつたが、炉穴の延びる向きと出土遺物の共通などから、一群をなす炉穴と思われる。長軸方向は、丘陵南の谷の方向に直交する。各炉穴は、主穴の切り合いが著しく、またVII層まで削平された箇所であったため、本来の遺構規模は不明確である。長軸は、おおむね2mを越え、断面形はU字状をする。SCI9は、その上部に散礫がのっており、遺構の保存は良好であった。

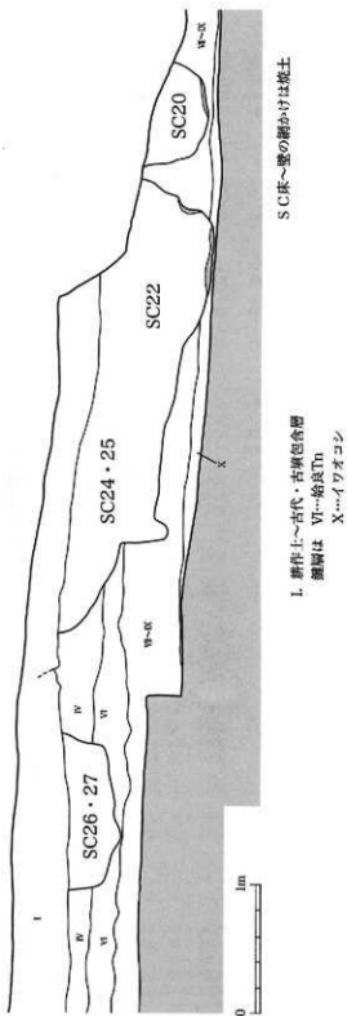


第39図 土坑A-1類実測図



第40図 土坑A-2類実測図

第41図 土坑A-2類ほか土壙断面図



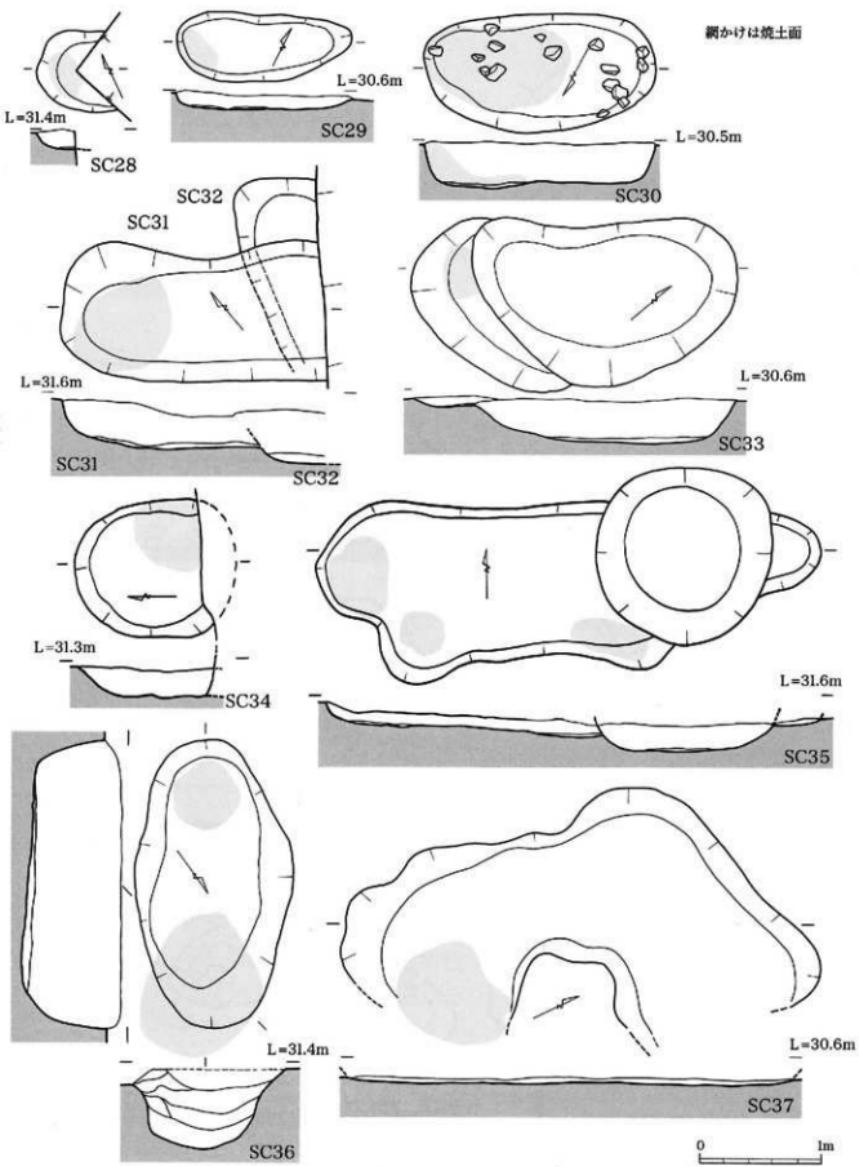
断面は円筒形で床～壁面下部に焼土面が広がっていた。埋土は下部にいくほど黒みを増した。

なお、古墳周溝壁面や削平された墳丘部分にも、配置パターンA-2類の炉穴群が確認された。これらの多くについては、古墳周辺の保存の方向性が出た段階で、平板図に位置のみ記録するにとどめた。掘削をおこなったのはSC31・32のみである。

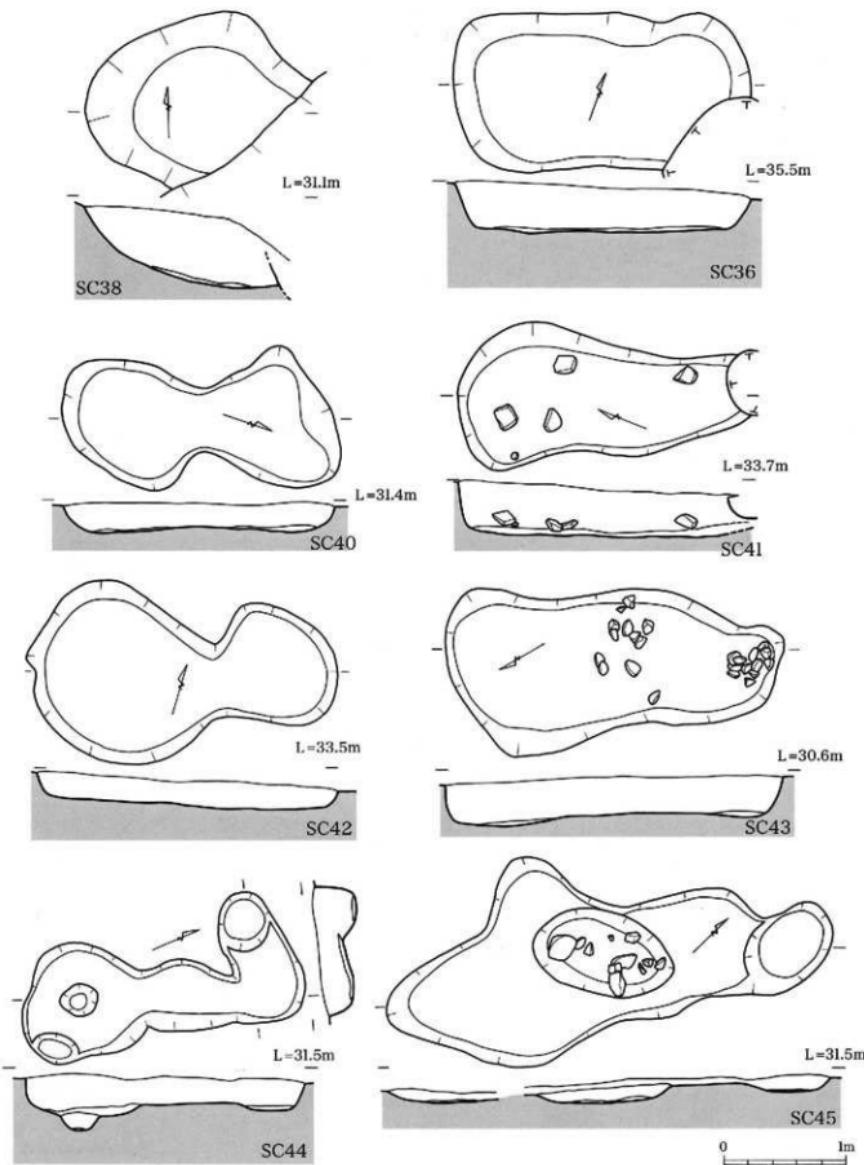
【SC31・32】(第42図) 古墳の周溝によって、南側を削られている。周溝壁面に浅いU字状の焼土面が確認され、炉穴とわかった。焼土面は、炉穴床面から壁面まで広範囲に広がっていた。埋土中には数多くの赤化砾のほか、若干の土器が混じっていた。

第18表 土坑観察表

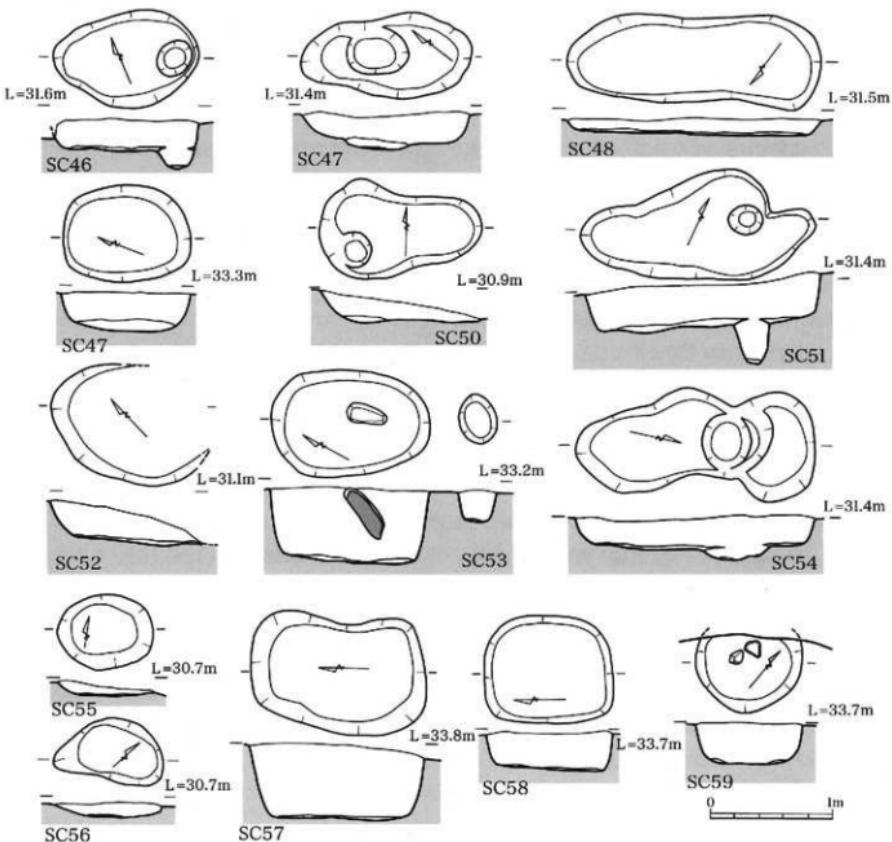
通漬面積(m)							通漬面積(m)							
No.	長径	短径	掘深	底土面	分類	出土遺物	No.	長径	短径	掘深	底土面	分類	出土遺物	備考
SC1	2.56	2.48	-	あり	A-1		SC1~12は一連の土坑	SC28	0.68	0.68	0.18	あり	C	複乱層しい
SC2	1.76	1.40	-	あり	*		埋土中の標は旧石器 II 埋葬群の散落か	SC29	1.44	0.60	0.16	*	*	
SC3	2.10	1.26	-	*	横円押型文 (183)		底面に小ピットあり	SC30	1.90	1.20	0.40	*	*	埋土上部に埋16点含む
SC4	2.40	1.34	-	*			埋土中の標は旧石器 II 床面に點3点あり	SC31	2.20	1.20	0.46	*	B	田村式(187) 古墳周溝
SC5	3.40	2.34	-	*			床面に縦1点あり	SC32	1.50	0.80	0.60	*	*	田村(189) 前期遺物を含む
SC6	1.36	1.30	-	*			SC7との切り合い不明	SC33	2.20	1.36	0.34	*	*	森(190) 雪舟(188) 平底底部(191)
SC7	0.76	0.40	-	*			SC6との切り合い不明	SC34	1.32	1.12	0.32	*	C	
SC8	3.86	1.70	-	*	鰐石(502)			SC35	4.16	1.52	0.36	*	B	後時期の土机に切られる
SC9	1.84	0.98	-	*			土坑縁にピット状のものあり	SC36	2.40	1.32	0.88	*	C	
SC10	3.56	1.20	-	*			土坑縁底面にピットあり	SC37	3.96	2.20	0.34	*	B	横円押型文 (192) 二次加工剥片 (404)
SC11	3.14	1.16	-	*			土坑縁底面にピットあり	SC38	1.66	1.36	0.76	*	C	
SC12	2.34	1.04	-	*				SC39	2.46	1.32	0.44	*	*	後世層に切られる 複乱層しい
SC13	2.18	1.26	-	A-2			SC13~27は一連の群 堆出面は長く残存非常に悪い	SC40	2.28	1.20	0.28	*		
SC14	2.76	1.26	-	*			埋土上部に縫あり	SC41	2.40	1.22	0.48	*	鰐石(509)	床面縫4点あり
SC15	2.00	0.96	-	*			埋土上部に縫あり	SC42	2.56	1.52	0.34	*		
SC16	2.48	1.26	-	*			埋土上部に縫あり	SC43	2.80	1.40	0.46	*	沈透文ある土器 (193) 石器(387)	埋土上部に埋24点含む
SC17	1.04	0.64	-	*				SC44	2.32	1.10	0.52	*		床面・土坑縁にピット状のものあり
SC18	1.28	0.84	-	*				SC45	3.66	1.70	0.30	*		埋土上部に埋11点含む 床面・土坑縁にピット状のもの 土坑縁にピット状のもの
SC19	1.30	1.16	-	*	手向山式 (184) 石核(400) 打製石斧 (441) 鮎石			SC46	1.20	0.62	0.52	*		土坑中央に深い落ち込み
SC20	0.96	0.90	-	*				SC47	1.40	0.72	0.38	*		
SC21	2.40	1.20	-	*				SC48	2.10	0.78	0.28	*		
SC22	2.96	0.96	-	*				SC49	1.04	0.82	0.22	*		土坑縁にピット状のものあり
SC23	1.86	1.04	-	*				SC50	1.34	0.82	0.30	*		土坑縁にピット状のものあり
SC24	1.86	0.90	-	*				SC51	1.94	0.94	0.68	*		土坑縁にピット状のものあり
SC25	2.20	1.20	-	*	貝殻条痕 (185-186)			SC52	1.30	1.02	0.46	*		
SC26	2.68	1.16	-	*	打製石斧 (419-431)			SC53	1.30	0.90	0.70	*		埋土上部に埋1点含む
SC27	1.06	0.80	-	*				SC54	1.96	0.90	0.36	*		土坑中央に深い落ち込み
								SC55	0.80	0.62	0.16	*		削平層しい
								SC56	0.90	0.52	0.18	*		削平層しい
								SC57	1.46	1.06	0.64	*		
								SC58	1.06	0.90	0.36	*		
								SC59	0.86	0.70	0.34	*		埋土上部に埋2点含む



第42図 土坑B・C類実測図 (1)



第43図 土坑B・C類実測図 (2)



第44図 土坑B・C類実測図（2）

B類（第43～45図）

【SC37】 A2区丘陵東の落ち際で検出され、表土除去時点では、赤化礫の散在する状況であった。赤化礫を露出させる過程で、多くの炭化物や焼土、焼土面の広がりが検出されたため、炉穴の可能性を想定し掘り下げた。長軸方向を追うと90°近く曲がることから、切り合った複数の炉穴の可能性も予想されたため、配置パターンのB類に含めた。

C類（第43～45図）

土坑形状は椭円形のものが多く、ほか円形・隅丸方形のものも少量みられる。焼土のないもの・遺物の伴わないものも少なくなく、それらの性格づけなど不詳な点が多い。

5 繩文土器

縄文土器は試掘調査・確認調査の結果より、当初は縄文時代早期～後期の土器が検出されることが予想された。本調査に入り、表土を剥ぐと層序（第V章）で記述したように調査地は削平を受け、鬼界アカホヤ火山灰層を含む上位層の残存状態が悪いことがわかった。このことは、縄文時代以前の土器が本遺跡では中心になることを意味していた。また、古墳時代以降の遺構の密度が比較的高く、その掘り込みの底面（遺構底面）が縄文時代の遺構や縄文包含層に達していることにより、原位置を保持していない縄文土器が多いことも予想された。

本遺跡での縄文土器の出土・採集は、縄文時代の遺構・縄文包含層・古墳時代以降の遺構・耕作土（造成土を含む）・地表面からなどに大別される。縄文土器は出土遺物の中で点数は最も多く、多量である。ここでは出土した縄文土器のうち168点を掲載した。

掲載の方法は以下のようにした。まず、掲載した縄文土器を「遺構に伴うかどうか」の観点で、A「遺構出土の縄文土器」とB「遺構外出土の縄文土器」に2分割した。A「遺構出土の縄文土器」は縄文時代の遺構と考えられる集石遺構・炉穴・散疊について①集石遺構出土の縄文土器、②土坑出土の縄文土器、③散疊出土の縄文土器の順に記述する。B「遺構外出土の縄文土器」は縄文包含層や古墳時代以降の遺構出土の縄文土器、表面採集などの縄文土器である。縄文時代早期・縄文時代前期・その他の時期に区分して、形態・文様などについて分類して記述する。（分類については後述する。）縄文土器の部位・出土地点・サイズ・文様・調整などの詳細については「縄文土器観察表（1）～（6）」を作成した。また、実測図中の土器の傾きについては、小片や脛部片などを中心に不確定なものがある。

A 「遺構出土の縄文土器」

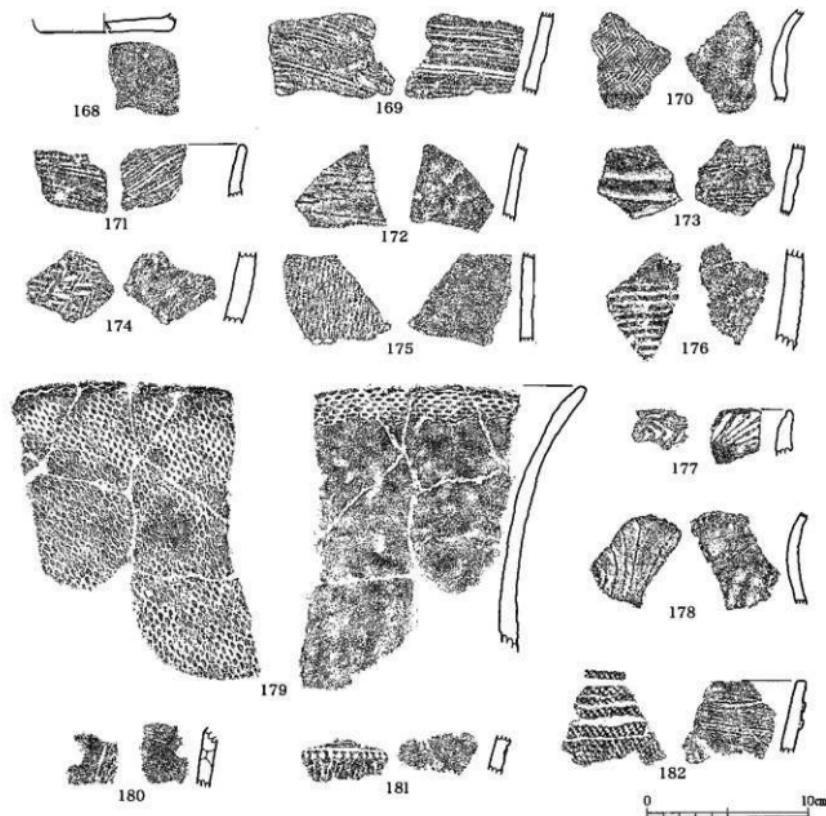
「遺構出土の縄文土器」は縄文時代の遺構の時期を判断する材料の一部になると見え、遺構ごとに掲載した。時期の情報としては埋土からの出土であるものや括資料として取り上げているものが多いことなどから、活用が難しい部分もある。また、遺構の埋土からの出土であっても出土状況がはつきりとしていないものや遺構そのものの判断に迷うもの（竪穴住居跡）についてはここに含めていないものもある。

① 集石遺構出土の縄文土器

集石遺構の多くは層位的には前述のように縄文時代早期である可能性が高いため、それに伴う縄文土器も縄文時代早期の土器が出土すると考えられた。168～182が集石遺構から出土した縄文土器であり、集石遺構の隙間や掘り込みの埋土に含まれていた。168～175は集石遺構A類からの出土である。168はSI3から出土し、風化が著しく調整は不明であるが平底の底部である。169はSI4から出土し、170・175はSI6から出土した。169は内・外面ともに貝殻条痕をもつ。170は脣部屈曲部付近であり、外面に押型文（菱形）を施し、内面には指頭痕が残る。175は外面に捺糸文を施し、器壁がやや厚い。171～174はSI20から出土した。171は内・外面ともに貝殻条痕をもつ。172は外面にヘラ状工具による微隆起線文を施し、内面に指頭痕が残る。173は外面に棒状工具による沈線を2条施す。174は外面に山形押型文を施す。176は集石遺構B類のSI9から出土し、外面に条痕文を施す。器壁はやや厚い。177～180は集石遺構C1類からの出土である。177・178はSI8からの出土し、177は外面に山形押型文を施し、内面には原体によると思われる条痕が残る。178は外面にヘラ状工具による微隆起線文を施す。

し、内面に指頭痕が残る。179はSI1からの出土であり、外面及び内面上部に橢円押型文を施す。他にも同一個体と思われる土器片が出土している。180はSI38からの出土であり、外面に沈線文・撲糸文を施し、円形の穿孔をもつ。181・182は集石遺構C2類のSI49からの出土である。181は外面に沈線文・連点文・撲糸文を施す。182は外面に隆（起）帶を貼り付け、その後に縄文を施す。縄文は口唇部にも残る。

出土した縄文土器と集石遺構A類～D類までの分類との間にははっきりとした関連や時期差を見い出すことはできなかったが、集石遺構から出土した縄文土器は縄文時代早期中葉～縄文時代前期のものである。



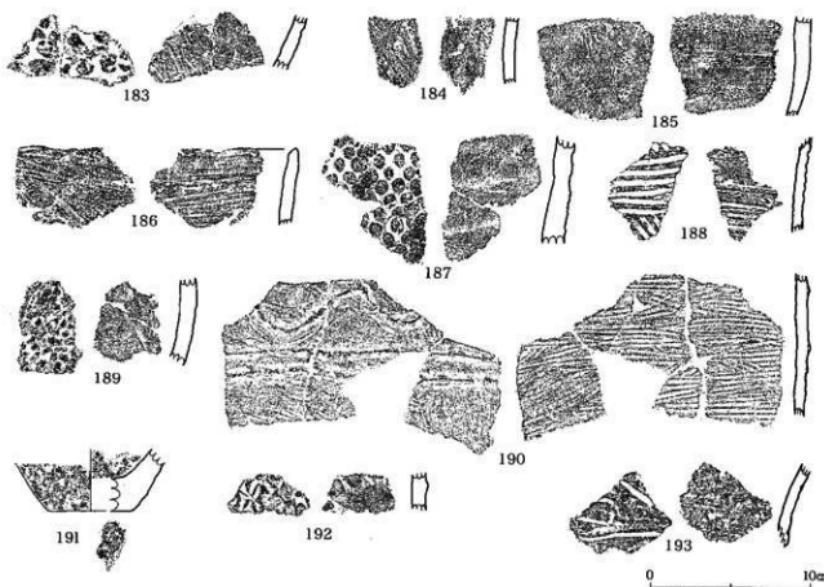
第45図 縄文土器実測図（1）

② 土坑出土の縄文土器

土坑の時期も集石遺構と同じく、層位的に判断すると縄文時代早期が中心であると考えられる。また、集石遺構や散礫の下から検出されているものがあることから、それらの時期よりも少なくとも新しくないことが考えられる。

183～193は土坑から出土した縄文土器であり、土坑の底面・壁面や埋土などに含まれていたものである。183は土坑A1類のSC3から出土し、外面に楕円押型文をもつ。184～186は土坑A2類からの出土である。184はSC19から出土し、外面にヘラ状工具による微隆起線文をもつ。185・186はSC26からの出土である。185は無文の土器と考えられる。186は内・外面上に貝殻条痕をもつ。187～192は土坑B類からの出土である。187は切りあう土坑のSC31から出土し、外面に比較的大きな楕円押型文を施す。器壁も厚い。188～191はSC33からの出土である。188は外面に列点文・横及び斜方向の沈線文を施し、胎土に滑石が含まれる。189は外面に楕円押型文をもつ。190は内・外面上を条痕により調整し、外面に曲線と直線（2条）の断面が三角形の突帯を貼り付ける。他にも同一個体と思われる土器片が出土している。191は風化が著しく調整は不明であるが、平底の底部である。192はSC37から出土し、外面に楕円押型文を施す。193は土坑C類のSC43から出土し、内・外面上を条痕により調整したのち外面に曲線と直線の沈線文を施す。

土坑から出土した縄文土器の時期は、集石遺構から出土した土器と同じく縄文時代早期中葉～縄文時代前期である。



第46図 縄文土器実測図（2）

第19表 繩文土器観察表(1)

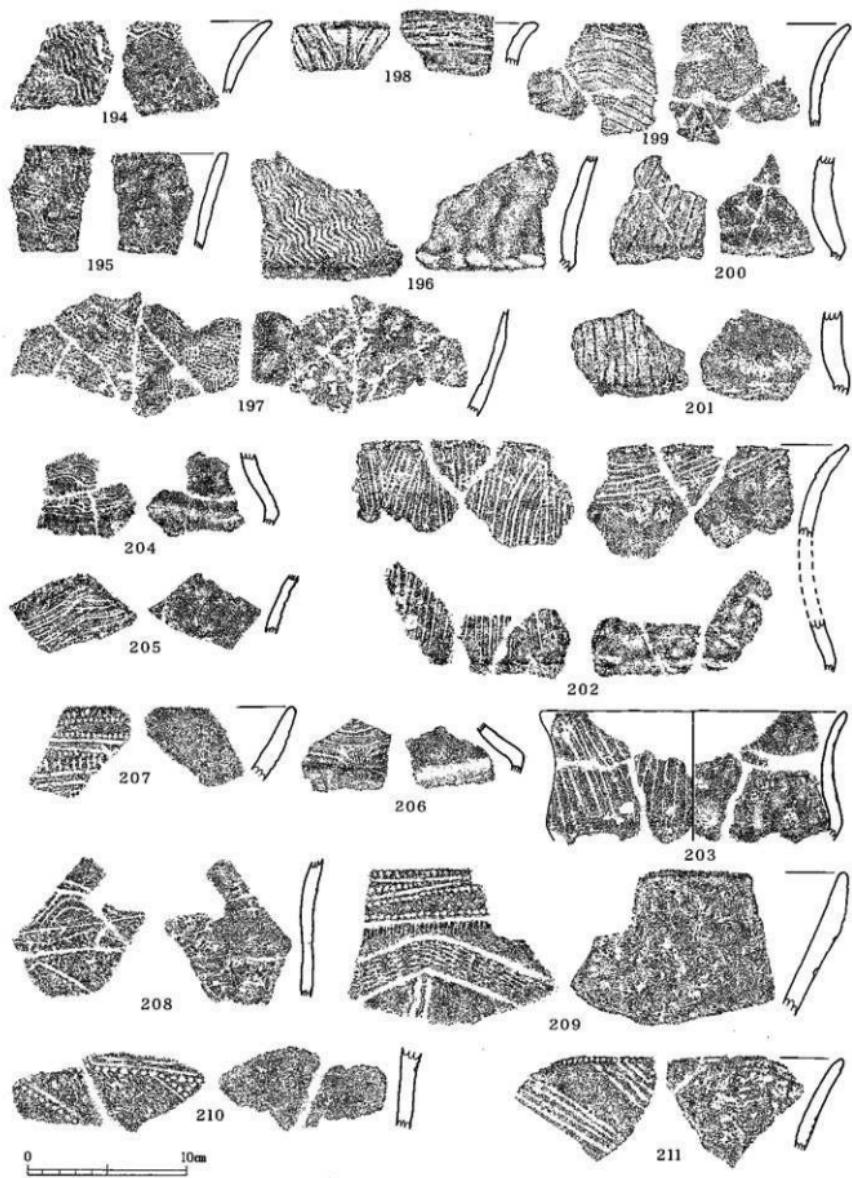
測定=cm

測定番号	種類	地、位	法 量	寸法・調査・文様ほか		地土の特徴	備 考	
				外 面	内 面			
168	深鉢	底部	(8.2)	S33	高さ高い 化成高い	ナテ オリーブ黒	1mm以下の黄褐色 乳白色	平底
169	深鉢	底部		S34	高さ高め 貝殻痕有	に少し黃 暗灰黄	1mm以下の乳白色 暗褐色	スス付痕
170	深鉢	底部		S35	円形S(縦縫)	ナテ 暗	1.5mm以下の金色 無色透明光沢 乳白色	手向山 指痕痕
171	深鉢	口縁部		S37	貝殻痕有、ナテ	貝殻痕有 灰黄褐	2mm以下の灰色 灰褐色、暗褐色 乳白色	貝殻痕文系
172	深鉢	口縁部		S37	側縫起線文(ヘラ状工具)	ナテ 暗	2mm以下の深黄色 灰角、褐色	手向山 指痕痕
173	深鉢	底部		S37	波状(凹)文(摩状工具)	ナテ 暗、黃褐色	3mm以下の灰色 灰白色、乳白色 無色透明光沢	指痕痕
174	深鉢	底部		S37	山形押文	ナテ に少し黃 暗	3mm以下の灰色 灰角、2mm以下の乳白色 乳白色	指痕痕
175	深鉢	口縁部		S38	波状文	ナテ に少し暗 に少し黃	2mm以下の灰色 乳白色	船元
176	深鉢	底部		S39	高底火	ナテ に少し暗	2mm以上の褐色 2mm以下の乳白色 乳白色	
177	深鉢	口縁部		S26	山形押文	原体高橋 に少し暗	2.5mm以下の褐色 1mm以下の微細な 灰色斑点	山形押文系
178	深鉢	底部		S26	側縫起線文(ヘラ状工具)	ナテ に少し黃	5mm以下の灰色 乳白色 3mm以下の灰色斑点	手向山 指痕痕
179	深鉢	口縁部		S35	側縫起線文	ナテ に少し黃 暗	側縫起線文 2mm以下の柱状乳白色斑点	側縫起線文 側縫起線文、スス付痕
180	深鉢	口縁部		S36	波状文、波文(平行)	ナテ に少し暗 暗	に少し黃 1mm以下の乳白色 乳白色	高ノ神 押えあり
181	深鉢	口縁部		S49	高底火、波線文、圓火文	ナテ 灰黄褐	に少し黃 0.5~1mmの透明光沢 褐色、乳白色	高ノ神
182	深鉢	口縁部		S49	點付火、圓火文	ナテ に少し火	1mm以下の灰色 乳白色 2mm大の黑色斑点	船元 H19、スス付痕
183	深鉢	底部		SC3	楕円押文	ナテ に少し黃	に少し黃 4mm以下の大褐色 3.5mm以下 の灰色斑点	楕円押文系
184	深鉢	底部		SC19	側縫起線文(ヘラ状工具)	ナテ 暗	2mm以下の灰色 乳白色 1mm大の灰色	手向山
185	深鉢	口縁部		SC26	ナテ	暗	2mm~4mmの大灰色 乳白色 1mm以下の灰色 乳白色	
186	深鉢	口縁部		SC26	圓火文	ナテ 暗	1mm以下の灰色 乳白色 ナテ 暗	圓火文系
187	深鉢	底部		SC26	周縫火文	貝殻痕有 ナテ 暗	オリーブ 暗	スス付痕
188	深鉢	底部		SC31	楕円押文	ナテ 暗	に少し黃 7.5mm以下の褐色 乳白色 2mm以下の乳白色	楕円押文 田村
189	深鉢	底部		SC33	波状文、波点(刷毛文)	ナテ に少し黃	に少し黃 4mm以下の大灰色 乳白色 1mm大の灰色	指痕痕
190	深鉢	底部		SC33	點付火、系縄、ナテ	ナテ 黑褐	5mm以下の灰色 乳白色 2mm以下の乳白色 2mm以下の灰色	指痕痕
191	深鉢	底部	(5.2)	SC33	化成高い	ナテ 暗	3mm~5mmの大灰色 乳白色、無色 無色	平底
192	深鉢	底部		SC37	楕円押文	ナテ に少し黃 に少し黃	に少し黃 5mm以下の灰色 乳白色、無色	楕円押文
193	深鉢	底部		SC43	波状文	ナテ 暗	5mm以下の乳白色 無色透明光沢	

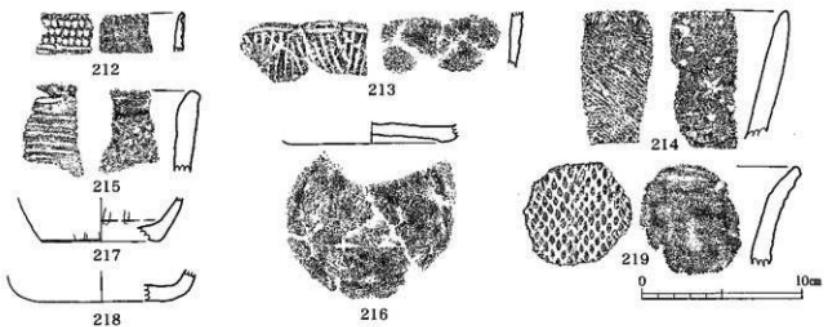
③ 散縛出土の繩文土器

194~224は散縛から出土した繩文土器であり、縛間や埋土に含まれていたものである。

194~219は散縛1からの出土である。194~197は外面に斜方向に山形押型文を施す。198~201は外面にヘラ状工具による微隆起線文を施すが、198は綾杉状・199は波状・200は斜方向・201は綾方向である。202・203は外面に綾杉状の沈線文を施す。204は外面に波状の沈線文を施す。205・206は外面に工具は不明であるが曲線を残す。198は内面にも微隆起線文を、202は沈線文(曲線)を施す。194~203の土器は195以外は口縁部が外反し、胴部中央部付近が張り出す屈曲した器形をしていると考えられる。207~211は連点文・沈線文・繩文・刻目文などで構成され、口縁部に刻目を持つ土器である。207は連点文・沈線文・刻目文などで構成される。208は沈線1条単位で直線・曲線が施文されている。209は沈線の区画に繩文が充填される。器壁は厚い。210・211は連点文・沈線文で構成される。212は外面に棒状工具による列点文・短沈線文や口縁部付近に連点文を施す。胎土には滑石が含まれ、器壁はうすい。213は横・斜方向の沈線を外面に施し、器壁はうすく、胎土に滑石は含まれない。214は外面に燃糸文を施し、口縁部に刻目をもつ。器壁は厚い。215は外面に貝殻条痕文を施す。216~218はいずれも平底の底部である。216は上げ底氣味であり、217は工具痕?が残る。219は円盤の可能性もあるが、外面に楕円押型文を施し、外反した口縁部をもつ土器片であると判断した。散縛1の土器の時期は194~211・214~216・219は繩文時代早期に、212・213は繩文時代前期に相当すると考えられる。



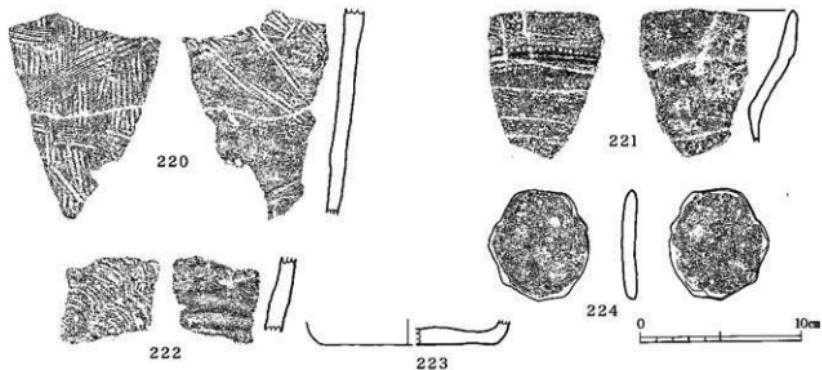
第47図 繩文土器実測図（3）



第48図 縄文土器実測図 (4)

220～224は散縄2から出土した土器であり、散縄1と同じく縄間や埋土に含まれていたものである。220は内外面に貝殻条痕が残る。貝殻条痕は外面は縱方向のち斜・横方向に施し、内面は上部にだけ調整する。器壁はやや厚い。221は頸部付近で外反し開いた器形をしている。外面に連点・沈線に幾何学文を施す。222は外面に変形撚糸文を施し、内面はで調整している。223は平底の底部であり、指頭痕が残る。224は円盤である。内外面ともにナデで調整した無文の土器を加工し、転用している。散縄2の土器の時期は220は縄文時代前期に、221～223は縄文時代早期に相当すると考えられる。

なお、掲載はしていないが、散縄3からは山形押型文をもつ土器・条痕文をもつ土器・四角文(沈線)もつ土器などの細片が、散縄4からは無文の土器などの細片が出土している。



第49図 縄文土器実測図 (5)

第20表 繩文土器観察表(2)

注記=CR

遺物 番号	縄文 部	地 質	出土 位置	手法・調査・文様ほか		色 調	地土の特徴	備 考
				外 面	内 面			
194 深鉢 口縁部			数寄1 山形押型文	山形押型文、 山形印文	に少し黄褐色 に少し黄褐色	5mm以下の浅黄色、灰白色、灰褐色、 黑色、黑色光沢無	山形押型文	
195 深鉢 口縁部			数寄1 山形押型文	ナテ	に少し黄褐色	2mm以下の灰白色、褐色、黑色光沢無	山形押型文	
196 深鉢 脚部			数寄1 山形印文	ナテ	に少し黄褐色 浅灰色・褐色	6mm以下の褐色、4mm以下の灰 色光沢、黑色光沢無	山形印文	細緻感
197 深鉢 脚部			数寄1 山形印文	ナテ	に少し黄褐色	6mm以下の灰褐色、4mm以下の灰 色光沢、1mm以下の黑色光沢	手向山	細緻感
198 深鉢 口縁部			数寄1 微隆起線文(ヘラ状工具) ウツクシ文、ナテ	に少し黄褐色	褐色	2mm以下の白色、黄色、黑色光沢	手向山	
199 深鉢 口縁部			数寄1 微隆起線文(ヘラ状工具)	ナテ	に少し黄褐色	2mm以下の浅黄色、1mm以下の白色 透明光沢無	手向山	
200 深鉢 脚部			数寄1 微隆起線文(ヘラ状工具)	ナテ	に少し黄褐色	4mm以下の白色、3mm以下の灰白色 2mm以下の黑色光沢	手向山	
201 深鉢 脚部			数寄1 微隆起線文(ヘラ状工具)	ナテ	に少し黄褐色	4mm以下の白色、2mm以下の黄色 白色、黑色光沢有(柱状)	手向山	
202 深鉢 口縁~ 脚部			数寄1 沈文(一方向)	沈文、ナテ	に少し黄褐色	3mm以下の褐色、1mm以下の浅黄色 褐色	手向山	細緻感
203 深鉢 口縁部 (15.5)			数寄1 沈文(一方向)	ナテ	に少し黄褐色	4mm以下の褐色、灰白色、2mm以下の 黑色光沢	手向山	
204 深鉢 脚部			数寄1 沈文(一方向)	ナテ	に少し黄褐色	3mm以下の白色、褐色、黑色光沢	手向山	
205 深鉢 脚部			数寄1 沈文	ナテ	に少し黄褐色	3mm以下の褐色、灰褐色、乳白色	手向山	細緻感
206 深鉢 脚部			数寄1 沈文	ナテ	褐色	1mm以下の白色、黑色光	手向山	
207 深鉢 口縁部			数寄1 透文、三線文、横文、 羽目(口縫)	ナテ	に少し黄褐色	3mm以下の黄褐色、灰白色	手ノ神	
208 深鉢 脚部			数寄1 透文(一方向)	高化成しい透	透	3.5mm以下の褐色、2mm以下の褐色 透、1mm以下の白色、褐色光沢	手ノ神	
209 深鉢 口縁部			数寄1 透文、沈文、透点文(透) 透(足跡)、透(目)	ナテ	褐色	3mm以下の褐色、透	手ノ神	
210 深鉢 脚部~ 底部			数寄1 透文、透点文	ナテ	に少し褐色	3.5mm以下の褐色、2.2mm以下の 褐色透、2mm以下の白色光沢	手ノ神	
211 深鉢 口縁部			数寄1 文(一方向)、呂目 (口縫)	ナテ	に少し黄褐色 黒褐色	3mm以下の褐色、2mm以下の白色 褐色、1mm以下の白色透光沢	手ノ神	
212 深鉢 口縁部			数寄1 文(透)、沈文、透点文 (口縫)	ナテ	褐色	2mm以下の白色、灰白色(呂目入り)	手ノ神	
213 深鉢 脚部			数寄1 文(一方向)	ナテ	透黄褐色	3mm以下の透黄褐色、透	手ノ神	
214 深鉢 口縁部			数寄1 文(透)、呂目(口縫)	ナテ	に少し褐色	1mm以下の褐色、1mm以下の白色 透	透文	
215 定深 口縁部			数寄1 文(透)	ナテ	に少し褐色	2mm以下の白色、乳白色、黑色光沢	透文底文系	
216 深鉢 底部	(9.5)		数寄1 ナテ	ナテ	に少し黄褐色	3mm以下の白色透光沢、1mm以下の 白色光沢、1mm以下の白色透光沢	透底文系	
217 深鉢 底部	(7.6)		数寄1 ナテ	ナテ	に少し黄褐色	2mm以下の白色、灰褐色、褐色	工芸文	
218 深鉢 底部	(10.4)		数寄1 高文、ナテ	ナテ	に少し褐色	1mm以下の灰白色、褐色、1mm 以下の褐色透	高文	
219 深鉢 口縁部			数寄1 月形押型文	ナテ	に少し黄褐色	5.5mm以下の黄褐色、灰白色、黑色 透	月形押型文	指揮感・円潤?
220 深鉢 脚部			数寄2 共通底文	月形底文、ナテ	に少し褐色	1mm以下の灰白色、褐色	月石模	
221 深鉢 脚部			数寄2 沈文、透網刻文	ナテ	に少し褐色	1mm以下の白色、黑色光沢	半透	
222 深鉢 脚部			数寄2 变形圓文	ナテ	に少し黄褐色	3mm以下の白色、2mm以下の白色 透	透文	
223 深鉢 底部			数寄2 ナテ	ナテ	透	3mm以下の白色、2mm以下の褐色 透、白色透	手向山	細緻感
224 内縫			数寄2 ナテ	ナテ	透黃・暗灰黄	2.5mm以下の明黄色、1.5mm以下の 白色、黑色光沢	透底文	

B「遺構外出土の縄文土器」

「遺構外出土の縄文土器」は次のように I ~ VII類に分類した。分類の I ~ IV類は縄文時代早期に、V ~ VI類は縄文時代前期に、VII類はその他の時期に相当すると考えられる。

○I類

押型文を主文様にしていると考えられる土器である。文様を観点にして細分すると外面に「楕円押型文をもつもの」、「山形押型文をもつもの」、「微隆起線文・沈線文をもつもの」などにさらに分類できる。器形は尖底の深鉢形と口縁部が外反し胸部に屈曲部がある平底の深鉢形のものに2分割できると思われる。I類に相当する土器は縄文時代早期中葉のものと考えられる。

○II類

特徴として「口縁部が開いている」深鉢形の器形であり、基本的な文様としては連点文、貝殻条痕文、沈線文、燃糸文、縄文、刻目文などで構成され、口唇部に刻目などを持つ土器である。風化が著しく、胎土はあまり良くないものが多い。さらに、沈線文の区画に燃糸文を充填するタイプや沈線(直線や曲線)や刺突による幾何学文をもつタイプなどに細分していくことができる。II類に相当する土器は縄文時代早期後葉のものと考えられる。

○III類

縄文や撚糸文を外面に主文様として施すものである。口縁部が外反しており、器壁はやや厚いものが多い。

○IV類

口縁部付近に貝殻刺突文を施し、楔形突帯を貼り付け、胴部に縱方向の貝殻刺突文をもつ土器である。

IV類に相当する土器は縄文時代早期前葉のものと考えられる。

○V類

貝殻条痕文（条痕文）や微隆起線文などを器面に広く施す土器である。口縁～胸部にかけて1～数条の隆帯・微隆起帯を貼り付ける。また、口唇部に刻目を有するものもある。器壁はややうすい。V類に属する土器中には縄文時代早期の土器が含まれる可能性や時期が縄文時代早期に遡る可能性がある。

○VI類

文様は沈線や刺突などによる幾何学文である。器壁はうすく、焼成も良好なものが多い。さらに胎土に滑石が含まれるものと言まらないものに分類できる。

○VII類

I類～VI類に分類できない土器である。

① 縄文時代早期の土器

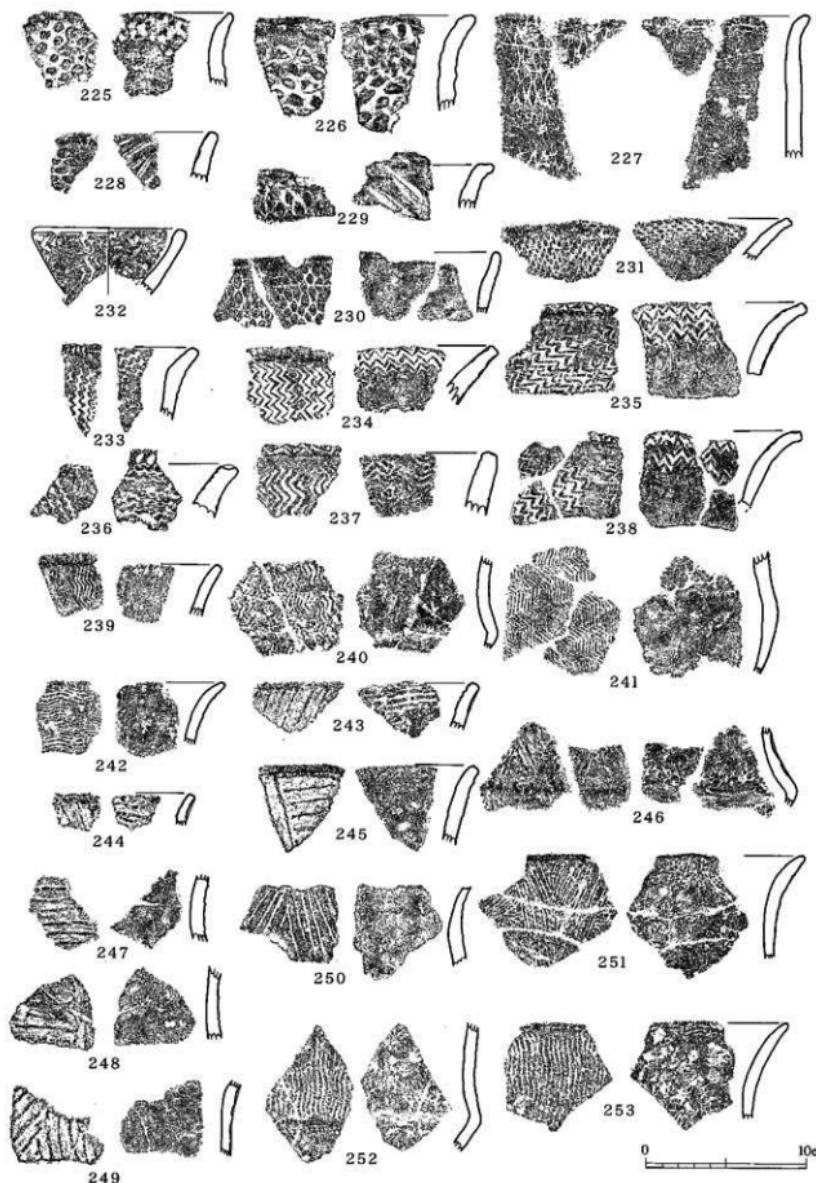
225～258はI類に相当する縄文土器である。225～231は外面に楕円押型文を施す。226は内面にも広く楕円押型文を施すが、225・231は内面口縁部付近にのみ楕円押型文を施す。228・229は内面に原体による条痕が残る。

232～242は外面に山形押型文を施す。232～234・239・240は縱方向、他は斜方向である。233～238は内面にも山形押型文を施す。236は口唇部に刺突文も残る。243～249はヘラ状工具による横・斜方向の微隆起線文を外面に施す。250・251は外面に綾杉状の沈線文を施す。252・253は外面に「ト」形の押型文を施す。文様や胎土の様子から同一個体の可能性がある。254・255・257は棒状工具によるやや幅広の沈線文を施す。256は上部に縄文、下部に山形押型文を施す。258は平底の底部であり、やや上げ底気味である。器形は232は浅鉢、239～258は胸部中央部付近が張り出し屈曲した深鉢であると考えられる。

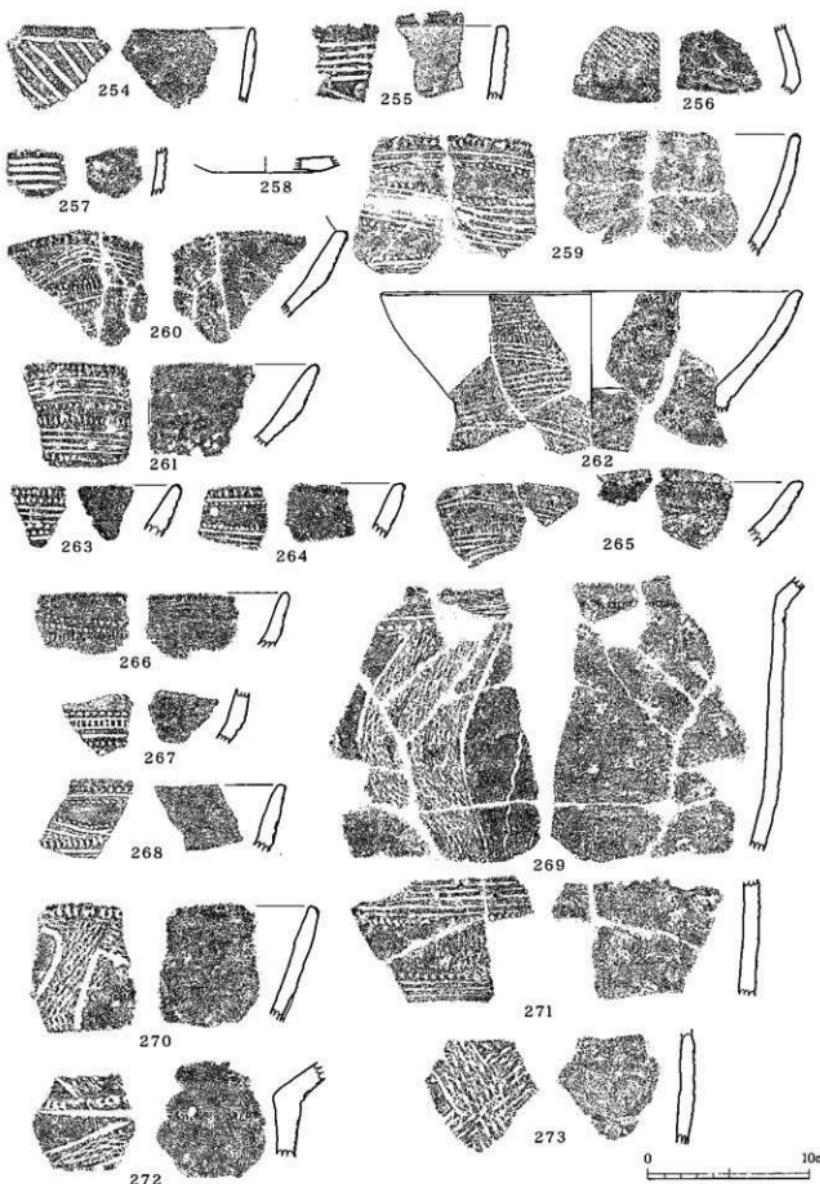
259～282はII類に相当する縄文土器である。259～268は外面が沈線文・連点文・刻目（文）などが施文される。269～276は外面に沈線文の区画に撚糸文または縄文が充填される文様をもつ。277は網目状撚糸文を施す。278・280は沈線文を施す。278は1条単位で構成されているが、280は数条単位で構成されている。279は外面に貝殻押引文を施す。281・282は沈線文（波状）・刻目（口唇）が施文される。

283～291はIII類に相当する縄文土器であるが、I類に相当する土器が混じる可能性がある。283～287は外面に撚糸文を施す。286は撚糸文の下に条痕調整を残す。288～291は外面に縄文を施す。288は内面口縁部付近にも縄文を施し、口唇部には刻目が残る。290と291は外面に疎に縄文を施している。291は口唇部に刺突文を施し、内面に赤色の物質が付着している。290と291は文様と胎土の様子から同一個体かもしれない。

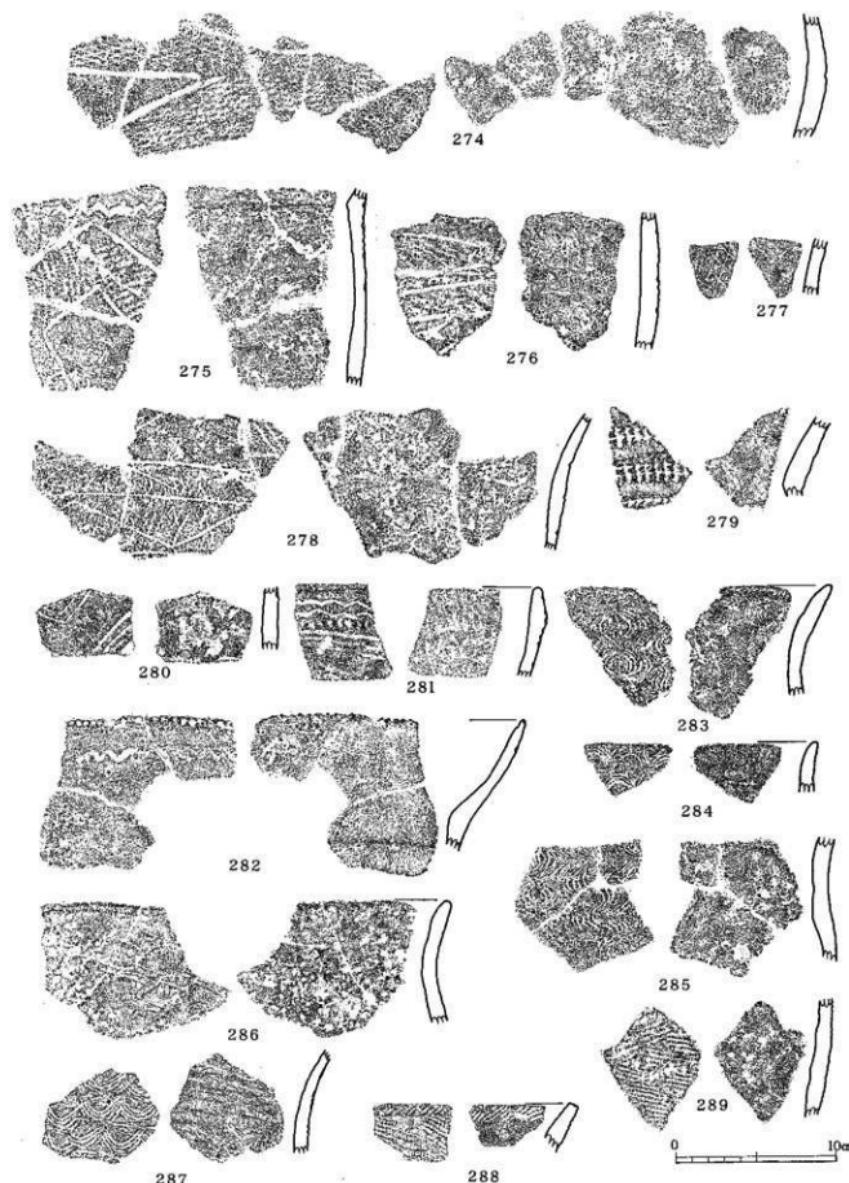
292は1点だけであるがIV類に相当する縄文土器である。外面に縱方向に貝殻刺突文を施し、楔形突帯（下半部だけ）を貼り付ける。器形は角筒の深鉢であり、部位は口縁部の下端付近と思われる。



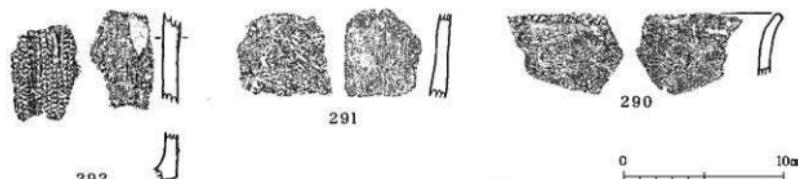
第50図 縄文土器実測図 (6)



第51図 縄文土器実測図 (7)



第52図 繩文土器実測図 (8)



第53図 繩文土器実測図 (9)

第21表 繩文土器観察表 (3)

法線 = cm

遺物 番号	部 位	法 線 外側 内側	手法・調査・文様ほか		底土の特徴	備 考	
			外 面	内 面			
225	深鉢	口縁部	(SC15) 横円押型文	横円押文ナ	に小い黄面	3mm以下の灰白色・黑色光沢	横円押型文
226	深鉢	口縁部	A	横円押型文	横円押文	に小い縦	5mm以下の灰白色・黑色光沢
227	深鉢	口縁部	A	横円押型文	ナテ	弱小縫隙	3mm以下の灰白色・黑色光沢
228	深鉢	口縁部	A	横円押型文	底体全周	縫隙	横円押型文
229	深鉢	口縁部	SE2	横円押型文	底体全周.ナテ	に小い縦	に小い黄面
230	深鉢	口縁部	SC	横円押型文	ナテ	縦	3mm以下の灰白色・黑色光沢
231	深鉢	口縁部	H(2) 横円押型文・横円押型文(口縫)	横円押型文ナ	横・強	5mm以下の灰白色・黑色光沢	横円押型文
232	浅鉢	口縁部 (9.4)	SC	山形押型文	ナテ	縦	3mm以下の灰白色・黑色光沢
233	深鉢	口縁部	SC	山形押型文	山形押文ナ	に小い黄面	に小い黄面
234	深鉢	口縁部	SA7	山形押型文	山形押文	縦	3mm以下の灰白色
235	深鉢	口縁部	山形押型文・山形押型文(口縫)	山形押型文ナ	に小い黄面	に小い黄面	山形押型文
236	深鉢	口縁部	山形押型文・山形押型文(口縫)	山形押型文	に小い黄面	に小い黄面	山形押型文
237	深鉢	口縁部	(SA10) 山形押型文・山形押型文(口縫)	山形押型文	に小い縦	縦	9mm以下の灰白色・3mm以下の灰白色・黑色・黑色光沢
238	深鉢	口縁部	山形押型文・山形押型文(口縫)ナ	山形押型文ナ	に小い縦	4mm以下の灰白色	山形押型文
239	深鉢	口縁部	A	山形押型文	黒化著しい	に小い黄面	1mm以下の灰白色
240	深鉢	肩部	SA5	山形押型文	ナテ	に小い縦	に小い縦
241	深鉢	肩部	A	山形押型文	ナテ	に小い縦	灰黄色
242	深鉢	口縁部	A	山形押型文	ナテ	に小い黄面	4mm以下の灰白色・2mm以下の灰白色・黑色光沢
243	深鉢	口縁部	A	側面縫隙文(ハラツ工具)	無痕文.ナテ	に小い縦	1mm以下の灰白色・黑色光沢
244	深鉢	口縁部	A	側面縫隙文(ハラツ工具)	側面縫隙ナ	に小い縦	1mm以下の黑色
245	深鉢	口縁部	A	側面縫隙文(ハラツ工具)	ナテ	に小い黄面	3mm以下の灰白色
246	深鉢	肩部	SA7	側面縫隙文(ハラツ工具)	ナテ	に小い縫隙	5mm以下の灰白色・3mm以下の灰白色・黑色・黑色光沢
247	深鉢	肩部	SA7	側面縫隙文(ハラツ工具)	ナテ	に小い縫隙	3mm以下の灰白色・黑色光沢
248	深鉢	口縁部	A	側面縫隙文(ハラツ工具)	ナテ	に小い黄面	1mm以下の黑色
249	深鉢	肩部	SA2	側面縫隙文(ハラツ工具)	ナテ	に小い黄面	1mm以下の灰白色
250	深鉢		笠置文(レバ方向)	笠置文	に小い縫隙	2mm以下の灰白色・黑色・黑色光沢	手向山
251	深鉢	口縁部	A	笠置文(レバ方向)	底	縫隙	3mm以下の灰白色・黑色・黑色光沢
252	深鉢	口縁部	A	笠置文?	ナテ	に小い黄面	5mm以下の灰白色・灰白色・黑色光沢
253	深鉢	口縁部	A	高須文?(方)	ナテ	に小い黄面	に小い黄面
254	深鉢	口縁部	SA5	笠置文(一方向)	笠置文	に小い縫隙	4mm以下の灰白色・黑色光沢
255	深鉢	口縁部	A	笠置文	ナテ	に小い縫隙	2mm以下の灰白色
256	深鉢	肩部	SA2	高須文・山形押型文	ナテ	に小い黄面	2.5mm以下の縫隙・1mm以下の灰白色
257	深鉢	肩部	SA7	笠置文	ナテ	に小い黄面	4mm以下の灰白色・2.5mm以下の灰白色を有する
258	深鉢	(6.5)	A	ナテ	笠置文	ナテ	1mm以下の灰白色・1mm以下の灰白色・に小い縫隙を有する
259	深鉢	口縁部	A	通文、垂文、匂文、口縫(目)	ナテ	に小い黄面	3mm以下の灰白色・黑色・金色光沢を有する
260	深鉢	口縁部	A	笠置文、垂文、匂文、口縫(目)	ナテ	に小い縫隙	1mm以下の灰白色・縫隙の底面多く無む
261	深鉢	口縁部	SC	笠置文、尻文、匂文、口縫(目)	ナテ	に小い縫隙	1mm以下の灰白色
262	深鉢	口縫部	(25.7)	A	沈文、通文、垂文	ナテ	に小い黄面
263	深鉢		SN1	笠置文(通文、尻文、沈文)	黒化著しい	に小い黄面	2mm以下の灰白色・黑色・黑色光沢
264	深鉢	口縁部	SA4	通文、垂文、匂文	ナテ	に小い縫隙	0.5mm以下の灰白色
265	深鉢	口縫部	A	沈文、通文、匂文	ナテ	に小い縫隙	1mm以下の灰白色・黑色・黑色光沢
266	深鉢	口縫部	SA4	笠置文(通文、尻文、沈文)	底裏のナテ	に小い縫隙	3mm以下の灰白色・2mm以下の灰白色
267	深鉢	口縫部	SAB	通文、垂文、匂文	ナテ	に小い縫隙	2mm以下の灰白色・1.5mm以下のに小い縫隙・に小い縫隙・金色光沢
268	深鉢	口縫部	SAB	沈文、通文、垂文、匂文	ナテ	に小い縫隙	4mm以下の灰白色・2mm以下の灰白色

第22表 繩文土器観察表(4)

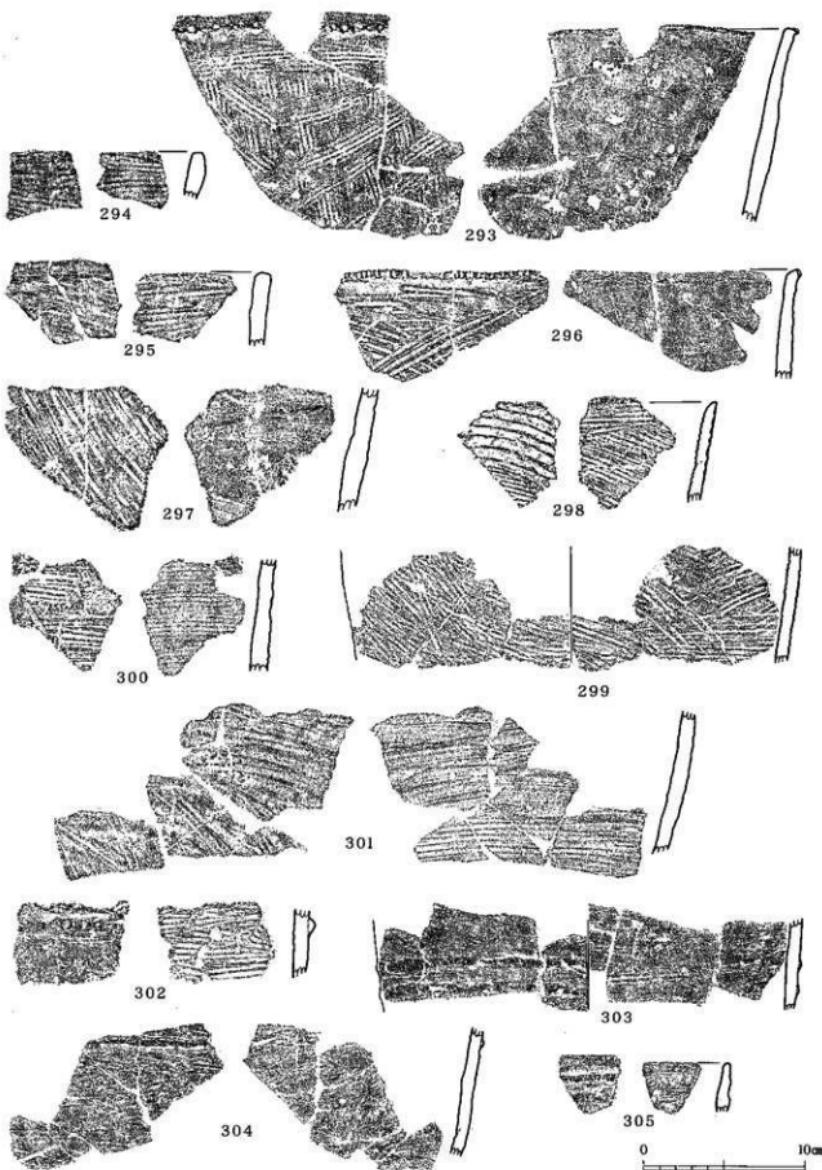
法面=cm

遺物 番号	部 位	法 面	出土 位置	手法・表面・文様ほか		色 質	地土の特徴	備 考
				外 面	内 面			
269	縄跡 口唇部		A	沈線文、波点文、斜角文 (光面)	ナデ	にかい(黄褐色)	5mm以下の黄色・黒褐色、3.7以下地 色透明光沢	■■■
270	縄跡 口縁部	SAS		沈線文、斜角(口唇)、斜 角文、(光面)	ナデ	にかい(暗)	5mm以下の黄色・黒褐色、5mm以下地 色透明光沢	■■■
271	縄跡 口縁部	A		沈線文、波点斜文、斜角文 (光面)	ナデ	にかい(黄褐色)	5mm以下の黄色・黒褐色、5mm以下地 色透明光沢	■■■
272	縄跡 口縁部	SA2		沈線文、竹節斜文、斜 角文(光面)	ナデ	にかい(黄褐色)	2mm以下の灰白色	■■■
273	縄跡 口縁部	SA7		沈線文、斜角文(光面)	ナデ	にかい(黄褐色)	1.5mm以下の灰白色・無色透明光沢、に かい(暗)	■■■
274	縄跡 口縁部	A		沈線文、斜角文(光面)	ナデ	にかい(赤褐色)	5mm以下の灰白色・2.5mm以下の黒 褐色	■■■
275	縄跡 口縁部	A		沈線文、斜角文(斜角文) (光面)	ナデ	地質鑑定	無色透明光沢	■■■
276	縄跡 口縁部	A		沈線文、斜角文(光面)	ナデ	にかい(黄褐色)	1mm以下の灰白色・無色透明光沢、灰 褐色	■■■
277	縄跡 口縁部	A		斜角斜波文	ナデ	にかい(黄褐色)	4mm以下の灰褐色・灰白色・褐色 光沢	■■■
278	縄跡 口縁部	A		沈線文、ナデ	ナデ	地質鑑定	3mm以下の褐色・黑色	■■■
279	縄跡 壁部	SE2		斜角斜波文	ナデ	地質鑑定	5mmの灰白色、2mm以下の灰白色	■■■
280	縄跡 口縁部	A		沈線文	地質鑑定	2mm以下の黄色・1mm以下の灰白 色・無色透明光沢	■■■	
281	縄跡 口縁部	A		沈線文、斜角文、斜波(口唇)	ナデ	暗・暗	4mm以下の褐色・灰白色	平場?
282	縄跡 口縁部	A		沈線文(波状)、斜波(口唇)	地質鑑定	5mm以下の灰白色、3mm以下の灰白 色・黑色	平場?	指痕痕
283	縄跡 口縁部	A		斜角文	ナデ	にかい(黄褐色)	5mm以下の灰白色	■■■
284	縄跡 口縁部	SE3		斜角文、斜波(口唇)	ナデ	地質鑑定	5mm以下の灰白色	■■■
285	縄跡 壁部	A		斜角文	ナデ	地質鑑定	5mm以下の灰白色	■■■
286	縄跡 口縁部	[SC45]		斜角文、無痕	ナデ	にかい(暗)	3mm以下の灰白色・黒褐色・黒色光沢	■■■
287	縄跡 口縁部	SAB		斜角文、ナデ	ナデ	地質鑑定	3mm以下の灰白色・黑色	■■■
288	縄跡 口縁部	SAB		斜角文、斜角文(口唇)	ナデ	にかい(黄褐色)	3mm以下の灰白色・黑色	■■■
289	縄跡 口縁部	SE2		斜角文	ナデ	地質鑑定	2mm以下の灰白色・淡黃・黑色光沢・黑 褐色透明光沢	■■■
290	縄跡 口縁部	SA1		斜角文、斜波(口唇)	ナデ	にかい(黄褐色)	3mm以下の灰白色・褐色	■■■
291	縄跡 壁部	SA1		斜角文	ナデ	にかい(黄褐色)	2mm以下の灰白色・淡黃色	■■■
292	縄跡 口縁部 -側部	A		斜角斜波文、横角突起	ナデ?	にかい(暗)	1mm以下の灰白色・無色透明光沢	地質 向風土壁

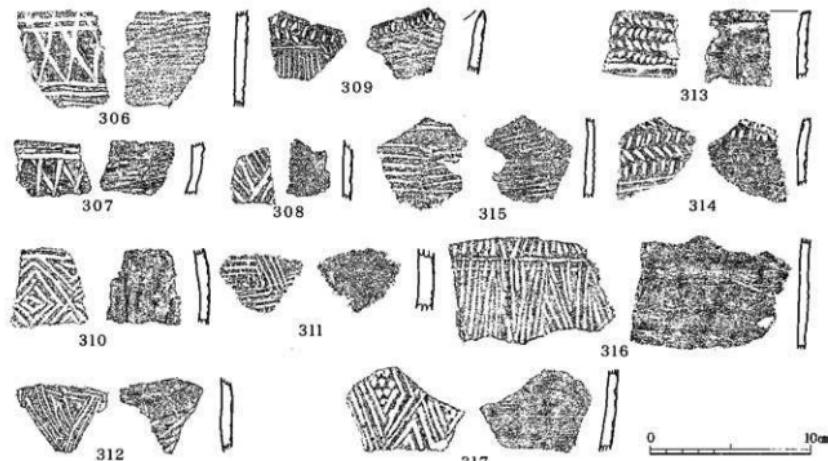
② 繩文時代前期の土器

293～305はV類に相当する繩文土器である。293は外面に縦方向に貝殻条痕文が施されたあと、上部に斜方向に貝殻条痕文を施し、口縁部は横方向に貝殻条痕を施している。口唇部には刻目をもち、器壁はやや厚い。294・295は内外面に貝殻条痕をもち、器壁はやや厚い。繩文時代前期の土器に含んでいるが繩文時代早期の土器の可能性もある。296は上部に斜方向の貝殻条痕を施し、口縁部付近には横方向の貝殻条痕を施している。口唇部には刻目をもつ。293に近いタイプの土器である。297～301は外面に貝殻条痕文(条痕)を持つ土器である。298は口縁部付近に微隆起線文ももつ。298・299は文様や胎土の様子から同一個体の可能性がある。302～305は内面を貝殻条痕(条痕)で調整し、外面に突帯を貼り付ける。

306～317はVI類に相当する繩文土器である。306・307は外面に「一」「/」「\」方向の沈線で文様を描き、内面は条痕・ナデで調整している。308は外面に「/」「\」方向の沈線文を施している。309は口縁部の外面に刺突による羽状文を施し、下部に縦方向の沈線をもつ。口縁部付近の内面に刺突文を施す。310・311は沈線により四角文を施す。器壁は310はうすく、311はやや厚い。312は沈線による三角文を施し、器壁はうすい。306～312には胎土に滑石が含まれない。313・314は外面に羽状文を施すが、313は刺突により、314は短沈線による。315は外面に沈線文を横方向に施す。316は外面に沈線文を横方向に施したのち縦方向に施している。317は沈線による菱形文に刺突文を充填している。313～317は胎土に滑石が含まれている。



第54図 縄文土器実測図 (10)



第55図 繩文土器実測図 (11)

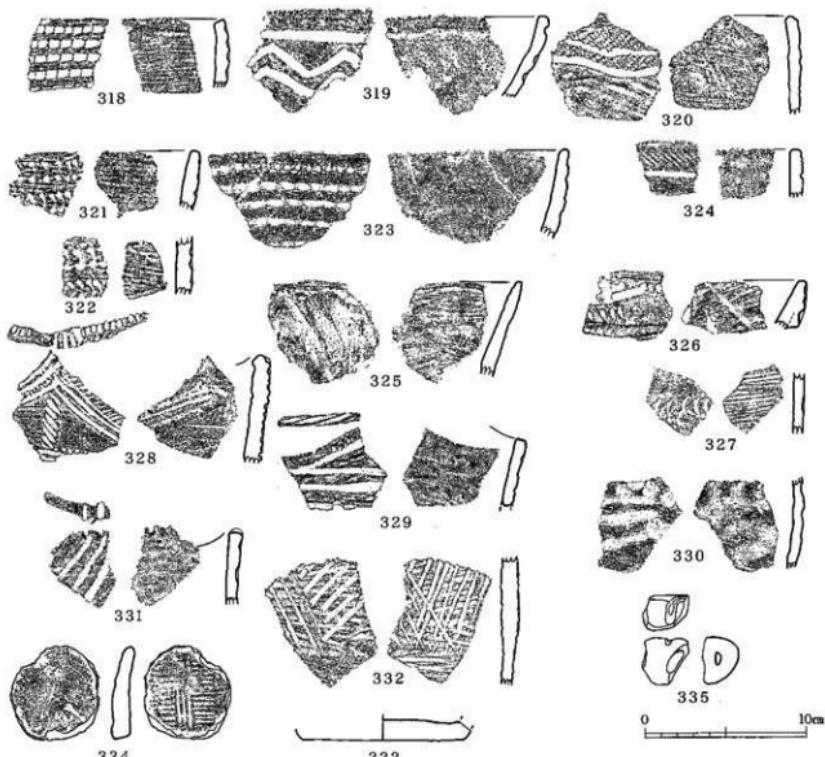
第23表 繩文土器観察表 (5)

法寸=cm

遺物名	形態	部位	法寸 外寸 内寸	出土 位置 状況	手芸・調製・文様はか		色 調	地土の特徴	備考
					外 面	内 面			
293 球鉢 口縁部			A	魚鱗文、押正形(口面)	ナ子	にかい模様	にかい模様	1mm以下の灰白・黒灰透松	鐵石柄
294 球鉢 口縁部	Hコツ	肉桂赤文、ナ子	B	肉桂赤文、ナ子(口面)	肉桂赤文	にかい模様	にかい模様	1mm以下の灰白・黒灰透松	鐵
295 球鉢 口縁部			B	肉桂赤文、ナ子(口面)	肉桂赤文	にかい模様	にかい模様	2mm以下の灰白・灰白色、1mm以下の 褐色・褐色・灰白・にかい模様	鐵
296 球鉢 口縁部	SAB	肉桂赤文、ナ子(口面)	ナ子	にかい模様	にかい模様	にかい模様	にかい模様	1mm以下の灰白・黒色透明光沢・黑 色透明光沢	鐵
297 球鉢 制部	SE2	肉桂赤文	ナ子	浅黄	にかい模様	にかい模様	にかい模様	1mm以下の灰白・黒色透明光沢・黑 色透明光沢	鐵
298 球鉢 口縁部	B	圓錐赤文、肉桂赤文	肉桂赤文	灰褐	灰褐	にかい模様	4mm以下の灰白透光・2mm以下の灰 透光	鐵	154と同一個体
299 球鉢 制部	B	肉桂赤文	肉桂赤文	ナ子	にかい模様	にかい模様	にかい模様	5mm以下の灰白・白色透光・2mm以下の 灰透明光沢	鐵
300 球鉢 制部	A	泥鉢文、肉桂赤文	肉桂赤文	ナ子	にかい模様	にかい模様	にかい模様	2mm以下の灰白・褐色・黑色透明光沢	鐵
301 球鉢 制部	A	泥鉢文、ナ子	泥鉢文、ナ子	にかい模様	にかい模様	にかい模様	にかい模様	3mm以下の灰白・褐色・2mm以下の 黑色透明光沢	鐵
302 球鉢 制部	A	貼付泥文、ナ子	条模	ナ子	にかい模様	地灰	地灰	3mm以下の灰白・褐色・2mm以下の 黑色透明光沢・黒褐色・黑色透明光沢	鐵
303 球鉢 制部	A	貼付泥文、貼付泥、ナ子	肉桂赤文	ナ子	にかい模様	にかい模様	にかい模様	4mm以下の灰白・灰白・黑色透明光 沢	鐵
304 球鉢 制部	A	貼付泥文、肉桂赤文、ナ子	肉桂赤文	ナ子	泥透明光沢	泥透明光沢	泥透明光沢	5mm以下の灰透明光沢・3mm以下の灰 透明光沢	鐵
305 球鉢 口縁部	A	貼付泥文、横ナ子	肉桂赤文	ナ子	にかい模様	黃褐	にかい模様	3mm以下の灰白・褐色・2mm以下の 黑色透明光沢	鐵
306 球鉢 制部	A	泥鉢文(△/一方向)	赤褐、ナ子	にかい模様	にかい模様	にかい模様	にかい模様	3mm以下の灰透明光沢	青透
307 球鉢 制部	A	泥鉢文(△/一方向)	赤褐、ナ子	にかい模様	にかい模様	にかい模様	にかい模様	5mm以下の灰透明光沢・2mm以下の灰 透明光沢	青透
308 球鉢 制部	SC	泥鉢文(△/一方向)	ナ子	泥灰	にかい模様	にかい模様	2mm以下の灰透明光沢・1mm以下の灰 透明光沢	青透	スヌ付裏
309 球鉢 口縁部	Hコツ	羽根(羽束)文、泥透明光沢	羽根(羽束)文、泥透明光沢	泥透明光沢	泥透明光沢	泥透明光沢	泥透明光沢	2mm以下の灰白・檻・黑色透明光沢・ 黑色透明光沢	青透
310 球鉢 制部	A	四角(北緯)文	ナ子	透明模	透明模	にかい模様	4mm以下の灰透明光沢・2.5mm以下の灰 透明光沢	青透	青透
311 球鉢 制部	SAG	四角(北緯)文	ナ子	にかい模様	泥透	にかい模様	4mm以下の灰透明光沢・黑色・透明模	青透	青透
312 球鉢 制部	A	三角(北緯)文	ナ子	にかい模様	にかい模様	にかい模様	3mm以下の灰透明光沢・2.5mm以下の灰 透明光沢	青透	青透
313 球鉢 口縁部	A	羽根(羽束)文、泥透明光沢	ナ子	にかい模様	にかい模様	にかい模様	2mm以下の灰透明光沢・無彩色透 明光沢	青透	青透
314 球鉢 一部	SAG	羽根(羽束)文、泥透明光沢	押引文、ナ子	にかい模様	にかい模様	にかい模様	3mm以下の檻色・金色・黑色・黑色透 明光沢	青透	青透
315 球鉢 制部	SAG	泥透明光沢	肉桂赤文	肉桂赤文	にかい模様	にかい模様	1.5mm以下の灰白・黄灰・金・黑色透 明光沢	青透	青透
316 球鉢 一部	A	泥透明光沢	横ナ子	にかい模様	檻	檻	檻石入り	青透	青透
317 球鉢 制部	A	泥透明光沢(羽束)、泥透明光沢	横ナ子	にかい模様	にかい模様	にかい模様	4mm以下の全色透明光沢・1mm以下の灰 白・檻透明・檻石入り	青透	青透

③ その他の時期の縄文土器

318～335はVII類の縄文土器である。器壁がうすく、焼成も良好なものが多い。318は外面に連続押引文を施し、内面は貝殻条痕で調整する。319は外面にやや幅広の沈線を直線と波線で横方向に施す。器形はキャリバー形と考えられる。320は外面の口縁部付近に縄文を施し、その後に幅の異なる沈線を2条引く。外面下部と内面には条痕による調整が見られる。321・322は同一個体の可能性があり、外面に竹管様工具による押引文を施し、内面には条痕による調整が残る。323は工具は不明であるが5条の押引文を残す。324は口縁部付近に縄文を施し、その下部に沈線を1条引く。325は内外面ともに条痕のちナデ調整である。326は外面にやや幅広の沈線・連続刺突を施す。内面は条痕により調整する。口縁部の外面側に粘土を貼り付け、断面は三角形をしている。327は外面に爪形文を施し、内面は貝殻条痕を残す。328は波状口縁をもつ深鉢である。外面は沈線文・短沈線・連点文を施し、内面にも沈線が残る。口唇部にも短沈線・刺突が残る。329は外面にやや幅広の沈線文・貝殻連続刺突文、口唇部に沈線をもつ。波状口縁であり、下部に円形の穿孔が残る。330は外面に幅広の沈線



第56図 縄文土器実測図 (12)

(四線) を施す。明瞭な指頭圧痕が外面に残る。331は外面に斜方向の幅広の沈線を施し、口唇部に押圧刻をもつ。波状口縁である。332は内外面ともに貝殻条痕のちに沈線文を施す。333は平底の底部である。器壁はやや厚い。334は円盤である。外面に縱方向のち横方向の条痕を施した土器片を加工転用している。335は橋状取手である。形状はD字形をしており、長槽円形の穴を形成するように器面に貼り付けてあったと思われる。取手の上部には溝が残る。これらの土器の時期は318・321～323・332は縄文時代前期(末)～中期、319は縄文時代中期、320・324・326～331・335は縄文時代後期と考えられる。

第24表 縄文土器観察表(6)

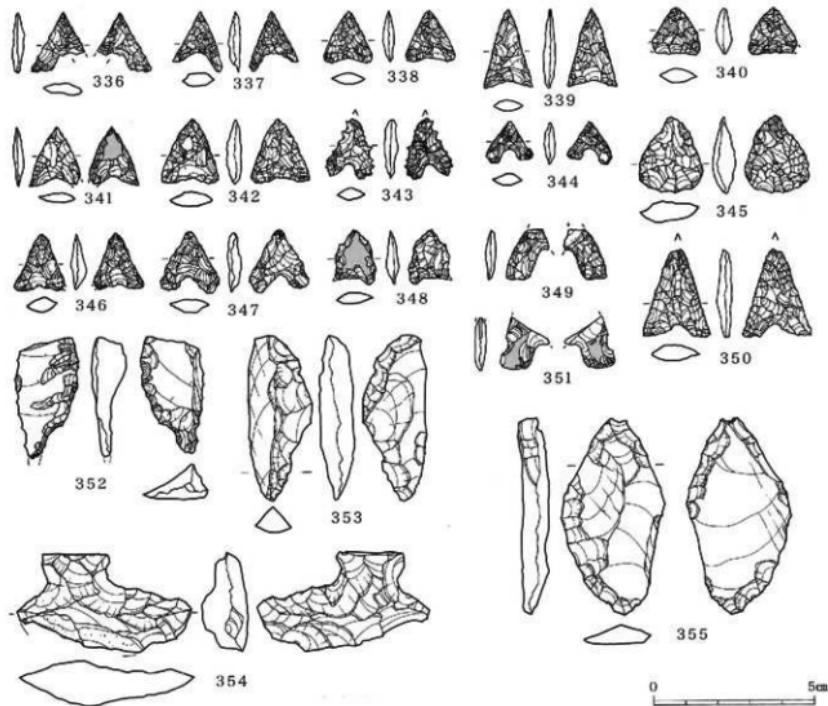
遺物名	器種	器・文	法・量	出土位置	手法・調査・文様ほか			色・調	出土の特徴	法一式
					内・外	内・外	内・外			
318 漆鉢	口縁部		A	遺跡引文、ナテ	貝殻条痕、ナテ	にかい模様	にかい模様	2mm以下の黒色光沢(柱状)・深・墨 灰・黒斑紋、1mm以下の白粉		口縁(縄文期)
319 漆鉢	口縁部		SH	波文、ナテ	ナテ	黄褐色	黄褐色	3mm以下の白粉	灰灰褐色	
320 漆鉢	口縁部		H-191	波文、調文、朱痕、ナテ	朱痕	赤褐色	赤褐色	3.5mm以下の柱状・複灰・淡黃褐色、2mm以下の白粉		縄文期
321 漆鉢	口縁部		A	押文(竹管工具)、朱痕、ナテ	朱痕、ナテ	にかい模	灰黃褐色	3mm以下の灰褐色・灰褐色		
322 漆鉢	腹部		A	押文(竹管工具)、朱 痕、ナテ	朱痕、ナテ	にかい模	にかい模	4mm以下の灰白色・褐色		
323 漆鉢	口縁部		SE3	押文(灰痕)	ナテ	麻縞	にかい模	灰灰褐色、2.5mm以下の白粉・薄 青・黑色光沢		
324 漆鉢	口縁部		H-192	波文、黒斑文	ナテ	にかい模	波文	3mm以下の灰褐色、2mm以下の波文・ 灰灰褐色		縄文期
325 漆鉢	口縁部		SE2	貝殻条痕のちナテ	朱痕、ナテ	にかい模	波文	2.5mm以下の灰白色・黒褐色・海灰・に かい模		
326 漆鉢	口縁部		H-193	波文、波状押文	朱痕、ナテ	波文	波文	3mm以下のにかい模	2mm以下の 灰白色	
327 漆鉢	腹部		H-194	半筒竹管文、ナテ	貝殻条痕	にかい模	にかい模	3mm以下の灰白色光沢・表面無光澤 光沢		
328 漆鉢	口縁部		A	2mm以下の波文、朱痕、波文(柱状)・ 波文(柱状)・波文(柱状)	朱痕、ナテ	にかい模	にかい模	1.5mm以下の灰褐色・灰褐色をもむ		最高土層(縄文)
329 漆鉢	口縁部		SE3	波文(柱状)・波文(柱状)・波文(柱状)	ナテ	にかい模	にかい模	3mm以下の灰白色光沢、2mm以下の柱状 灰褐色		
330 漆鉢	腹部		SE3	波文(柱状)・縫隙(柱状)	ナテ	にかい模	にかい模	2mm以下の灰白色・褐色		腹部、スズ附
331 漆鉢	口縁部		SE3	波文(柱状)・押文(柱状)	ナテ	にかい模	にかい模	2mm以下の灰白色・褐色		
332 漆鉢	腹部		H-195	貝殻条痕のち波文	貝殻条痕のち波文	明る模	にかい模	5mm以下の灰白色光沢、2mm以下の灰 褐色・表面無光澤		
333 漆鉢	腹部	OB8	A	ナテ	ナテ	にかい模	にかい模	2mm以下の褐色・乳白色		
334 円盤			A	高文	ナテ	にかい模	にかい模	3.5mm以下の波文光沢、1.5mm以下の柱 状斑紋・反白・無光澤		
335 橋状取手			SAS	ナテ	(剖面)	にかい模		2mm以下の灰白色・茶褐色		

6 縄文石器

石器は試掘調査・確認調査の結果より、縄文時代の石器(以下、縄文石器と記述する)・旧石器などが主に出土することが予想された。縄文石器は、まず、石錐・石斧類などが表面採集できた。表土を剥ぐと第III層や散疊・集石遺構・土坑などの遺構から石鐵・石錐・磨石・敲石などが出土した。これらの石器は縄文土器と同様の理由により、原位置を保持していない石器も多かった。本遺跡での縄文石器の出土・採集は、縄文土器と同じく縄文時代の遺構・縄文包含層・古墳時代以降の遺構・耕作土(造成土を含む)・地表面などに大別される。

縄文石器は『石材』を観点にして分類した。分類の観点を器種でなく、石材としたのは、使用した石材により、時期差が見出される可能性があることが考えられたからである。

石材はチャート・黒曜石(岩)・尾鈴山酸性岩・ホルンフェルス・頁岩・砂岩などを分類することができる。全体を分類してみると、比較的小型な石器(小型石器)はチャート・黒曜石・安山岩などを使用し、大型の石器(大型石器)は尾鈴山酸性岩・ホルンフェルス・頁岩・砂岩などを使用していた。なお、石材の分類は肉眼による観察を中心にして、一部、双眼実体顕微鏡を用いた。分類の基準については後述する。

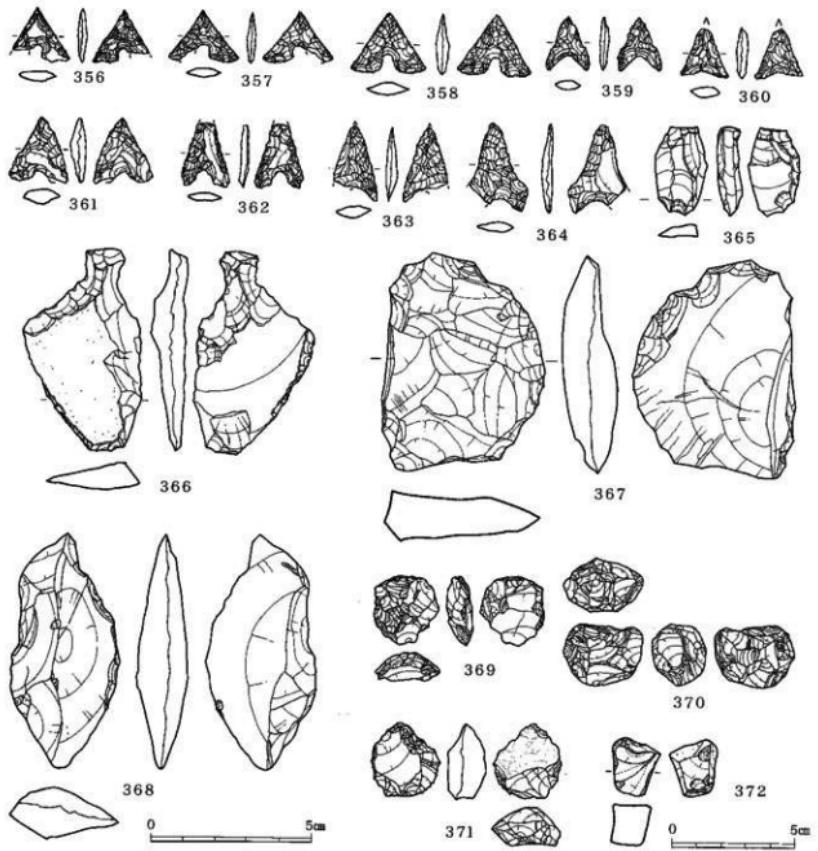


第57図 チャート製石器群実測図

掲載した縄文石器は210点である。掲載順は①チャート製石器群、②黒曜石・安山岩他製石器群、③姫島産黒曜石・ハリ賀安山岩製石器群、④尾鈴山酸性岩・凝灰岩製石器群（スクレイパー・剥片類）、⑤ホルンフェルス製石器群（石核・スクレイパー類他）、⑥ホルンフェルス・頁岩製石器群（石斧類）、⑦砂岩・頁岩製石器群（石鍤類）、⑧尾鈴山酸性岩・砂岩・頁岩製石器群（敲石類）、⑨尾鈴山酸性岩・砂岩・頁岩製石器群（磨石・砥石類）である。①～③が小型石器であり、④～⑨が大型石器である。縄文石器の器種・出土地点・サイズなどの詳細については「縄文石器観察表（1）～（4）」を作成した。なお、器種については不確定なものや不明なものもある。

①チャート製石器群

336～355はチャートを石材として使用している小型の石器群である。336～350は石鏃であるが、341と348は背面が部分的に磨かれている局部磨製石鏃であり、他は打製石鏃である。石鏃の形状はバリエーションに富んでおり、有脚～無脚・抉りの有～無・基部が平形～円形・サイズが比較的小～中などが観察できる。また、348は形状が五角形である。351はいわゆる「トロトロ石器（局部磨製異形石

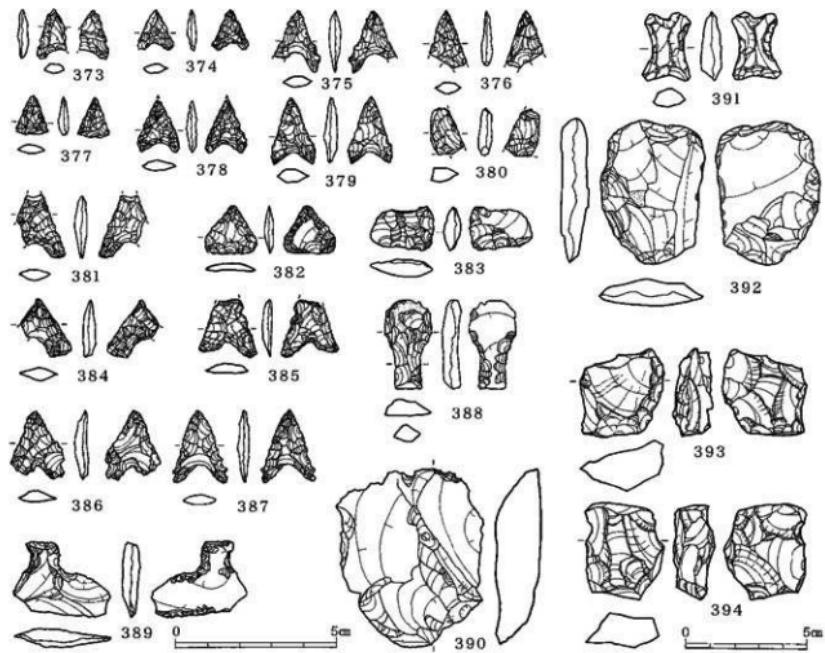


第58図 黒曜石・安山岩ほか製石器群実測図

器)」であり、脚部に相当すると考えられる。両面ともに部分的に磨かれている。352は石錐であり、錐部を欠いている。353はスクレイパーである。354は横長の石匙であり、下部が欠損している。355は石槍(尖頭器)の未製品と考えられる。このチャート製石器群には石核が見つからなかった。石核から剥片が剥離された状態または製品の状態で遺跡に持ち込まれたのかもしれない。

②黒曜石・安山岩ほか製石器群

356~372はチャート以外の黒曜石・安山岩などを石材として使用している小型の石器群である。356~364は打製石錐である。356~358は形状が三角形で抉りをもつ。石材は356は腰岳産黒曜石、357は桑ノ木津留産黒曜石、358は白色珪岩である。359~364は安山岩またはサヌカイト(ガラス質安山岩)である。(安山岩類は石質から判断すると複数の産地が推定できる。) この石錐群は有脚また



第59図 姫島産黒曜石製石器群実測図

は抉りがあるので構成され、平基の石鎚が確認されなかった。364は欠損の様子から左右の脚の形状が著しく異なっていたことが推定できる。365は楔形石器であり、石材は白色珪岩である。366は石匙である。形状が縱長であり、石材はホルンフェルスである。367・368はスクレイパーで、いずれも半円形で鋭い刃部をもつ。石材は367は珪長岩、368はホルンフェルスである。369～371は石核である。石材は369は玉髓（めのう）、370は安山岩、371は小国産黒曜石、372は桑ノ木津留産黒曜石の原石と考えられる。

③姫島産黒曜石・ハリ賀安山岩製石器群以外の複数产地の黒曜石あるいは安山岩（サヌカイト）はいずれも九州内外の遠隔地石材である。

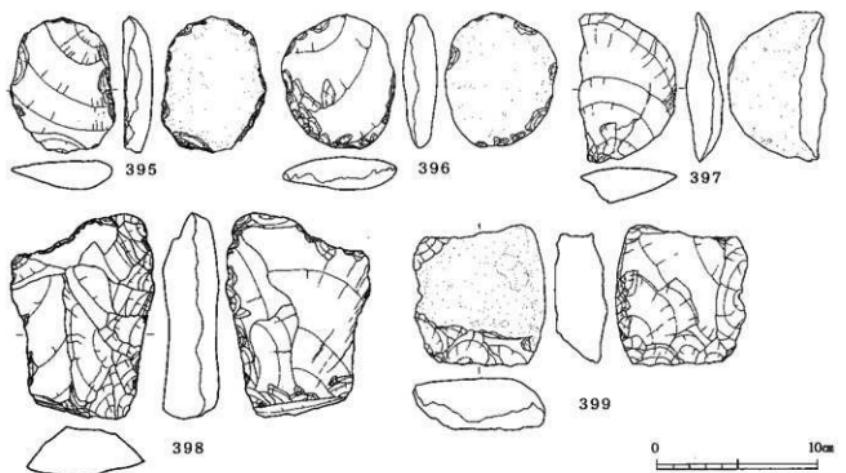
③姫島産黒曜石・ハリ賀安山岩製石器群

373～394は姫島産の黒曜石またはハリ賀安山岩を石材として使用している小型の石器群である。このグループは②黒曜石・安山岩ほか製石器群に含まれるべきであるが、出土数が他と比べて非常に多いので一群を設けることにした。373～387は打製石鎚である。形状はバリエーションに富んでいるが、①チャート製石器群、②黒曜石・安山岩ほか製石器群と比較すると小型のものが多く、側縁も鋸歯状を意識して加工されているものが多い。388は錐部が欠損しているが石錐と考えられる。頭部は円形であり、錐部の断面は菱形に近い。389は石匙である。形状は横長であり、354・366と比較する

とやはり小型である。390は表皮の除去に伴う剥片と推定される。表面は疊面（自然面）であり、一部先行剥離面が残される。391は異形石器である。中央部がくびれ、上端に抉り、下端には浅い抉りをもつ。石材はハリ賀安山岩である。392はスクレイパーである。刃部を一側縁に設けている。石材はハリ賀安山岩である。393・394は石核である。これらは表皮（自然面）の様子や剥離面の質感などから同一の母岩から剥離され、それぞれ石核として使用されたと推定される。姫島産の黒曜石の利用は本遺跡において突出しており、ハリ賀安山岩も含めて東北九州からの流入があり、多用されていたことがわかる。

第25表 講文石器観察表（1）

遺物番号	出土位置	器種	最大長	最大幅	最大厚	重 量	石 材	長・幅・厚=cm 重量=g	
								備考	
336	A	石鎚	1.8	1.7	0.4	0.6	チャート		
337		石鎚	1.9	1.5	0.4	0.5	チャート		
338	A	石鎚	1.6	1.5	0.4	0.7	チャート		
339	SI26	石鎚	2.4	1.5	0.4	1.0	チャート		
340	SI8	石鎚	(1.5)	(1.5)	(0.5)	1.0	チャート		
341	散錠1	石鎚	1.8	1.5	0.3	0.7	チャート	局部的に磨かれる	
342	A	石鎚	2.0	1.7	0.4	1.3	チャート		
343	SA2	石鎚	1.8	1.5	0.4	0.7	チャート		
344	A	石鎚	(1.3)	1.4	0.4	0.4	チャート		
345	SE3	石鎚	2.4	2.0	0.7	2.9	チャート	未製品か？	
346	A	石鎚	1.7	1.6	0.5	1.9	チャート		
347	A・表採	石鎚	1.9	1.8	0.4	1.3	チャート		
348	SE2	石鎚	1.7	1.3	0.3	0.5	チャート	局部的に磨かれる、五角形	
349	A	石鎚	(1.6)	(1.3)	(0.3)	0.5	チャート		
350	SE2	石鎚	(2.7)	2.1	0.5	1.9	チャート		
351	散錠1	トロ口石鎚	(1.6)	(1.5)	(0.4)	0.8	チャート		
352	A	石鎚	3.7	2.0	1.1	5.2	チャート		
353	A	スクレイパー	5.1	1.9	1.0	10.7	チャート		
354	A	石核	6.4	1.5	1.1	17.2	チャート	354のみ緑色系、他は白系の巻子系	
355	トレンチ3	尖頭器	6.1	3.2	0.9	16.2	チャート		
356	SA9	石鎚	(1.7)	(1.8)	0.3	0.4	鹿島産黒曜石		
357		石鎚	(1.6)	2.2	0.3	0.5	桑ノ木津産黒曜石		
358	A	石鎚	1.9	2.3	0.4	1.0	白色珪岩		
359	A	石鎚	1.7	1.3	0.3	0.4	安山岩		
360	SA2	石鎚	(1.6)	1.5	0.4	1.3	安山岩		
361	SA4	石鎚	2.1	1.8	0.5	1.2	安山岩		
362	A・表採	石鎚	2.0	1.5	0.3	0.7	安山岩		
363	SA4	石鎚	2.3	1.4	0.4	0.7	安山岩		
364	散錠1	石鎚	(2.8)	(1.9)	0.3	1.2	安山岩		
365	SA5	楔形石鎚	2.7	1.7	0.6	3.3	白色珪岩		
366	SA7	石鎚	3.0	5.4	1.4	18.1	ホルンフェルス		
367	A	スクレイパー	6.8	5.1	1.7	57.5	珪長岩		
368	A	スクレイパー	7.3	3.4	1.6	29.2	ホルンフェルス		
369	SA5	石核	2.8	2.6	1.1	7.6	玉髓		
370	SA5	石核	3.3	2.5	2.2	18.9	安山岩		
371	散錠2	石核	3.1	2.8	1.6	11.5	小国産黒曜石		
372	SA	磨石	2.4	2.0	1.7	10.1	島ノ木津産黒曜石 表皮は滑らかで光沢がある		
373	A	石鎚	(1.5)	(0.9)	(0.3)	0.3	鹿島産黒曜石		
374	A	石鎚	1.3	1.1	0.3	0.3	鹿島産黒曜石		
375	A	石鎚	(1.5)	(1.5)	0.4	0.5	鹿島産黒曜石		
376	SC	石鎚	(1.8)	(1.2)	(0.4)	0.5	鹿島産黒曜石		
377	A	石鎚	(1.3)	(1.0)	(0.3)	0.3	鹿島産黒曜石		
378	SA5	石鎚	1.6	1.3	0.3	0.5	鹿島産黒曜石		
379	A	石鎚	2.1	1.3	0.4	0.6	鹿島産黒曜石		
380	散錠1	石鎚	(1.5)	(1.0)	(0.4)	0.7	鹿島産黒曜石		
381	A	石鎚	(1.9)	(1.5)	(0.4)	0.8	鹿島産黒曜石		
382	SE3	石鎚	1.5	1.7	0.3	0.5	鹿島産黒曜石		
383	A	剥片	1.4	2.0	0.6	1.2	鹿島産黒曜石		
384	散錠1	石鎚	(1.8)	(1.6)	(0.4)	0.7	鹿島産黒曜石		
385	SC	石鎚	(1.8)	(1.8)	(0.3)	0.7	鹿島産黒曜石		
386	SI8	石鎚	2.2	1.7	0.4	0.9	鹿島産黒曜石		
387	SC43	石鎚	2.2	1.7	0.3	0.8	鹿島産黒曜石		
388	SE3	石鎚	2.8	1.5	0.6	2.2	鹿島産黒曜石		
389	A	剥片	2.3	3.0	0.6	2.7	鹿島産黒曜石		
390	A	剥片	5.6	4.6	1.4	31.8	鹿島産黒曜石		
391	A	異形石鎚	2.1	1.5	1.1	1.9	ハリ賀安山岩		
392	A	スクレイパー	4.5	3.3	0.9	15.3	ハリ賀安山岩		
393	SE3	石核	3.6	3.5	1.6	18.8	鹿島産黒曜石		
394	SE3	石核	4.0	3.4	1.7	18.6	鹿島産黒曜石		



第60図 尾鈴山酸性岩類製石器群実測図

④尾鈴山酸性岩・凝灰岩製石器群（スクレイバー・剥片類）

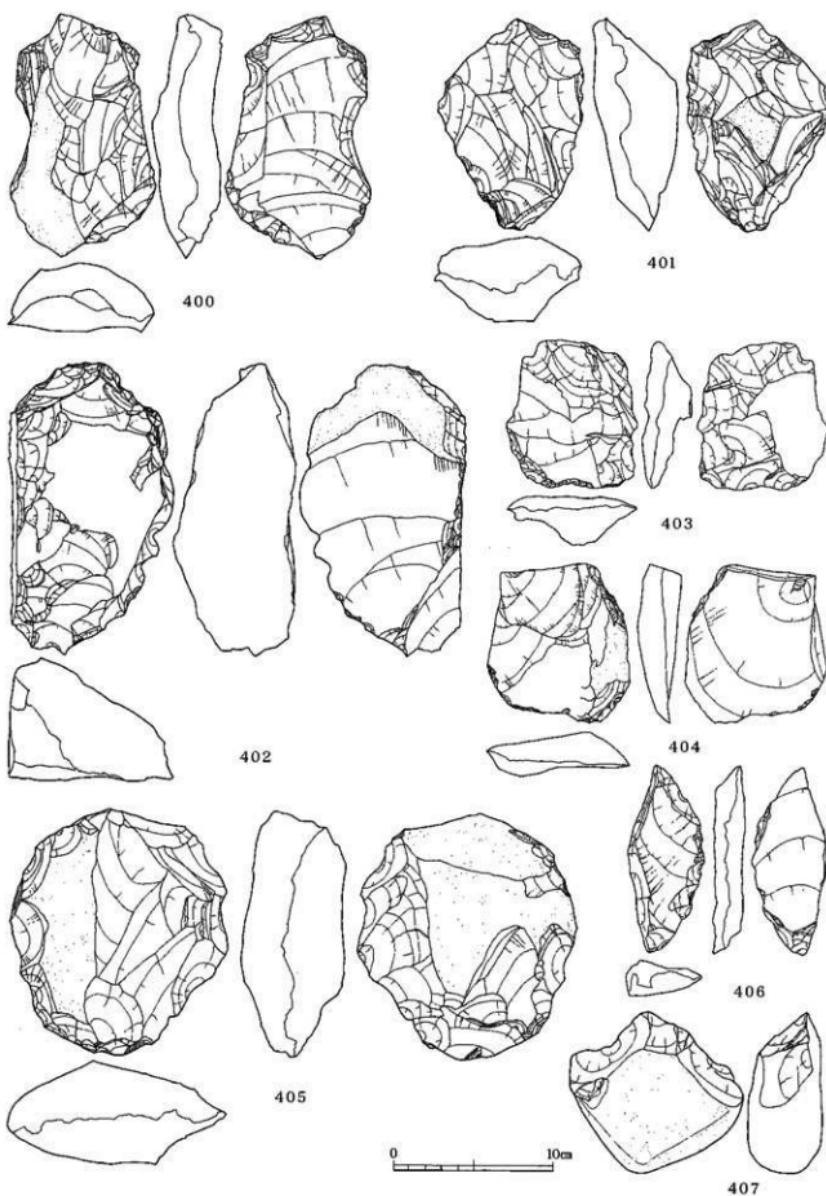
395～399は尾鈴山酸性岩・凝灰岩を石材として使用している大型の石器群である。395～397は表皮に伴う剥片と考えられる。395は除去後にも加擊されている。396はスクレイバーとしての用途があった可能性がある。397は母岩は磨石として利用されたいたのかもしれない。398は大型剥片が加工されているが器種・用途は不明である。399は表皮を利用したスクレイバーであり、二側縁を刃部としている。背面には弱い磨面がある。

⑤ホルンフェルス製石器群（石核・スクレイバー類）

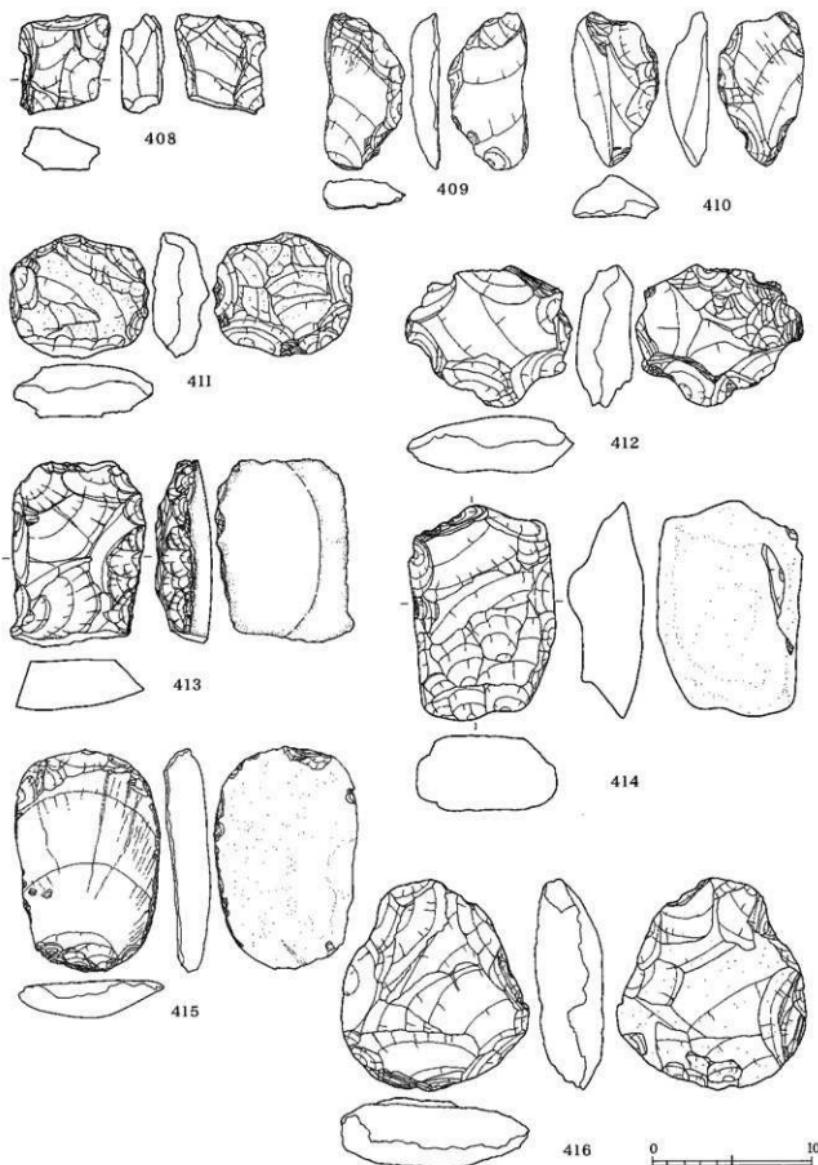
400～416はホルンフェルスを石材として使用している大型の石器群である。器種は石核・スクレイバー等に分類しているが形状や用途がはっきりとしないものもある。使用している石材および石材の質感は次の⑥石斧類とかなり近いことがわかる。石斧としての利用を前提とした未製品あるいは失敗品、石斧的に使用されたものが含まれているかもしれない。

⑥ホルンフェルス・頁岩製石器群（石斧類）

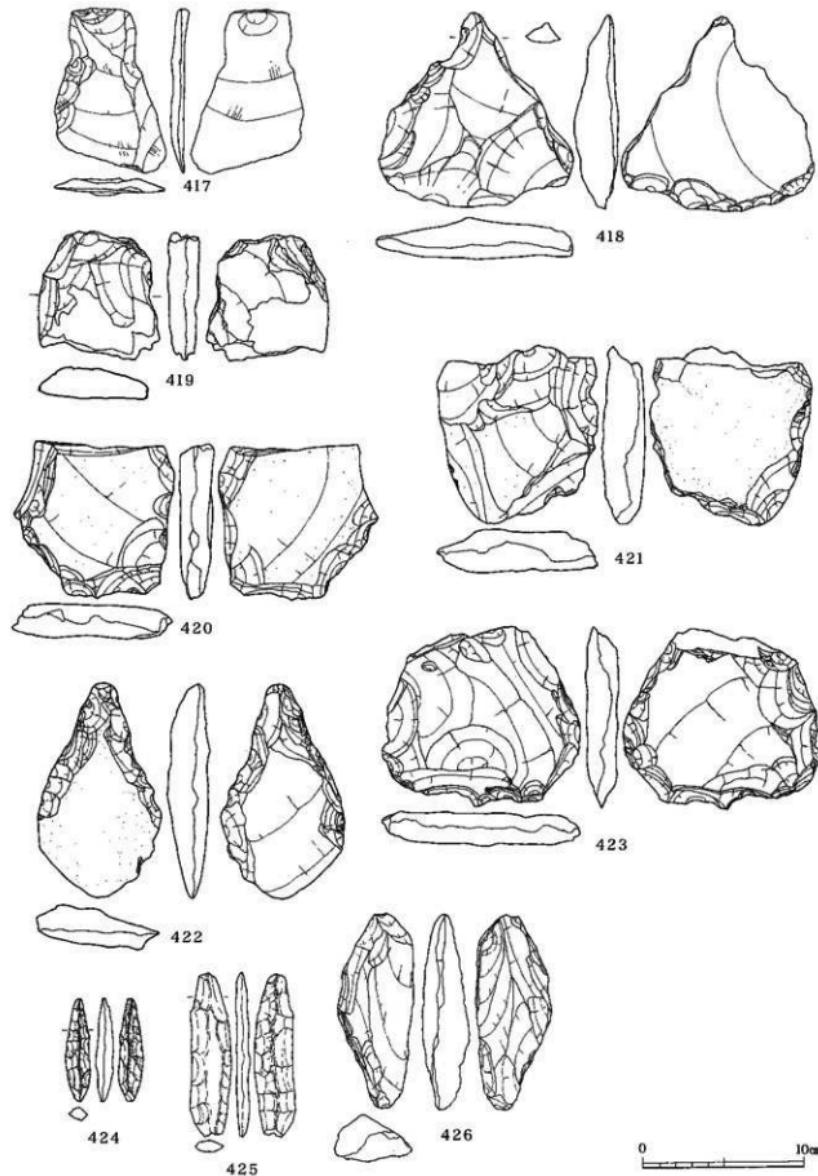
417～447はホルンフェルス・頁岩を石材として使用している石斧類（未製品等も含んでいる）、または石斧の可能性のある石器群である。観察表では器種を417は二次加工ある剥片、418～423は礫器に分類している。石斧類は刃部や基部等の形状や打製・磨製等の製作法などがバリエーションに富んでおり、繩文石器計測表とは別に形状についての観察表（第26表 石斧類形状観察表）にまとめたので参照されたい。なお、石材の分類においてホルンフェルスと頁岩の境界はあいまいな部分があり、



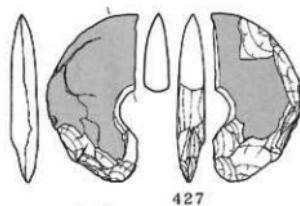
第61図 ホルンフェルス製石器群実測図 (1)



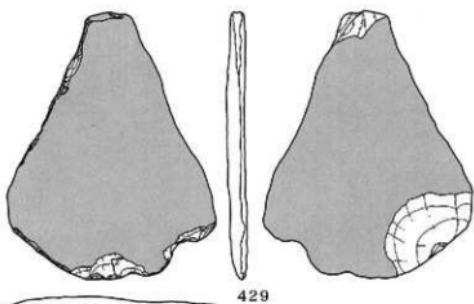
第62図 ホルンフェルス製石器群実測図（2）



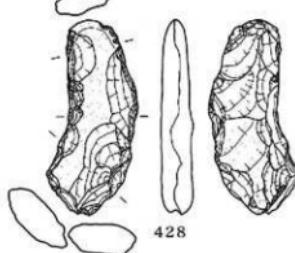
第63図 ホルンフェルス・頁岩製石器群実測図 (1)



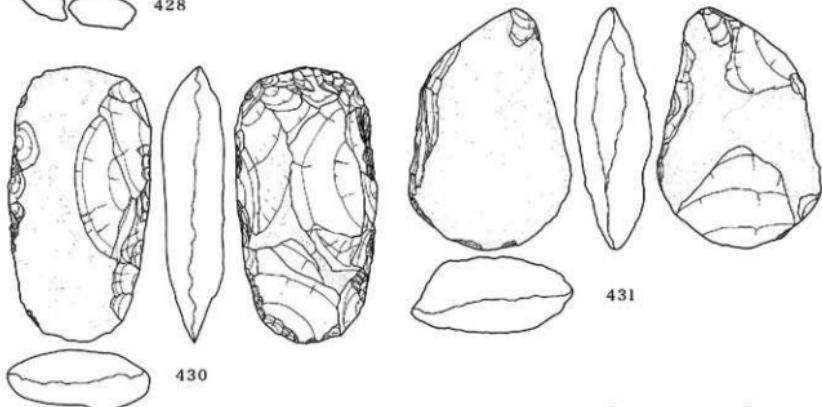
427



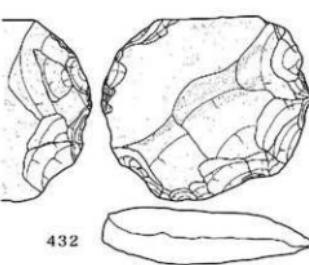
429



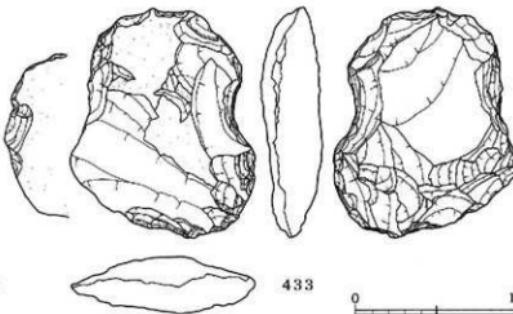
428



431



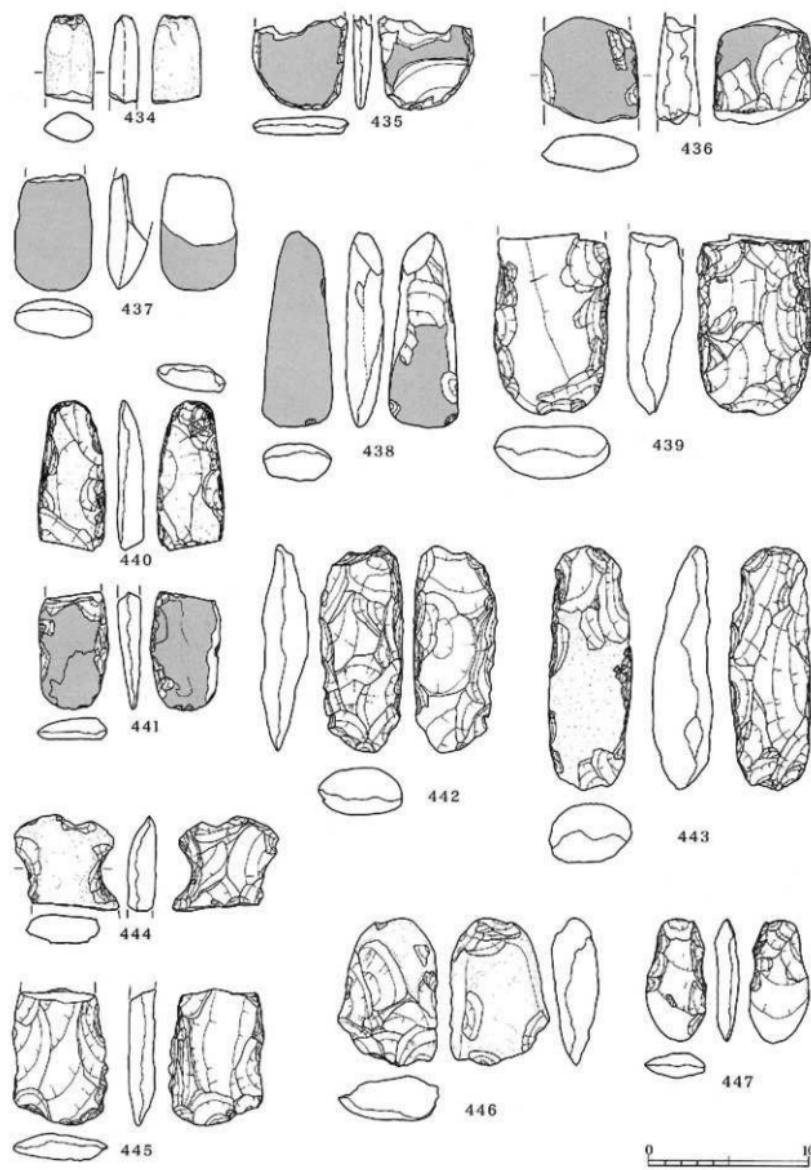
432



433

0 10cm

第64図 ホルンフェルス・頁岩製石器群実測図（2）



第65図 ホルンフェルスほか製石斧類実測図

ここでもはつきりしないものがある。また、石斧類は縄文時代の遺物として掲載したが、一部は弥生時代以降と考えられるものが含まれている可能性がある。

第26表 石斧類形状観察表

遺物番号	素材	技法	刃形状1	刃形状2	基部形状	石 質	備 考
427	剝片	磨製	両刃	円盤状刃	白がっている	やや硬い	塊状石岸
428	礫	打製			抉くなっている	硬い	
429	剝片	打製?	両刃	円刃	抉くなっている	硬いが表面は剥落多い	厚さは非常にうすく、風面に削跡が残る
430	礫	打製	片刃	円刃		硬い	石斧未製品、図のドット面はツブレ
431	礫	打製	片刃	円刃	尖っている	表面は風化、剥落多い	刃部傷痕
432	剝片	打製	両刃	円刃		硬いが表面は剥落	
433	礫	打製	片刃	斜刃	抉りがある	やや硬い	
434	礫	磨製?				硬い	打欠石錐の可能性あり
435	剝片	磨製	片刃	円刃		やや硬い	厚さは非常にうすい
436	礫	磨製				やや硬い	
437	礫	磨製	片刃	円刃		やや硬い	
438	礫	磨製	両刃	円刃		硬い	
439	礫	打製	片刃	円刃		硬い	未製品か?
440	剝片	打製			両面に刃をもつ?	硬い	厚さはうすい
441	剝片	周縁磨製	両刃	円刃		脆い	厚さはうすい
442	剝片	打製	両刃	円刃		脆い	刃部弱い痕痕
443	礫	打製				硬い	刃部はやや「のみ穴」
444	礫	打製			抉りがある	硬い	有肩打製石斧、弥生以降か?
445	剝片	打製	片刃	円刃		脆い	厚さはうすい
446	礫	尾端磨製	片刃	直刃?		硬い	複数的な刃部
447	礫	磨製	片刃	円刃	弱い抉りがある	硬い	厚さはうすい

* 石質(硬さ)については、触感と叩いたときの「音の高低・渾濁」も考慮した。

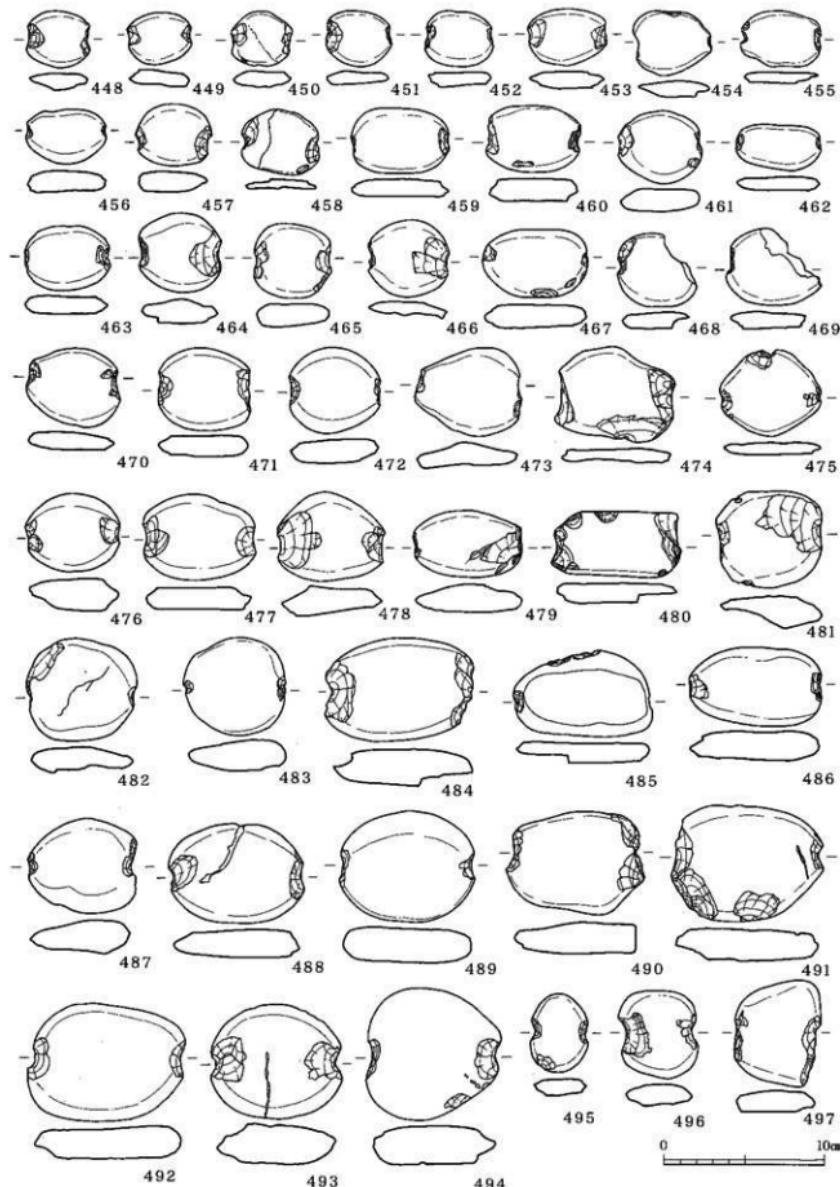
また、刃形状の判断についてはあいまいな部分がある。

⑦砂岩・頁岩製石器群（石錐類）

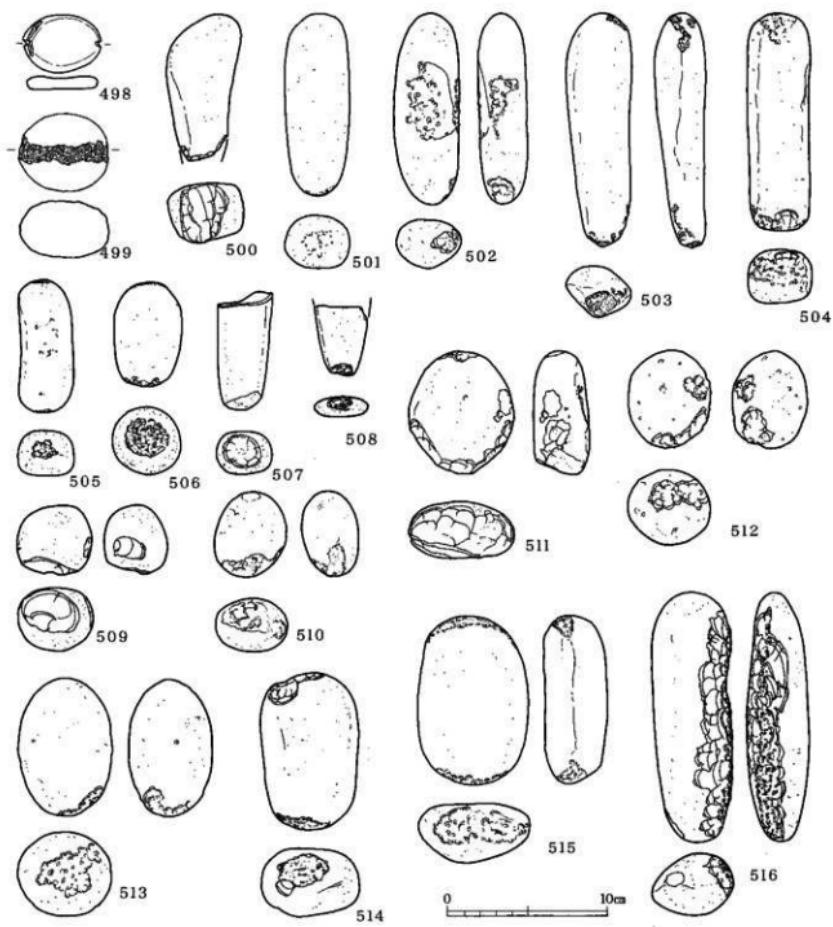
448～499は砂岩・頁岩を石材として使用している石錐類である。448～497は打欠石錐である。448～494は長軸を打ち欠き、495～497は短軸を打ち欠いている。長軸打欠石錐の重量は15g～240gまでの非常に軽いものからかなり重いものまで出土している。魚種・漁法・漁場などにバリエーションがあったことが推定できる。475・480・485・491は短軸側にも打欠を1ヵ所もち、計3ヵ所の打欠がある。485は背面に磨面をもつ。498は長軸に切目をもつ切目石錐である。499は卵形の砂岩の長軸を連続して打ち欠いた有溝石錐である。他の石錐が扁平な礫を使用しているのと比較すると特異的である。

⑧尾鈴山酸性岩製・砂岩・頁岩製石器群（敲石類）

500～516は尾鈴山酸性岩・砂岩・頁岩を石材として使用している敲石類である。形状が500～505・507・508・516は棒状、他は塊状であり、いずれも礫（礫塊）を素材にしている。また、敲打を両端で行っているもの（503～506・511・514・515）、敲打を側面でも行っているもの（502・509・512・516）、磨面をもつもの（503・514）など多様である。



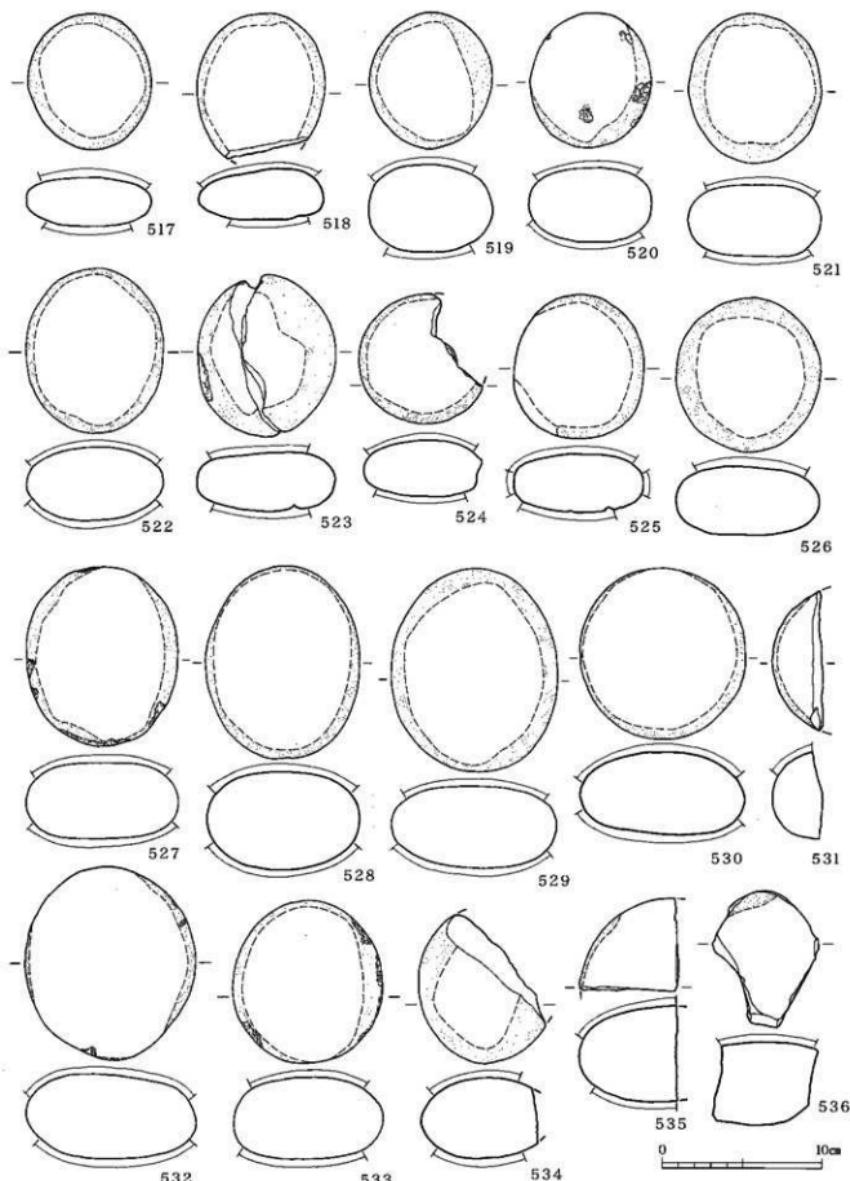
第66図 打欠石錘実測図



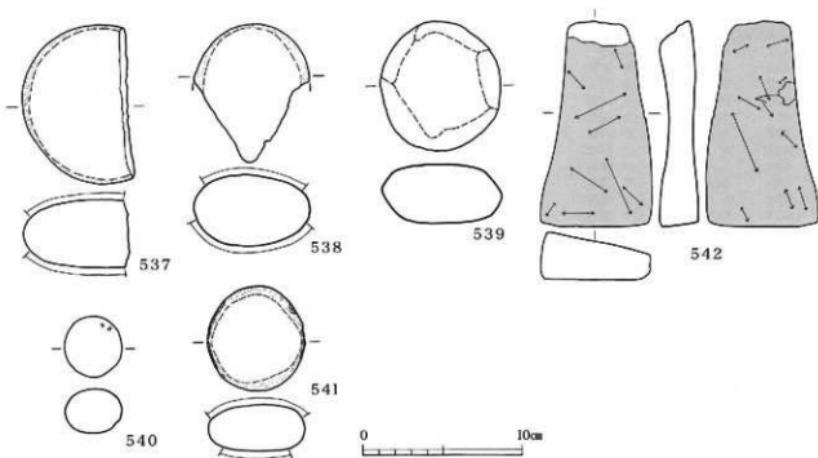
第67図 石錘類および敲石実測図

⑨尾鈴山酸性岩製・砂岩・頁岩製石器群（磨石・砥石類）

517～541は尾鈴山酸性岩・砂岩を石材として使用している磨石類であり、542は頁岩を石材として使用している砥石である。磨石はほとんどが扁平な円錐の表裏面を磨面としている。重量は540のようにかなり軽量なものから527・528・532のように1000gを超えてるものもあり、重量の差は対象物の違いを表しているかもしれない。また、520・523・532のように周縁に敲打痕をもつものもある。542の砥石は表裏だけでなく、四面全てが使用面になっていたと考えられる。



第68図 磨石実測図



第69図 磨石・砥石実測図

第27表 捺文石器観察表(2)

長・幅・厚=cm 重=g

遺物番号	出土位置	器種	最大長	最大幅	最大厚	重	石 材	備考
395	SC	2次加工のある剥片	9.1	8.1	3.0	124.9	凝灰岩	
396	散礫1	スクレイパー	8.3	7.0	2.2	141.3	尾鈴山酸性岩	
397	SE3	側縁剥離のある剥片	9.2	6.0	2.2	118.5	尾鈴山酸性岩	
398	A	不明石器	12.8	8.8	3.5	416.2	尾鈴山酸性岩	
399	A	スクレイバー	8.8	8.2	3.2	319.4	尾鈴酸性岩	
400	SC19	石核	15.2	9.0	4.3	590.5	ホルンフェルス	
401	A	石核	13.2	9.1	5.3	529.0	ホルンフェルス	
402	散礫1	石核	18.1	10.3	7.6	1440.0	ホルンフェルス	
403	SI26	スクレイバー	8.4	6.5	1.8	160.9	ホルンフェルス	
404	SC37	2次加工のある剥片	9.8	8.8	2.7	217.4	ホルンフェルス	
405	B	石核	15.3	13.6	6.4	1350	ホルンフェルス	
406	散礫3	スクレイバー	11.6	4.8	2.2	102.2	ホルンフェルス	
407	A	擦器	10.0	10.8	4.7	562.6	ホルンフェルス	
408	A	石核	6.2	5.7	2.6	109.2	ホルンフェルス	
409	散礫1	スクレイバー	9.6	4.9	1.8	102.3	ホルンフェルス	
410	SA5	スクレイバー	9.5	5.3	2.7	113.0	ホルンフェルス	
411	A	石核	7.7	8.6	3.3	272.0	ホルンフェルス	
412	A	石核	8.8	10.4	3.5	349.1	ホルンフェルス	
413	SE	石核	11.3	7.9	3.5	455.4	ホルンフェルス	
414	A・表採	石核	13.3	9.1	4.7	749.0	ホルンフェルス	
415	A	スクレイバー	13.8	8.9	2.2	376.8	ホルンフェルス	
416	散礫2	石核	13.2	11.7	4.3	762.5	ホルンフェルス	
417	散礫1	二次加工ある剥片	10.3	6.9	1.1	56.5	ホルンフェルス	剥片?
418	SA2	擦器	10.6	12.1	2.4	289.3	ホルンフェルス	
419	SC26	擦器	7.9	7.6	1.9	120.0	頁岩	
420	SA7	擦器	9.7	9.9	2.1	295.8	頁岩	
421	SA7	擦器	11.1	10.0	2.7	341.6	頁岩	石核?
422	A・表採	擦器	13.4	7.7	2.2	219.6	ホルンフェルス	石核?
423	A・表採	擦器	11.3	12.3	2.1	374.5	ホルンフェルス	石核?
424	A		6.3	3.8	1.1	10.1	頁岩	
425	A		10.1	2.5	0.8	30.9	頁岩	
426	SI		12.1	4.7	2.9	146.9	頁岩	2次加工ある剥片?

第28表 繩文石器観察表(3)

長・幅・厚=cm 重量=g

遺物番号	出土位置	種類	最大長	最大厚	重量	石 材	備考
427	A・表探	環状石斧	(10.4)	(5.7)	(1.7)	107.0	頁岩
428	SA13	石斧(打製)	12.1	5.7	2.0	159.3	ホルンフェルス
429	SE3	石斧(打製)	16.5	13.0	1.2	222.2	ホルンフェルス
430	SE3	石斧(打製)	17.2	8.9	3.8	722.5	ホルンフェルス
431	SC26	石斧(打製)	15.0	10.0	4.7	756.1	頁岩
432	SA2	石斧(打製)	11.5	13.0	3.6	627.4	ホルンフェルス
433	A	石斧(打製)	14.4	11.5	3.6	619.3	ホルンフェルス
434	トレンチ8	石斧(磨製?)	5.5	3.0	1.8	41.9	ホルンフェルス
435	SE4	石斧(磨製)	(5.8)	5.9	1.1	39.7	頁岩
436	A	石斧(磨製)	6.7	6.1	2.4	133.4	ホルンフェルス
437	SE3	石斧(磨製)	7.3	4.8	2.5	94.0	ホルンフェルス
438	B	石斧(磨製)	12.0	4.3	2.3	165.2	ホルンフェルス
439	SA5	石斧(打製)	11.2	7.3	3.4	396.2	ホルンフェルス
440	SE2	石斧(打製)	9.3	4.1	1.7	78.4	ホルンフェルス
441	SC19	石斧(馬頭磨製)	7.4	4.4	1.4	50.7	頁岩
442	A	石斧(打製)	12.9	5.2	2.9	193.8	頁岩
443	A	石斧(打製)	15.0	5.2	3.7	352.3	ホルンフェルス
444	B	石斧(打製)	5.9	6.5	1.8	81.4	ホルンフェルス
445	A	石斧(打製)	8.5	6.0	1.7	104.6	頁岩
446	A・表探	石斧(馬頭磨製)	9.2	6.1	2.3	183.3	ホルンフェルス
447	散錠1	石斧(磨製)	7.6	3.7	1.6	46.3	ホルンフェルス
448	A	石錐	3.1	4.0	1.1	21.7	砂岩
449	A	石錐	3.3	4.0	1.1	16.6	頁岩
450	SA5	石錐	3.4	3.5	1.0	18.2	頁岩
451	A	石錐	3.5	4.1	8.5	16.7	砂岩
452	SA2	石錐	3.5	4.3	(1.0)	22.3	頁岩
453	A	石錐	3.6	4.9	1.3	26.0	頁岩
454	SE4	石錐	4.1	4.9	1.1	23.2	砂岩
455	A	石錐	3.5	5.0	8.0	15.5	頁岩
456	A	石錐	3.4	4.8	1.4	34.2	頁岩
457	SA9	石錐	3.9	4.2	1.3	35.3	砂岩
458	A	石錐	4.1	4.8	0.6	15.2	頁岩
459	SE3	石錐	4.1	5.9	1.1	47.0	砂岩
460	A・表探	石錐	4.2	5.9	1.4	52.6	頁岩
461	SM49	石錐	4.5	4.9	1.4	50.0	砂岩
462	トレンチ6	石錐	2.9	5.3	1.0	19.7	砂岩
463	SA1	石錐	5.0	5.3	1.2	41.3	砂岩
464	A・表探	石錐	5.0	(5.2)	1.6	51.9	砂岩
465	A・表探	石錐	4.7	4.8	1.5	49.2	砂岩
466	SE4	石錐	4.8	4.9	0.7	31.4	砂岩
467	A	石錐	6.5	4.3	1.5	60.8	頁岩
468	SH	石錐	4.6	4.9	1.0	25.6	砂岩
469	A	石錐	4.9	6.0	1.2	36.6	頁岩
470	A・表探	石錐	5.0	5.9	1.2	48.9	頁岩
471	SH	石錐	5.2	5.7	1.4	67.4	砂岩
472	SA1	石錐	5.4	5.7	1.5	61.8	砂岩
473		石錐	5.5	6.7	1.6	62.8	頁岩
474	SN1	石錐	6.0	7.6	1.0	44.5	頁岩
475	SM49	石錐	5.4	6.2	0.8	37.3	頁岩
476	A	石錐	5.8	5.8	2.0	82.2	砂岩
477	B	石錐	5.4	6.7	1.4	81.9	砂岩
478	A・表探	石錐	5.6	6.7	1.9	87.1	砂岩
479	トレンチ8	石錐	6.1	6.6	1.9	64.3	頁岩
480	SC	石錐	4.2	8.2	1.3	67.3	頁岩
481	トレンチ7	石錐	2.9	5.3	1.0	93.0	砂岩
482	散錠3	石錐	6.4	6.9	1.9	108.3	頁岩
483	A・表探	石錐	6.1	6.4	1.9	105.6	頁岩
484	A	石錐	6.4	9.2	2.3	190.2	砂岩
485	A	石錐	5.4	8.7	1.3	82.0	頁岩
486	SC	石錐	4.9	8.3	1.9	111.8	頁岩
487	SE3	石錐	6.0	6.3	2.0	106.3	砂岩
488	SE4	石錐	6.3	8.4	1.8	148.3	砂岩
489	SD3	石錐	7.1	8.0	2.2	193.4	砂岩
490	散錠4	石錐	6.4	7.5	1.8	154.9	砂岩
491	SN1	石錐	7.8	8.8	2.0	186.9	砂岩
492	SC	石錐	7.4	9.9	2.0	207.2	砂岩
493	散錠3	石錐	7.1	8.2	2.5	213.5	砂岩
494	A・表探	石錐	8.2	8.4	2.4	241.6	砂岩
495	A	石錐	4.9	3.1	1.0	27.4	砂岩
496	SM49	石錐	5.5	4.9	1.4	54.5	頁岩
497	SA9	石錐	6.6	5.4	1.3	76.7	砂岩
498	SE3	石錐(切目)	3.6	4.9	8.5	21.3	頁岩
499	SC	石錐(有溝)	4.9	5.4	3.6	132.8	砂岩

打欠3箇所

打欠3箇所

打欠3箇所・磨面

短軸

短軸

短軸

第29表 織文石器観察表(4)

長・幅・厚=cm 重量=g

遺物番号	出土位置	種類	最大長	最大幅	最大厚	重さ	石材	備考
500	SA5	敲石	9.2	4.7	3.7	221.3	砂岩	
501	A	敲石	11.4	4.0	3.3	242.2	砂岩	
502	SAB	敲石	11.9	4.1	3.1	214.8	砂岩	
503	SC8	敲石	14.6	4.1	3.2	233.4	砂岩	側面敲打
504	B	敲石	4.0	13.5	3.3	310.1	砂岩	両側敲打
505	SC	敲石	8.3	3.5	2.9	146.1	砂岩	両側敲打
506	A・表揮	敲石	6.5	4.3	4.2	162.0	尾鈴山酸性岩	両側敲打
507	A	敲石	7.4	3.4	2.7	96.0	砂岩	
508	SE3	敲石	4.4	3.3	1.2	25.2	頁岩	
509	SC41	敲石	4.3	4.7	4.0	118.3	頁岩	側面敲打
510	SE1	敲石	5.3	4.4	3.3	94.5	砂岩	
511	SE3	敲石	7.7	6.6	3.5	215.5	砂岩	両側敲打
512	SE3	敲石	6.2	5.0	4.7	180.7	尾鈴山酸性岩	側面敲打
513	SA7	敲石	8.9	5.9	5.2	356.6	尾鈴山酸性岩	
514	SE3	敲石	9.8	6.0	4.3	405.7	頁岩	両側敲打・磨面
515	A	敲石	10.5	6.9	3.7	411.3	砂岩	両側敲打
516	B	敲石	15.6	5.0	3.9	439.9	頁岩	側面敲打
517	SC19	磨石	8.5	7.7	3.1	273.1	砂岩	
518	SE3	磨石	9.1	7.9	3.2	314.1	砂岩	
519	SC19	磨石	8.5	7.7	5.5	476.5	砂岩	
520	SB8	磨石	8.4	7.6	4.6	423.1	尾鈴山酸性岩	敲打痕
521	敲打痕	磨石	9.4	8.4	4.5	460.7	砂岩	
522	SA1	磨石	10.3	8.6	4.6	608.8	尾鈴山酸性岩	
523		磨石	10.1	8.6	3.7	423.3	砂岩	敲打痕
524	A	磨石	8.1	7.7	3.5	268.4	尾鈴山酸性岩	
525	SI32	磨石	9.0	8.1	3.7	383.3	尾鈴山酸性岩	
526	A	磨石	9.6	9.0	4.3	539.4	尾鈴山酸性岩	
527	SA4	磨石	12.7	10.4	5.1	1010	尾鈴山酸性岩	
528	SC	磨石	12.1	9.6	6.2	1027.8	尾鈴山酸性岩	
529	A	磨石	11.2	9.5	4.8	805.7	尾鈴山酸性岩	
530	SE3	磨石	10.7	10.3	5.2	852.7	尾鈴山酸性岩	
531	敲打痕	磨石	8.6	3.3	5.5	157.3	尾鈴山酸性岩	
532	SA7	磨石	11.5	10.6	5.3	1006.7	尾鈴山酸性岩	敲打痕
533	SE3	磨石	10.2	9.3	5.1	663.4	尾鈴山酸性岩	
534	SE3	磨石	9.3	7.9	5.0	396.0	砂岩	
535	SB1	磨石	5.9	6.3	6.1	280.0	砂岩	
536	SC	磨石	6.6	8.6	5.2	356.0	尾鈴山酸性岩	
537	A	磨石	9.9	7.0	4.3	471.0	砂岩	
538	SN1	磨石	8.6	7.3	4.5	272.0	砂岩	
539	B	磨石	8.1	7.5	3.7	334.9	尾鈴山酸性岩	
540	SA5	磨石	3.8	3.6	2.9	51.1	砂岩	全面磨面
541	SA7	磨石	6.7	10.6	2.9	167.3	尾鈴山酸性岩	全面磨面
542	SE3	研石	12.7	7.0	2.9	265.8	頁岩	

■ 織文石器の石材分類

チャート : 堆積岩。珪質で緻密で硬いもの。黒～灰～暗緑色まで混入物によって変化がある。

黒曜石 : 火成岩。ガラス質の火山岩であり、黒色～灰色までがある。透明感にもかなりの格差があり、斑晶や鉱物によって産地が同定される。

安山岩 : 火成岩。灰色、緻密で硬いものが多い。叩くと澄んだ金属を発するものもある。

尾鈴山酸性岩 : 溶結凝灰岩、白色・灰色・淡黄色のレンズ構造をもつ。

頁岩 : 堆積岩。層理構造が確認できるもの。緻密で硬いものが多いと層方向に脆いものがある。

ホルンフェルス : 接触変成岩。表(縦)面が粉を吹いた状態であり、割口が黒紫色系をしているもの。緻密で硬いものが多い。風化が著しいものもこれに含まれた。

砂岩 : 堆積岩。肉眼で砂粒が確認できるもの。砂粒の粒度にかなり細かいものがある。

その他 : 白色珪岩・珪長岩・玉髓(めのう)・凝灰岩など。

第3節 弥生時代の遺構と遺物

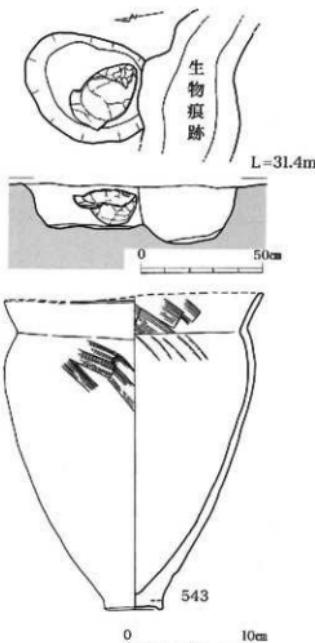
弥生時代後期後半の土器集中、土坑各1基が確認された。このほか、A2区東～北端に広がる黒色土中や遺構検出面での採集資料中に、後期の甕底部が散見された。表探の有肩打製石斧(444)も該期の可能性がある。

【土坑】(第70図・図版4)

土坑はA2区で検出された。土坑周辺に住居等、弥生から古墳時代の遺構ではなく、また遺物の分布もほとんどない。土坑は、長軸方向の一部に擾乱を受けている。長径55cm+ α 、短径45cmの平面椭円形で、床面は平坦である。壁と床面の境は比較的明瞭であった。土坑埋土は周辺の土色に比べやや暗い程度であり、認識は困難を極めた。竪穴などに付随する土坑である可能性も考え精査したが、土坑周辺に生物痕跡(第7節)が確認されたばかりであった。甕(543)は土坑中に横倒しになった状態で出土した。

出土遺物 (第70図・図版22)

甕(543)1点のみである。内面頸部下には工具痕が明瞭に残る。このほか埋土中に旧石器が含まれていた。



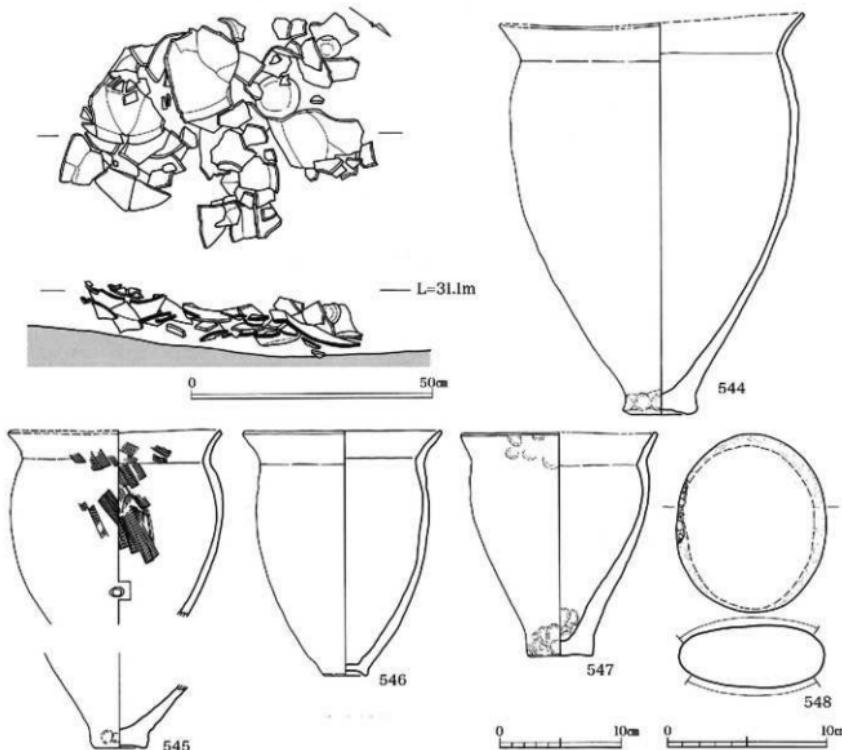
第70図 土坑および出土遺物実測図

第30表 弥生時代出土遺物観察表

No	位置	器種	部位	法線 (cm)			地	内 面	外 面	色	備考	
				口径	高さ	周径						
597	土坑	中蓋 宽形		21.5	26.4	20.8	4.8	約1~5mmの 灰褐色・灰白 黄褐色斑を含む	口縁ハケ 脊部 上部易角ナテ 断面~底部ナテ 底あり	口縁~底脚方 斜面ハケテ 断面下 半部ナテ 断面頂 部	内面:に少い 内底傾斜下に斜方角の凹凸板。外底 斜板色 外縁~斜板上にスス付茎、内底斜 形~底周にコケ付茎。 黄色	
543	土器集 中	大型 口縁から底部		25.0	33.4	24.0	6.2	約1~6mmの に少い赤褐色 底面白色斑を 多く含む	口縁~底部斜方 底付近二ナテ 底あり	口底傾斜ナテ 前部 ナテ 斜面接続ナテ ナテ	内面:褐色 外縁:浅黄色 斜~側面にスス付茎。 黄色	最大幅は底下で、口径に近い。外縁 斜~側面にスス付茎。
544	*	中蓋 窄形のみ		17.4 (23.5)	17.6	4.4	約1~5mmの 暗赤褐色・褐灰 色斑を含む	口縁~底脚斜方 口縁ハケメ 底部 付近ナテ	口底傾斜ナテ 前部 ナテ 斜面接続ナテ ナテ	内面:に少い 半部に1.2~0.7cmの孔 半部に褐色	最大幅は底下で、口径に近い。斜下 に少い黃褐色	
545	*	中蓋 宽形		16.4	20.3	14.4	3.4	約1~7mmの 黄褐色・灰褐色 底面白色斑を 多く含む	口縁~底部ナテ 口縁ハケテ	口底傾斜ナテ 口縁 ナテ 斜面接続ナテ ナテ	内面:外縁: 内面:に少い色 斜面下部~底周付茎。	最大幅は口縫。外縁スス付茎、内面 に少い色
546	*	中蓋 宽形		16.0	18.6	15.0	5.1	約1~3mmの 白褐色・灰褐色 底面白色斑 を多く含む	口縁ナテ 前 部~底脚斜方 部~底周付茎 底あり	口底傾斜ナテ 口縫 ナテ 斜面接 続ナテ	内面:に少い 緑色	最大幅は口縫。
547	*	磨石	周辺に埋在	11.1	9.1	3.9	599.2					

【 土器集中 】 (第71図・図版4) 表土直下で土器の集中箇所が確認された。明確な掘り込みはなく、地山が浅くくぼむ程度である。集中箇所は壺4個体の破片が横積みになった状態であり、破片中には磨石1点(548)が含まれていた。

出土遺物 (第71図・図版22) 壺は器高30cm超と想定される大壺(544)、器高約25cmの中壺(545・546)、器高20cm前後的小壺(547)に分けられる。545の胸部下位には焼成後に貫通された孔が1つある。小壺は器高に対し底部付近が分厚い。

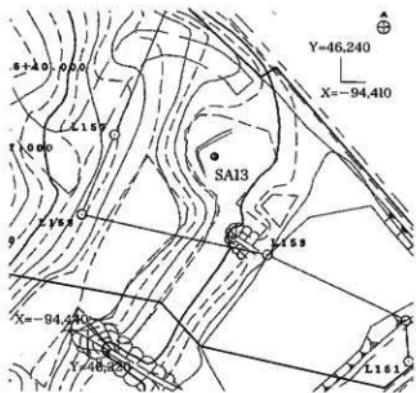


第71図 土器集中検出状況および出土遺物実測図

第4節 古墳時代から古代の遺構と遺物

古墳1基・馬具の入る土坑1基・竪穴住居9軒・溝1条・そのほか該期の可能性のある土坑・ピット群が検出された。出土遺物から、中期後半から後期初頭と後期後半の2群に分けられる。

該期の遺構・遺物は、丘陵平坦面から斜面部にわたって確認された。住居の占地位置については、丘陵平坦面のA区で標高約35m、斜面部のB区SAI3付近で標高約20mと、かなりの比高差がある中にひろがる。

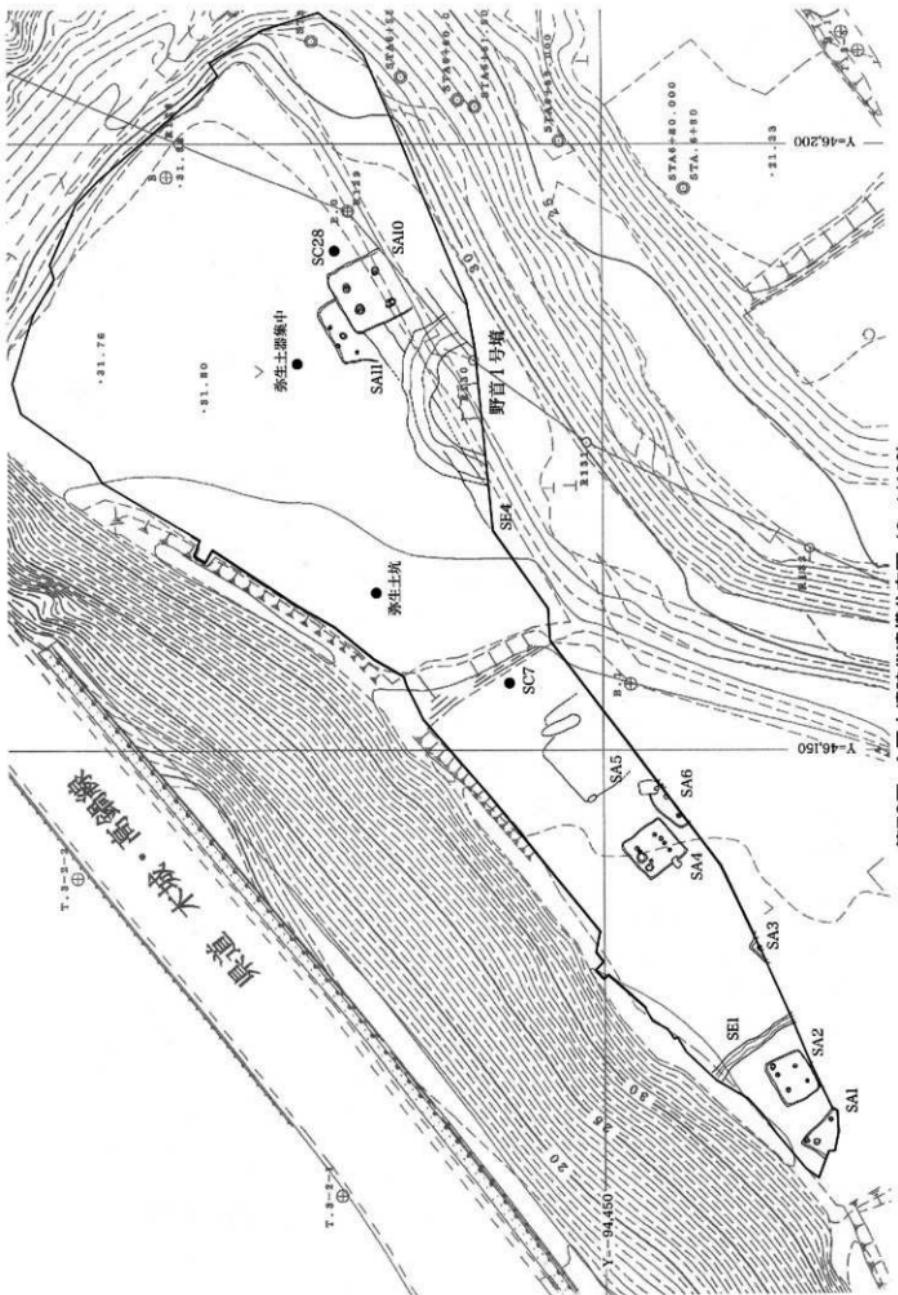


第72図 B区古墳時代遺構分布図 (S=1/400)

第31表 古墳時代住居一覧

時期	遺構	立地	床面積 (m ²)	主軸	住穴 (本)	遺物	備考
中期	SA6	A1区	(11.2)	N-40°-W	(2)	甕	
後半	SA1		(8.0)	N-48°-W	(1)	甕	
～	SA2		20.1	N-30°-W	4	甕・壺・壺ほか	中期から後期まで時期範 あり
後期	SA4		25.3	N-35°-W	7	甕・壺ほか	床面中央に焼土
初頭	SA3		(1.9)	N-50°-W	(1)	—	
	SA5		49.7	N-38°-W		須恵器壺・ 土師器甕・壺・甕・壺	遺構プランは不明確
後期	SA13	B区	(22.2)	N-33°-W	(1)	甕ほか	埋甕あり
後半	SA11	A2区	(19.1)	N-10°-W	(—)	—	
～	SA10		(37.0)	N-12°-W	4	甕・壺ほか 須恵器甕	埋甕あり
終末							

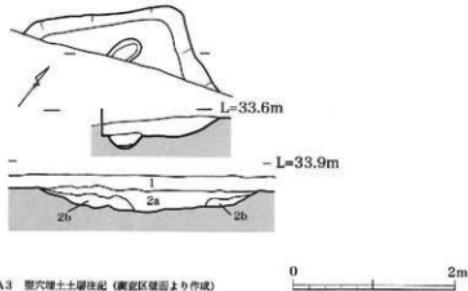
第73図 A区古墳時代遺構分布図 (S=1/400)



1 集 落

【 SA3 】(第74図)

A 1 区壁際で検出され、竪穴一隅のみの調査となつた。1コーナーの形状から方形プランの住居と想定され、主柱穴は1本のみ確認された。埋土は暗褐色土であり、床面付近になるとやや黒みを増す。土器小片がごく少量含まれていたが、時期を判別しうるものはない。遺構配置から推して、中期後半から後期初頭か。



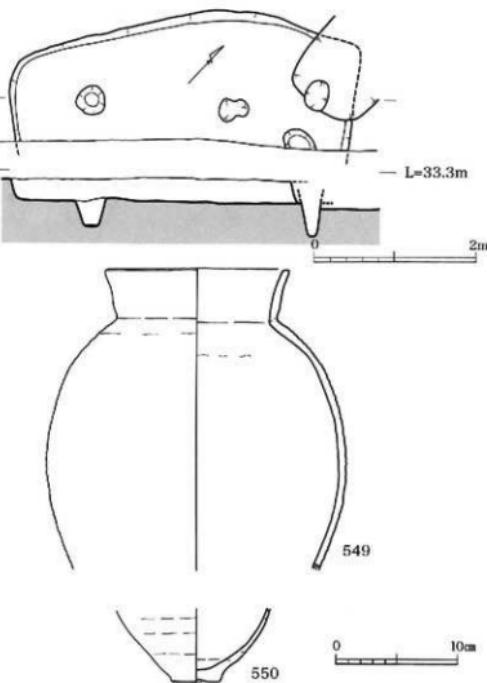
第74図 SA3 実測図

【 SA6 】(第75図)

A 1 区中央南側で検出され、住居南側は調査区外に延びる。0.5m北側にSA4が近接して立地する。柱穴は2本確認され、床面からの深さ0.35m前後である。遺物から、中期後半である。

SA6出土遺物 (第75図・図版24)

549・550は竪穴床面直上より出土した壺である。549は長胴で胸部には横方向のタタキがみられる。また、内外面頸部の屈曲は強い。550は底部で平底である。



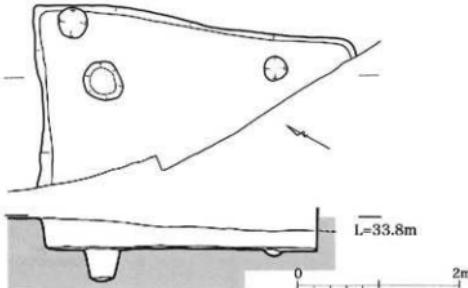
第75図 SA6 および出土遺物実測図

【 SA1 】(第76図・図版6)

A 1 区西端に位置し、住居竪穴南西半分は調査区外にのびる。竪穴埋土を切って別時期の柱穴2本が掘り込まれる。竪穴の平面形は方形で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。柱穴は、床面で1本のみ確認された。埋土は、竪穴・柱穴とともに暗褐色土であり、わずかに炭化物粒・焼土粒を含む。遺物から、中期後半から後期初頭である。

SA1出土遺物（第76図）

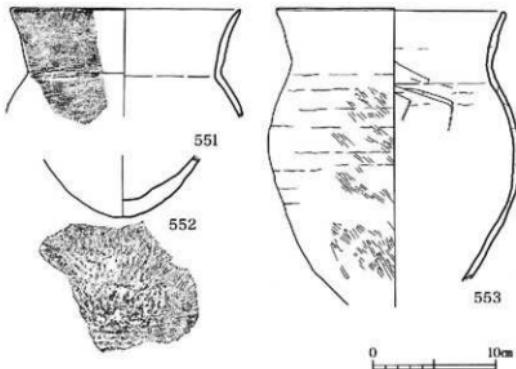
551・553は床面直上より出土し、胴の張った甕である。552は柱穴埋土より出土し、側面の張るレンズ状をした甕底部である。このほか、埋土上部から下部にかけて上器小片多数や縄文石器・礫を含んでいた。



【SA2】（第77図・図版6）

A1区西端に立地し、南西に近接してSA1が位置する。竪穴主軸は溝SE1の向きと一致する。竪穴の平面形は東西に長い方形で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。柱穴は床面で4本確認された。埋土は1～4層に分けられ、竪穴中央部に向かって黒みを増した。

埋土中には土師器・縄文土器、石器がまんべんなくみられた。土師器片には接合関係があり認められない。遺物から、中期



第76図 SA1および出土遺物実測図

第32表 古墳時代住居出土遺物観察表（1）

No.	基種	部位	流量 (m)	地 土	焼 け		色 調	備 考
					内 面	外 面		
549 SA6	壁	底部	15.2	— 24.9	約1～4mmの灰・ 灰白色粘土を含む 灰白色粘土を含む	口縁ナテ？ 築部 側方平行タクナ テナテ	内面・外壁：褐色 側方向擴張ナテ	外側側面全面にスス付属。
550 SA6	壁	底部のみ	—	—	約1～4mmの灰・ 灰白色粘土を含む 灰白色粘土を含む	—	内面・外壁：に少 い黄褐色	—
551 SA1	壁	口縁から脚部	19.1	—	約1～4mmの灰・ 灰白色粘土を含む 約1～3mmの灰・ 灰白色粘土を含む	横ナテ	口縁ナテ 口縁 一タタキ模様ナテ	内面・外壁：に少 い灰褐色
552 SA1	壁	底部のみ	—	—	約1～3mmの灰・ 灰白色粘土を含む 約1～3mmの灰・ 灰白色粘土を含む	横・斜方ナテ	平行タクナテナ テ	内面・外壁：に少 い灰褐色
553 SA1	壁	底部	18.8	— 20.8	約1～4mmの灰・ 灰白色粘土を含む 約1～3mmの灰・ 灰白色粘土を多く含む	口縁ナテ	口縁ナテ 築部 側方向ヘラミガナ テ	内面・外壁：に少 い灰褐色
554 SA2	壁	口縫から脚部	11.4	—	約1～3mmの灰・ 灰白色粘土を多く含む	横ナテ	ナテ	脚部に貼付痕跡。 痕跡上には工具による 削みあり。口縫付近にスス付属。
555 SA2	壁	脚部	—	—	約1～3mmの灰・ 灰白色粘土を多く含む	ナテ	ナテ	脚部に貼付痕跡。 痕跡上には工具による 削みあり。外側一部にスス付属。
556 SA2	壁	口縫から脚部	18.2	—	約1～3mmの灰・ 灰白色粘土を含む 約1～3mmの灰・ 灰白色粘土を含む	横ナテ	横ナテ	内面・外壁：褐色 内面・外壁：褐色
557 SA2	床	口縫のみ	—	—	約1～3mmの灰・ 灰白色粘土を含む	横ナテ	横ナテ+斜方ナ テ	内面・外壁：褐色 内面・外壁：褐色

第33表 古墳時代住居出土遺物観察表（2）

No	位置	器種	部位	法面 (cm)			地 土	調 査		内 面	外 面	内 面 外 面	備 考
				口径	身高	側厚		内面	外面				
558 SA4	坪	丸形		13.8	5.0	14.0	-	φ1~4cmの灰白、 灰赤・赤褐色を含む	ヘラミガキ	口筒ナテ	往かへ ラミガキ	内面：褐色 外面：に少し褐色	
559 SA4	坪	丸形		13.7	6.5	13.8	-	φ1~4cmの灰白、 φ1~2cmの灰白、 褐灰・に少い青褐色を含む	ミガキナ	ヘラミガキ+ナテ		内面：外面：に少い黄褐色	
560 SA4	窓跡?	底部		-	-	-	11.4	φ1~4cmの灰白、 灰白色を含む	ナテ	ナテ	脚部付近 に指痕	内面：に少い黄褐色 外面：褐色	上げ窓。
561 SA4	壁	口縁から底部		24.0	-	24.4	-	φ1~5cmの灰白、 灰白・褐色を含む	ナテ	口筒ナテ	口筒～ 脚部	内面：外面：褐色	外表面間にスス付 着。外面の風化著 しい。
562 SA4	壁	口縁から底部		26.3	-	-	-	φ1~5cmの黄褐色、 青・灰褐色を含む	ナテ	ナテ	脚部付近 に指痕	内面：外面：に少い黄褐色	脚部には貼付帶、 裏面には工具によ る削込みあり。外 面にスス付着。
567 SA5	壁	丸形		18.3	24.2	20.0	-	φ1~1.5cmの薄 黒褐色・黒褐色を多 く含む	口筒ナテ	脚部～ 底部ナテ	口筒ナテ	内面：に少い褐色 外面：黒褐色	最大径は脚部中 位。外表面黒中 位・口縁の一辺に スス付着。内面脚 部中位～底部コケ 付着。
568 SA5	壁	口縁から底部		21.8	-	20.6	-	φ1~7cmの灰白、 φ1~4cmの赤褐色、 赤・赤色などを含 む	口筒～脚部斜方向ナ テ	口筒ナテ	口筒～脚部ナテ	内面・外面：に少 い褐色	最大径は脚部上位 から中位にかけ て。
569 SA5	壁	口縁から底部		17.4	-	21.3	-	φ1~5cmの黄白、 灰白・灰白	口筒～脚部ナテ	口筒ナテ	脚部 斜方向タキメ	内面：灰褐色 外面：に少い黄褐色	最大径は脚部や 上位で、わいゆる ダラマ。
570 SA5	壁	丸形		15.1	21.4	19.1	5.6	φ1~4cmの茶褐色、 灰白・灰褐色を多 く含む	口筒ナテ	脚部～ 底部ナテ	口筒ナテ	内面・外面：に少 い黄褐色	最大径は脚部や 上位で、露頭はや うに凹凸。
571 SA5	壁	底部欠		19.8	-	22.4	-	φ1~5cmの赤褐色、 赤褐色を含む	口筒ナテ	脚部下斜 方向ナテ	口筒ナテ	内面：に少い黄褐色 外面：に少い褐色	最大径は脚部中 位。
572 SA5	壁	口縁のみ		21.7	-	-	-	φ1~5cmの灰白、 灰白・米色・褐色 などを多く含む	筒ナテ	筒ナテ		内面：浅黄褐色 外面：に少い褐色	外表面にスス付着。
573 SA5	壁	口縁から底部		16.3	-	-	-	φ1~4cmの茶褐色、 灰白・黒褐色。φ 1m以下の赤褐色 を含む	口筒斜方向ナテ	口筒ナテ	口筒ナテ	内面・外面：に少 い褐色	外表面にスス付着。
574 SA5	壁	脚部から底部		-	-	-	-	φ1~5cmの茶褐色、 灰白・灰褐色を含 む	ナテ	ナテ		内面・外面：に少 い黄褐色	外表面脚部下辺に スス付着。
575 SA5	壁	口縁から底部		17.8	-	-	-	φ1~4cmの赤褐色、 灰白・灰褐色	口筒ナテ	口筒ナテ	口筒ナテ	内面：に少い褐色 外面：に少い褐色	
576 SA5	壁	脚部から底部		-	-	-	-	φ1~5cmの灰白、 灰白・黄褐色を含 む	ナテ	ナテ		内面・外面：に少 い黄褐色	平底に近い丸底。 剥は張るほど感 される。外表面にス ス付着。
577 SA5	壁	底部		-	-	-	-	φ1~5cmの薄・灰 白・灰褐色を含む	ナテ	ナテ		内面：に少い褐色 外面：に少い黄褐色	
578 SA5	小形丸底盤	脚部から底部		-	-	9.6	4.4	φ1~7cmの灰白 褐色・灰白・灰褐色 などを多く含む	ナテ	ナテ	底部指痕	内面・外面：浅黃 褐色 外面：に少 い褐色	
579 SA5	壁	底部のみ		-	-	-	-	φ1~7cmの薄・灰 白・灰褐色を多く含 む	脚部～側ナテ	脚 部	脚部～側ナテ	内面・外面：褐色	底部外側に凹部が ある。
580 SA5	壁	口縁のみ		-	-	-	-	φ1~3cmの灰白、 灰白・灰褐色を含 む	口筒ナテ	口筒ナテ		内面・外面：に少 い黄褐色	
581 SA5	壁	口縁のみ		-	-	-	-	φ1~3cmの薄・灰 白・灰褐色を多く含 む	口筒ナテ	口筒ナテ		内面・外面：浅黃 褐色	
582 SA5	壁	口縁のみ		-	-	-	-	φ1~4cmの茶褐色、 灰白・灰褐色を多く 含む	口筒ナテ?	不明		内面・外面：浅黃 褐色	外表面にスス付着。
583 SA5	?	?		-	-	-	-	φ1~3cmの薄・ 灰褐色を含む	ナテ	ミガキ		内面：浅黄褐色 外面：に少い黄褐色	
584 SA5	壁	口縫ほか		-	-	-	-	φ1~5cmの少 い赤褐色。φ1~2 mmの灰白、光白あ る黒褐色を含む	筒ナテ	口筒ナテ	口筒ナテ	内面・外面：に少 い黄褐色	
585 SA5	壁	脚部のみ		-	-	-	-	φ1~3cmの灰白、 灰白・灰褐色を多く含 む	ナテ	脚部タクナテ下部 部分に指痕ナテ?		内面：浅黄褐色 外面：に少い黄褐色	

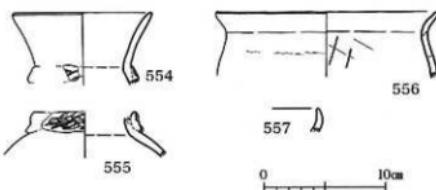
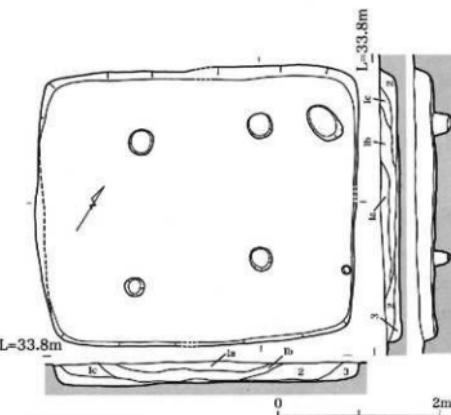
後半から後期初頭である。なお、堅穴中央部の黒褐色土中には、割縫が多く含まれていた。縫には赤化したものも多い。

SA2出土遺物（第77図）

554～556はいずれも床面直上より出土した。554・555は頸部付け根に刻み目突帯をもつ壺、557は壺、558は甕であり、古墳中期から後期まで時期幅が存在する。

【 SA4 】（第78図・図版6）

A1区中央で検出され、0.5m南にSA6が位置する。堅穴の平面形は方形である。埋土は暗い褐色土を基本とし、色調から4層に分けられる。各層ともに少量の炭化物を含む。床面はおむね平坦で、中央部には焼土層が広がる。柱穴は地山掘削面まで下げた段階で7本確認され、うち4本が主柱と考えられる。主柱穴間の芯々距離は1.6～1.8mで、対角線上にやや歪な平行四辺形の配置をする。柱掘方は直径25cm程の円形プランで、深さは床面より30cmほどである。断面形は上端が大きく広がる。遺物から、中期後半から後期初頭である。なお、堅穴床面により削平された土坑2基が確認され、遺物から縄文早期のものである。



第77図 SA2および出土遺物実測図

第34表 古墳時代住居出土遺物観察表（3）

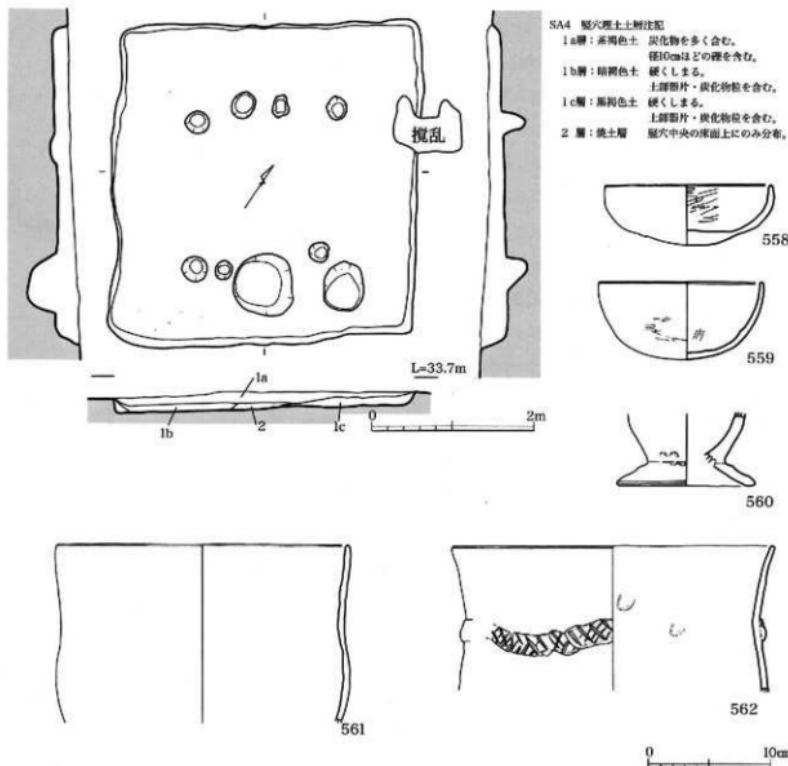
No.	位置	器種	部位	直徑 (cm)				地 土	調 査		色 調	備 考
				口徑	高さ	内面	外 面		内面	外 面		
558	SA5	壺	尖形	16.2	7.2	17.1	2.6	ナメ（工具痕が一部 残る）	口縁→高脚？テ ラリ	内面：にぶい褐紫色 外面：にぶい褐色	赤あひずみが強め。	
557	SA5	陶質壺	尖形	10.6	4.9	13.2	-	ナメ	横ナメ+凹凸ヘラ附 り	内面：灰オリ ーブ色		
直徑 (cm)												
内面　縁　厚　底面												
553	SA5	棒状壺	砂岩									
554	SA5	棒状壺	砂岩									
555	SA5	棒状壺	砂岩									
556	SA5	棒状壺	砂岩									

蓝色の付着物（マンガンか）は自然に付いたもの。

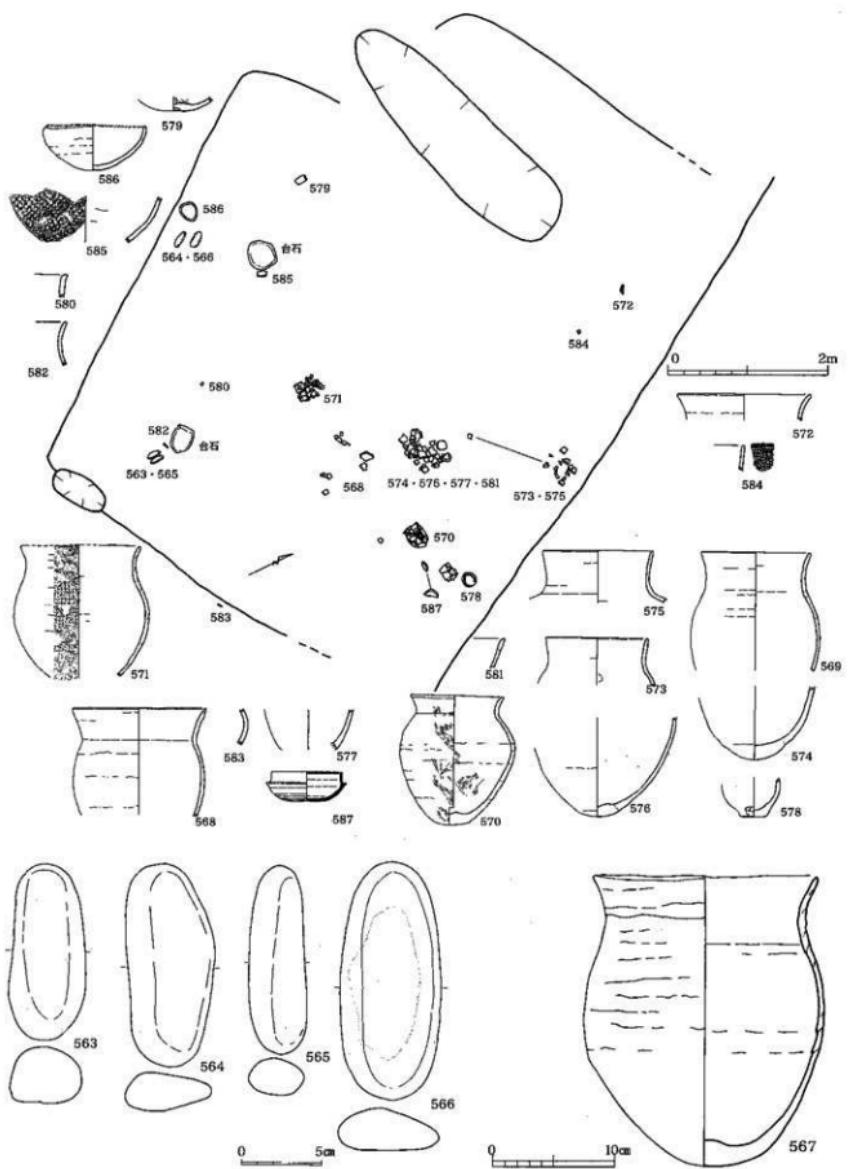
SA4 出土遺物（第78図） 558～562は竪穴床面付近より出土した。558・559は壺である。559の器高は口径の1／2程度で体部は深く、口縁部は内湾する。558は559と口径はほぼ同じで、体部はやや浅く、底部は厚い。560は脚台付の壺であろうか。561・562は壺で、562の頸部には一条の刻み目突帯がめぐっている。

【 SA5 】（第79図） A1区中央に位置し、東端は調査区外にのびている。調査中の不手際により遺構プランを明確にしえていないが、調査中のメモや遺物分布から推して、第79図中の想定線のような一辺5.6～5.7m前後の方形プランであったと推定される。遺物は、とくに竪穴中央から南東隅にかけて、床面上から土師器甕・壺、須恵器壺がまとまって出土した。完形品が多い。竪穴西よりには棒状礫・台石と思われる平石が出土した。

なお、SA5北側には、SA5に切られた住居1軒があった可能性がある。



第78図 SA4 および出土遺物実測図



第79図 SA5遺物出土状況（上段）
SA5出土遺物実測図（下段）

SA5 出土遺物 (第79・80図)

須恵器 坯 (587) は、受部が器高に対して高くまたほぼ直立する。TK208並行である。

土師器 壺 (568~573・574・576・577・579・584・585) には大小がみられる。器形は、胴部上半から中央に最大径を持ち、頸部の屈曲は内外面ともに弱く、稜線も不明瞭である。底部は尖底ぎみの丸底で、574のように大きく膨らむもの、570・576のように内面にこぶを持つものがある。571・584・585の外面は、格子目タキの後ナデである。壺には大小があり、大形 (573・575) は口縁付近しかないので、口縁は直立ぎみに外傾する。小形 (578) は平底である。581は口縁のみであるが、直線的に外傾し、口唇は内に向かって横ナデされることから、瓶の可能性がある。580も瓶か。586は坯で、口径16.2cmに対し器高7.2cmと高く、また体部は外に丸く広がり口縁はやや内傾する。焼き歪みが大きい。

石器 563~566は棒状の砂岩礫である。敲打痕・磨痕といった使用痕はみられない。563・565は南西隅付近、564・566は西壁際の竪穴床面から、2点ずつまとめて出土した。このほか、30×25cmほどの平石2点がある。尾鈴山酸性岩類製であり、被熱痕・敲打痕といった使用痕は確認されない。台石であろうか。

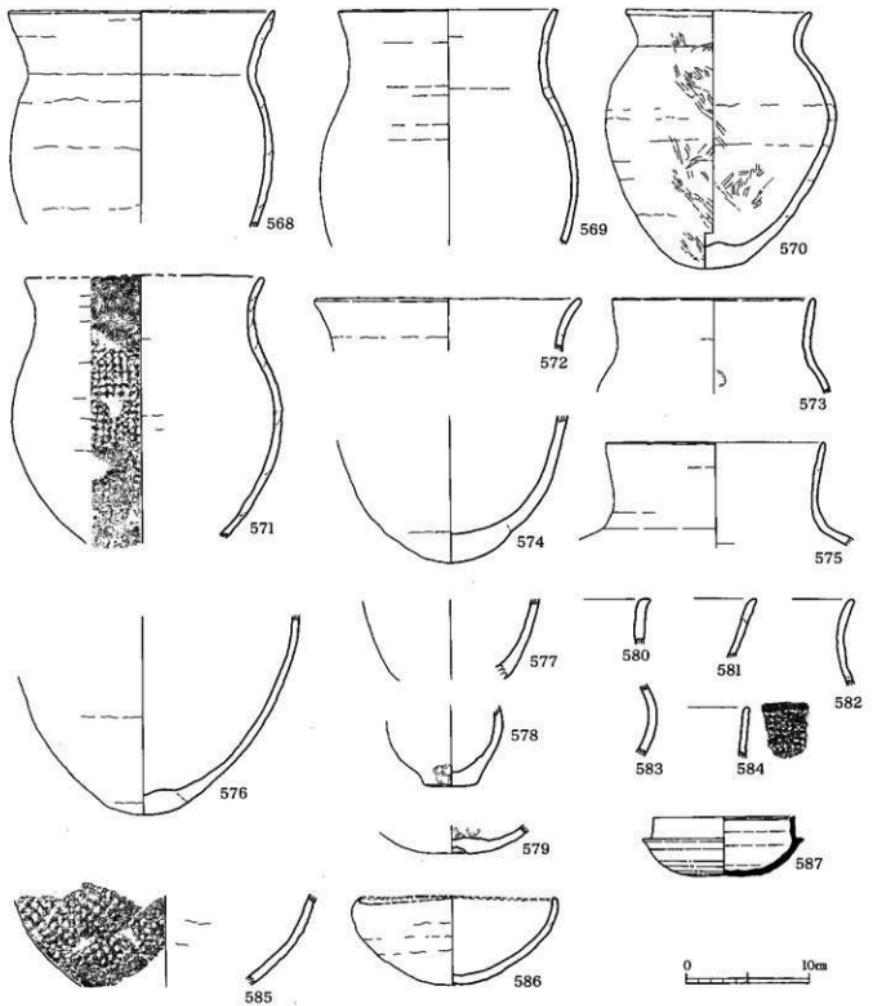
【 SA10 】(第81図・図版6) A2区中央南、丘陵端側に位置する。南半分は後世の溝によって削平され、南壁の立ち上がりは失われる。床面はおおむね平坦である。主柱穴は地山掘削面まで下げた段階で4本確認された。主柱穴間の芯々距離は2.8mほどで、北側の東西間が2.1mとせまい。対角線上にやや歪な平行四辺形の配置をとる。柱掘方は直径70cm程の円形プランと大きく、深さは床面より40cmほどを測る。断面形は上端が大きく広がるもので、段を持つことから柱材が抜き取られた可能性もある。住居中央からやや北壁よりには、土器埋設炉がある。この壺から、終末期の住居である。

なお、竪穴床面により削平された土坑3基が確認されたが、非常に残存が悪く、時期や性格等は不詳である。

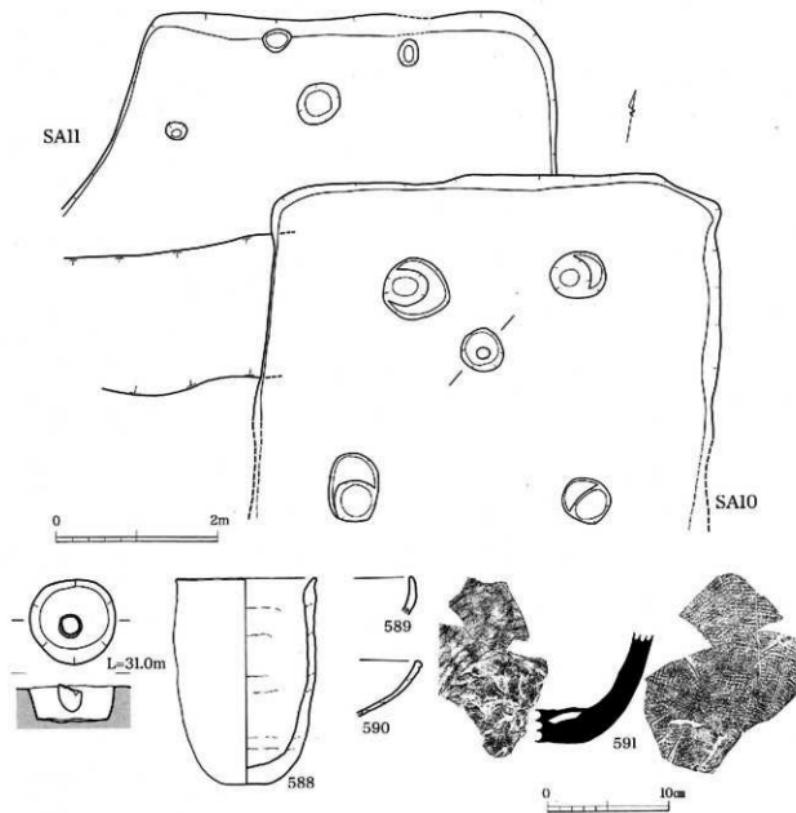
SA10 土器埋設炉 (第81図・図版6) 土坑は直径52cmのほぼ円形で、竪穴床掘削面から深さ20cm、ほぼ垂直に掘り込まれ床面は平らである。土坑埋土は暗褐色を呈し、分層はできない。壺 (588) は土坑内に、口縁を上にして立位で置かれ、壺底部は土坑床面から5cm浮いた位置にある。壺の口縁は既に失われ、破片が壺内側に倒れ込んでいた。壺内部の堆積土については、乾燥・水洗を実施したがなんら検出されなかった。壺は砲弾形で、胴部は直立し口唇部のみ外反する。内面の接合痕が非常に明瞭に残っている。

SA10 出土遺物 (第81図・図版25) 588は埋設された土器である。器形は砲弾形で、長胴である。粘土繋ぎ目が顕著に残る。589~591は竪穴埋土中より出土した。590の器形は不明で、皿状のものか。591は須恵器壺の底部であり、焼き歪んでいる。

【 SA11 】(第81図) A2区中央南、丘陵端側に位置し、SA10に切られている。柱穴は4ヶ所掘り込まれるが、規模等から主柱穴といえるものはない。埋土は暗褐色土であり、遺物などの混入もほとん



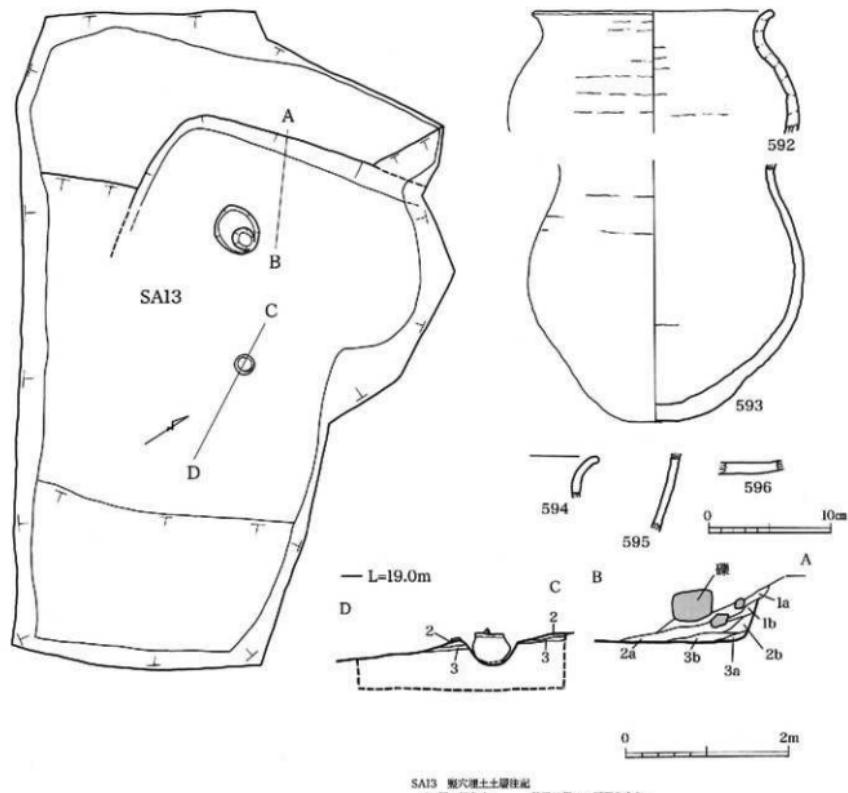
第80図 SA5出土遺物実測図（2）



第81図 SA10・SA11およびSA10土器埋設炉・出土遺物実測図

ど見られなかった。

【 SA13 】(第82図・図版6) SA13は他の住居群と異なり、B区斜面上のわずかなテラス部分に位置する。北から南に傾斜する斜面であったと推定され、後世の段切りにより、北壁側のみ残存していた。住居位置の標高は約20mで、丘陵頂部からの比高差は15mである。主柱穴は北西隅の1本のみ確認された。竪穴の埋土は比較的明るい褐色土を基本とし、埋土1層中には斜面上から崩落した巨礫が含まれ



SA13 墓穴埋土土層地図

1a層：褐色土 粒子は細い、巨礫を含む。

1b層：明褐色土 1aよりも粒子は粗い。2~10mmの小砂利を多く含む。

2a層：明褐色土 1層にくらべ粒子は細かい。細粒の砂利を多く含む。

2b層：褐色土 粒子は粗く、砂らかい。

3a層：にじい褐色土 粒子は細かい。

3b層：にじい褐色土 3層より若干粗粒。土師刷毛片を含む。

※ 各層の細分については、a~bを付して表した。
たとえば大区分では1層であり、細分すると1a・1b層となる。

第82図 SA13および土器埋設炉・出土遺物実測図

ていた。巨礫は、斜面部に露出した基盤礫層中のものである。竪穴中央付近には土器埋設炉がある。遺物から古墳時代終末期である。

なお、住居南側は風倒木によって攪乱されていた。

SA13 土器埋設炉 (第82図・図版25) 土坑は直径25cmのほぼ円形で、竪穴床掘前面から深さ15cm、甕がちょうど収まるような格好で掘り込まれる。床面はボウル状をする。甕(593)は口縁を上にし

て立位で置かれる。壺の口縁から頸部はない。壺内部の堆積土については、乾燥・水洗を実施したがなんら検出されなかつた。壺は球形胴で、胸部中央から下半に最大径がある。胎土は粗く、また接合痕が内外面ともに顕著に残る。

SA13 出土遺物（第82図・図版25）

593は土器埋設炉である。592は竪穴床面直上に散在していた。596は竪穴北西隅の床面直上で出土した。594・595は竪穴南の既削平部分からの出土であり、SA13に伴わない可能性もある。

土 塚

該期の土坑として明確なのは、SC1・7・13のみである。このほか、時期不明中に該期のものが含まれる可能性もある。

【 SC7 】（第83図）

土坑は $0.5m \times 0.4m$ の梢円形で、立ち上がりは外に向かって大きく開く。土坑は散礫2の分布と重なった位置にあり、土坑埋土中にも多量の赤化磧が混入していた。壺（597）は土坑中に横倒しで出土した。周辺に関連遺構はみられない。

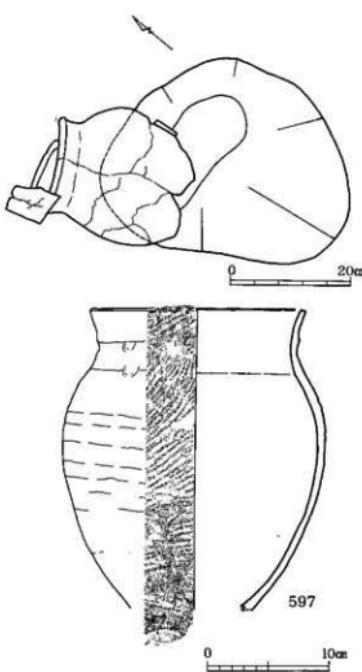
SC7 出土遺物（第83図・図版23） 壺は斜方向のタタキを持つ。外面胸部中位から下位にかけてススの付着がみられ、日常使用の壺である。底部が失われている。

SC7 のほか、SC1・SC13で若干の壺・壺（598～601）が出土する。土坑は、竪穴住居に付随するもの等の可能性を考慮し、周辺の柱穴等との配置を検討したが、明確な関係は見いだせない。遺物はいずれも古墳時代中期後半から後期初頭に収まり、竪穴住居群と同時期である。

溝

【 SE1 】（第73図）

SE1はA1区西側に、調査区を南東～北西に継断するように検出された。SA2の主軸方向とはほぼ同一であり、時期的に近接するものと推定される。



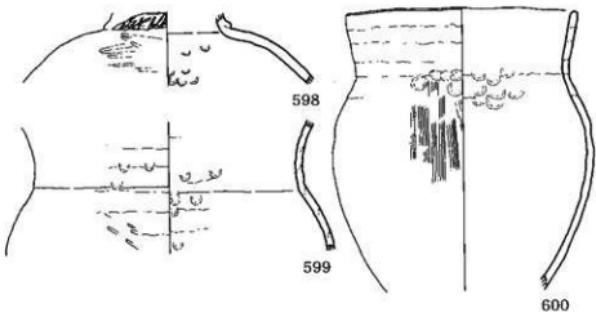
第83図 SC7および出土遺物実測図

SE 1は、検出面で幅0.9m、下場幅0.4m、床面までの残深0.54mである。埋土中には、特に北半において多量の礫の混入が確認された。礫径、形状は多様で、その多くは赤化していた。この礫の特徴はSE 1周辺に残された縄文早期の集石構成礫と似通っており、SE 1の埋没過程で混入したものと推測される。礫のほか、埋土中から602・603が出土した。

[SE4]

(第73図)

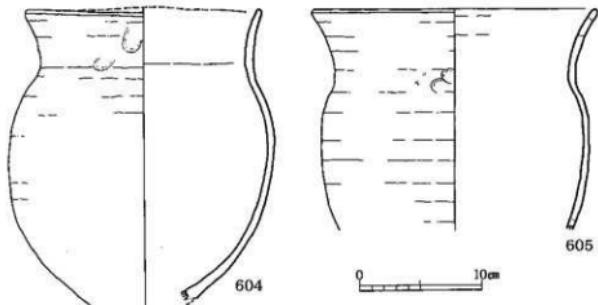
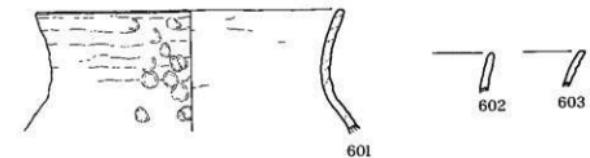
SE 4は、野首1号墳周溝周辺を覆っていた黒色土を指す。遺構であるか明確でないが、甕(604・605)が含まれていた。性格は不明。



[SE5]

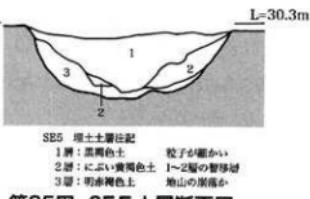
(第4・85図)

SE 5はA2区丘陵端の黒色土を除いた時点で検出された。走行方向は、丘陵端から丘陵斜面を下っている。溝埋土からは時期の判別できる遺物の出土はないが、溝を覆っていた黒色土中から、弥生時代から古墳時代・古代の土器が出土した(606~614)。



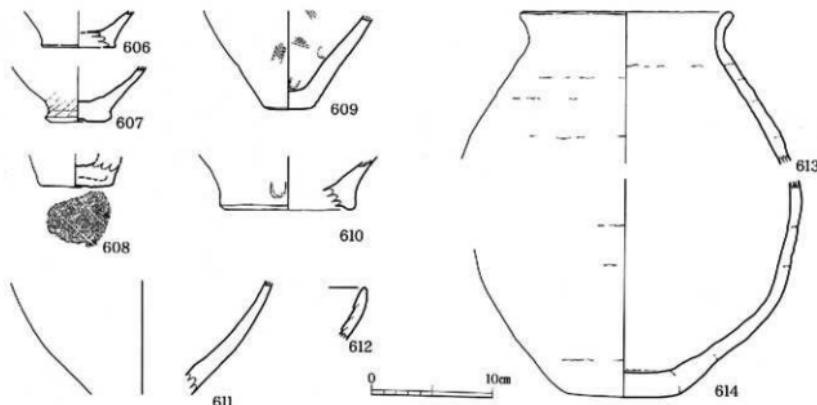
第84図 土坑・溝等出土遺物実測図(1)

このほか、A2区東端で、白色粘土と炭化物・焼土粒の広
がる箇所があった。範囲は30cm四方の円形で、小トレンチ
を設定し断面を確認したところ、白色粘土等はわずかに1
cmほど残存するばかりであった。これらの性格については、
削平の著しいカマドの可能性も想起されるが断定できない。
周辺には縄文早期の炉穴群が分布する。

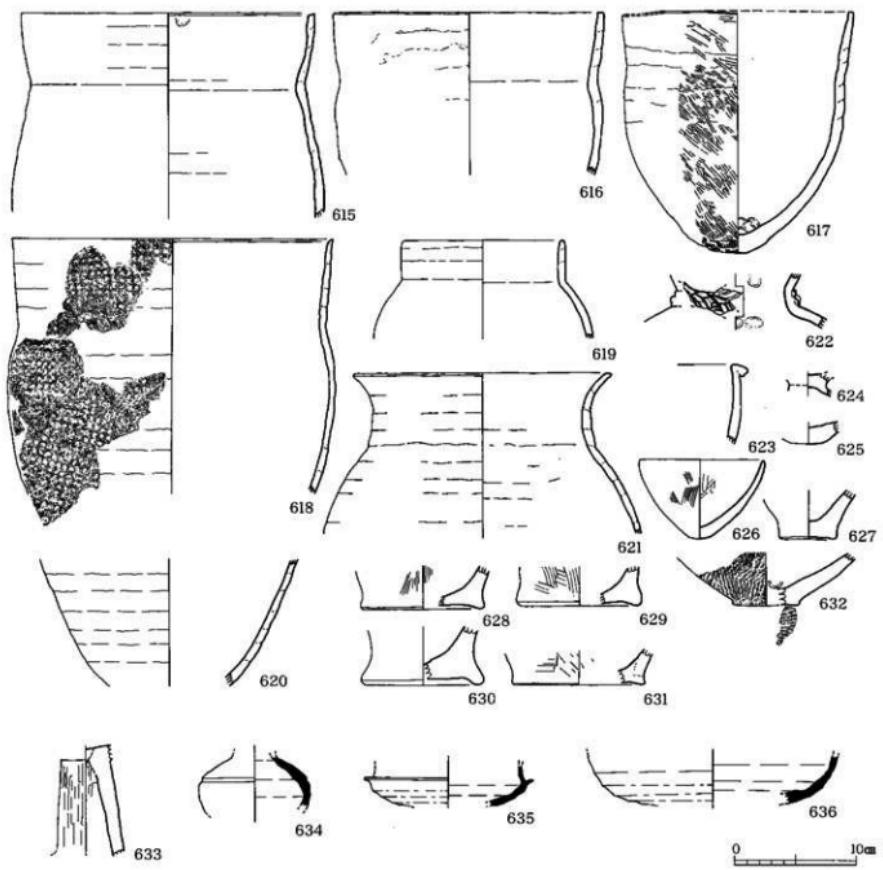


第85図 SE5 土層断面図

なお、遺構検出面や表土中あるいは中・近世などあきらかに他時期の遺構埋土中より、数多くの弥生
～古墳時代の遺物が採集された（615～636）。



第86図 土坑・溝等出土遺物実測図（2）



第87図 調査区内採集遺物実測図

第35表 古墳時代住居ほか出土遺物観察表

No.	位置	器種	部位	品目 (cm)			地 上	内 面		外 面		備 考
				口径	最高	刻溝		幅	深さ	幅	深さ	
588	SA10	壺	完形	11.7	17.1	11.9	3.7	φ1~7mmの灰褐色、黄皮、褐・灰白色を含む	ナテ	縦縞模ナテ+ナテ	内面：にぶい黄褐色 外面：褐色	筒形
589	SA10	汗	口縁のみ	-	-	-	-	φ1~3mmの褐・暗褐色を含む	横ナテ	横ナテ	内面・外面：にぶい黄褐色	
590	SA10	壺	口縁付近	-	-	-	-	φ1~4mmの褐・暗褐色、にぶい褐色を含む	縦ミガキ	口縫模ナテ+ほか斜方向ナテ	内面・外面：にぶい黄褐色	
591	SA10	漆器蓋	底部のみ	-	-	-	-	φ1~5mmの灰白色を含む	タタキ	格子模タタキ	内面：灰褐色 外面：灰色	焼きくくれ・焼きひづみ器 底は堅膜
592	SA13	壺	口縁から腹部	20.0	-	24.0	-	φ1~6mmの灰褐色、灰褐色を含む	ナテ	ナテ	内面・外面：にぶい黄褐色	筒形模様。口縁はたぶん ありやや外反する。肩は大きくなる。
593	SA13	壺	口縁	-	-	22.9	3.5	φ1~6mmの赤に赤い擦痕、褐色を多く含む	横縞模ナテ+ナテ	縦縞模ナテ+ナテ	内面・外面：にぶい黄褐色	
594	SA13	壺	口縁	-	-	-	-	φ1~5mmの褐・黄褐色を含む	ナテ	ナテ	内面・外面：にぶい黄褐色	
595	SA13	壺	腹部	-	-	-	-	φ1~5mmの褐・黄褐色を含む	ナテ	ナテ	内面・外面：にぶい黄褐色	
596	SA13	壺	底部	-	-	-	-	φ1~4mmの灰褐色を含む	ナテ?	ナテ?	内面・外面：褐色	
597	SC7	壺	底部	16.0	-	21.8	-	φ1~4mmの褐・茶褐色、灰白色を含む	口縫模ナテ・肩斜方ナテ	口縫模ナテ・口縫斜方ナテ	内面：にぶい黄褐色 外面：にぶい黄褐色	壺部中部一下部にスス付 墨。
598	SC1	壺	腹部	-	-	-	-	φ1~4mmの灰・茶褐色、褐・系褐色を含む	(ナ) (比較的丁寧)	タタキ後ミガキ	内面・外面：にぶい黄褐色	斜側に貼付突起。表面に は工具による跡があり。外 面にスス付墨。
599	SC1	壺	腹部	-	-	-	-	φ1~4mmの褐・茶褐色、φ1~2mmの褐色を含む	ナテ	ヘラミガキ十一部 指縞模	内面：にぶい黄褐色 外面：にぶい黄褐色	
600	SC1	壺	口縁から腹部	16.8	-	21.7	-	φ1~5mmの茶褐色、褐・灰白色を含む	斜方方向ナテ	口縫模ナテ・斜方方向ナテ	内面：にぶい黄褐色 外面：暗褐色	外裏ともに壺部に指縞模 様墨。腹部から底部上半に スス付墨。
601	SC13	壺	口縁から腹部	24.6	-	-	-	φ1~4mmの灰褐色、黄皮、灰白色を含む	横ナテ+ナテ	口縫模ナテ・方向タタキ	内面：淡褐色 外面：浅黄褐色	外裏に指縞模立つ。外裏 にスス付墨。
602	SE1	壺	口縁のみ	-	-	-	-	φ1~3mmの灰褐色、灰白色を含む	横ナテ	横ナテ	内面・外面：淡褐色	
603	SE1	壺	口縁のみ	-	-	-	-	φ1~3mmの褐・茶褐色、灰褐色を含む	横ナテ	斜方向タタキ後ナテ ナテ?	内面：淡黄褐色 外面：にぶい黄褐色	
604	SE4	壺	底部	19.6	-	22.2	-	φ1~5mmの灰褐色、灰白、褐褐色を含む	ミガキ	口縫模ナテ+方向タタキ	内面：褐色 外面：褐色	おそらく丸底で埋形器。推 定高さ25cm。
605	SE4	壺	口縁から腹部	23.1	-	22.2	-	φ1~4mmの褐・茶褐色を含む	ナテ	ナテ	内面・外面：にぶい黄褐色	外面にスス付墨。
606	EB	壺	底部	-	-	6.2	-	φ1~4mmの茶褐色、茶褐色を多く含む	横・斜方向ナテ	斜方向ナテ	内面・外面：淡褐色	
607	EB	壺	底部	-	-	5.5	-	φ1~3mmの灰褐色、褐色を含む	ナテ	ナテ	内面・外面：にぶい黄褐色	底部には自重のため落れ れた痕跡あり。
608	T3	壺	底部	-	-	6.0	-	φ1~3mmの灰褐色を多く含む	指縞模あり	ナテ	内面・外面：褐色	底部に水の痕跡。
609	EB	壺	底部	-	-	4.1	-	φ1~6mmの褐・灰褐色を含む	ナテ	ハケ	内面：灰褐色 外面：にぶい黄褐色	
610	EB	壺	底部	-	-	11.2	-	φ1~4mmの灰褐色、茶褐色を含む	3.5mm幅の工具痕	横・斜方向タタキ? ナテ?	内面：灰褐色 外面：にぶい黄褐色	
611	SE5	壺	底部付近	-	-	-	-	φ1~5mmの茶褐色、茶褐色を多く含む	ナテ	ナテ	内面：灰褐色 外面：褐色	外裏に一部スス付墨。
612	T13EB	壺	口縁のみ	-	-	-	-	φ1~5mmの灰褐色、灰白色を含む	ナテ	ナテ	内面・外面：灰褐色	
613	T13EB	壺	口縁から腹部	17.0	-	-	-	φ1~4mmの茶褐色を含む	横ナテ	口縫模ナテ+ほかは 高さのため不規	内面・外面：淡褐色	
614	T13EB	壺	底部	-	-	14.8	8.6	茶褐色のため不規	ナテ	風化のため不規	内面・外面：淡褐色	

第36表 調査区内採集物観察表

No.	位置	面積	法面 (m ²)	地質	調査		色調	備考
					内面	外面		
615 点 墓	口縫から剥離	24.2	- 25.9 -	δ 1~4mの褐・黄褐色を含む 黄褐色・灰白色を含む	ナテ	ナテ	内面: に少し黄色 外面: に少し褐色 褐色	外間にスス付箇。
616 点 墓	口縫から剥離	22.4	- 22.2 -	δ 1~4mの褐・黄褐色を含む 黄褐色・灰白色を含む	ナテ	ナテ	内面: に少し褐色 外面: に少し黄色 褐色	外間にスス付箇。
617 SQ2 墓	兜形	18.8	20.2 18.3	- δ 1~7mの褐・黄褐色を多く含む	ナテ	口縫～剥離斜方向 ヘラミガキ 剥離斜 前方斜平行タキ	内面・外面: 褐色	外間に剥離顯著。最大径は 口縫あり、剥離の狭なら いどう観。
618 点 墓	口縫から剥離	26.6	- 27.2 -	δ 1~7mの黄褐色を含む 黄褐色・灰白色を含む	剥離ナテ	口縫ナテ 口縫～ 剥離斜平行タキ	内面・外面: に少 い黄褐色	外間にスス付箇。
619 点 墓	口縫から剥離	13.6	- - -	δ 1~3mの黄褐色を含む 黄褐色・灰白色を含む	ナテ	口縫ナテ � 微弱 方向タキ	内面・外面: に少 い褐色	
620 点 墓	剥離	-	- - -	δ 1~8mの灰白・ 黄褐色を含む	ナテ	ナテ	内面: に少し黄色 外面: 反灰色	外間にスス付箇。
621 墓	口縫から剥離	21.4	- - -	δ 1~5mの灰白・ 黄褐色を含む	ナテ	口縫ナテ 剥離斜 方向タキ	内面: 黄褐色 外面: 黄褐色	
A 墓	張目のみ	-	- - -	δ 1~3mの褐灰・ 灰白色を含む	ナテ	ナテ	内面・外面: 褐色	張目に貼付安樂。安樂上に は工具による跡みあり。外 面にスス付箇。
622								
623 SN1 墓	口縫のみ	-	- - -	δ 1~4mの灰白・ 黄褐色を含む	丁寧なナテ	丁寧なナテ	内面・外面: に少 い黄褐色	口縫を外方に折り返す。
624 B 高坪		-	- - -	δ 1m以下の褐・ 灰白・光沢ある黒 色を含む	不明	不明	内面・外面: 褐色	
625 点 墓?	底部のみ	-	- - -	2.7 δ 1~6mのに少 い褐色・黒・灰白色 を含む	ナテ	ナテ	内面: 褐色 外面: 黄褐色	やや平坦。
626 TA 評?	兜形	10.2	6.6 10.4 1.8	δ 1~4mの灰白・ 黄褐色を含む δ 1~4mの褐・ 黄褐色・灰白色を含む	ミガキ	口縫～底部ハケ 底部ナテ	内面・外面: に少 い褐色	外縫底部付近にスス付箇。
627 点 墓?	底部のみ	-	- - -	4.8 δ 1~3mの褐・ 黄褐色・光沢ある黒 色を含む	ナテ	ナテ?	内面・外面: 褐色	
628 A 墓	底部のみ	-	- - -	10.3 δ 1~2.5mのガラ ス質・無灰・灰白 色を含む	ハケ?	ハケ?	内面: 黄褐色 外面: に少し黄褐色	
629 A 墓	底部のみ	-	- - -	10.4 δ 1~2.5mの褐・ 黄褐色・灰白色を含む	ハケ?	ハケ?	内面・外面: に少 い褐色	
630 底 墓	底部のみ	-	- - -	9.3 δ 1~3mの褐色・ 無灰・灰白色を含む	横方向の条痕?	ナテ	内面: 淡褐色 外面: 褐色	やや上げ面。
631 点 墓	底部のみ	-	- - -	10.7 δ 1~4mの黄褐色 を含む	ナテ	ナテ	内面・外面: に少 い褐色	
632 SN1 ?	底部のみ	-	- - -	5.6 δ 1~4mの褐・ 黄褐色・灰白色を含む			内面・外面: に少 い黄褐色	
633 T7 高坪	剥離	-	- - -	δ 1~3mの褐色・ 灰白・赤褐色を含む	ナテ	縦方向にヘラミガ キ	内面・外面: 淡黃 褐色	
634 B 墓	剥離のみ	-	- 9.2 -	剥離	田舎模ナテ	田舎模ナテ	内面・外面: 褐色	ややたみを持ちつつ複数玉 状を指向する。 TK217平行か。
635 点 高坪	底部のみ	11.9	- 14.2 -	粗良	田舎模ナテ	球体部田舎模へラ ケズリ	内面・外面: 褐色	底部の状況から、方形透か し窓の切り込みを複数でき る。(3方透かし)、底部よ りTK23~TK47平行の底部 の透かし。
636 B 台付長頭壁 剥離下半のみ	- - - -	-	-	δ 1m以下の白色 砂粒をわずかに含む	田舎模ナテ	田舎模ナテ	内面・外面: 褐色	也部を欠損。

2 野首1号墳

古墳の位置と現況（第73図・巻頭図版6）

野首1号墳は丘陵端に築かれ、丘陵南に入る谷に向かって開口する。さらに、調査の過程で、調査区外の斜面に、野首1号墳に近接してもう1基古墳が確認された。新古墳は、古墳築造面の高低差はあるものの、野首1号墳に近接すること、開口方向がほぼ同じであることから野首1号墳と一群のものであり、新古墳を野首2号墳とした。

1号墳の調査の方法と経過・概要（図版5）

調査当初、古墳の存在はまったく予想されていなかった。確認調査T10で溝が検出され、出土土器から弥生後期の溝と判断していた。そこで、溝上部に堆積した黒色土を除いていくと、溝は円形にめぐるとわかり、さらに、溝の内側に巨石が「コ」の字に露出した。この時点ではじめて、円形にめぐる溝は古墳周溝、巨石は上部を削平された石室玄室と判明した。

玄室内側には、崩落した玄室石材と土砂が詰まっており、床面までの深さなどがまったく不明な状態であった。そこで、玄室の軸線を交叉する鞋を残したうえで、奥壁・側壁1段目の上半分が露出するまで一気に掘り下げた。崩落した石材についてはチェーンブロックで除いた。遺物は、床面上から須恵器壺、鉄製武器・馬具類、耳環などが出土した。周溝は鞋2ヶ所を残して掘り上げ、周溝床面上から須恵器大甕、提瓶、甕などが出土した。記録方法としては、石室・周溝を1/20、石室内、周溝内の遺物類の出土状況を1/10で図化した。

野首1号墳は、調査時においてすでに近世の溝などにより大きく削平されていた。現況は、玄室壁面2~3段目までが残存していた。なお、玄室の羨道側半分、周溝南半分については、調査区外にのびるため未調査である。

なお、調査の過程で古墳の保存の方向性が示されることとなった。したがって、石室石材の解体調査や周溝・墳丘部分にかかる繩文時代等の遺構への精査はおこなっていない。石室・周溝については土囊袋を充填して保護している。

埋葬施設

墳丘・周溝（第88・89・91図・図版5）

墳丘は、玄室規模や丘陵の地勢から、おそらく低い盛土をもつ円墳であったと推定される。墳丘直径は図上復元で約7.2mである。墳丘の高さについては、削平のため不詳である。

周溝の調査は約半周までとなつたが、おそらくやや隅丸気味に円形にめぐると推定される。断面は逆台形を基本とし、検出面で幅2.6~2.8m、底面で幅1.0~1.4mを測る。底面の高さは、ベルト1で標高30.9m、ベルト2で標高30.3mとなり、底面は奥壁側が最も高く両側壁側に向かって傾斜する。周溝奥壁側の底面上には、甕、提瓶、須恵器大甕・中甕がまとまって出土した。これらは、底面にはりつく、一部の資料はめり込むような出土位置であった。周溝埋土は黒褐色土を基本とし、埋土中には、古墳時代後期土器、繩文土器・石器の小片などが含まれる。堆積状況から、周溝は自然に埋没したものであろう。

石室掘方

石室の掘方は、削平面でのみ確認できた。調査については、保存の方向性が出てきたため、掘方の精査はおこなっていない。掘方の幅は、削平面（玄室壁2～3段目上面）で4.1mある。掘方壁と玄室石材との隙間には、ピンクに近い色調の粘質土を詰め、裏込めとしている。

石室の石材・裏込めの供給源（巻頭図版8）

石室の石材のうち、石室内側に露出する壁材は、一部すき間を埋める小形礫に砂岩が用いられるほかは、尾鈴山酸性岩類で占められる。裏込め土は、ピンクに近い色調や角閃石が含まれることから、Aso-4起源のものである。

石室石材・裏込め土については、発掘調査終了後の道路建設にともなう掘削工事中に、丘陵壁面に同質の礫・粘質土を確認した。石室石材は本遺跡基本層序のXV層、裏込めの粘質土はXIV層（本報告第V章を参照）から採取されたと推測される。おそらくは、谷に向かって露出した露頭等から採取されたのであろう。なお、眼前を流れる小丸川河原の礫は小振りで、石室壁材にはなりえない。

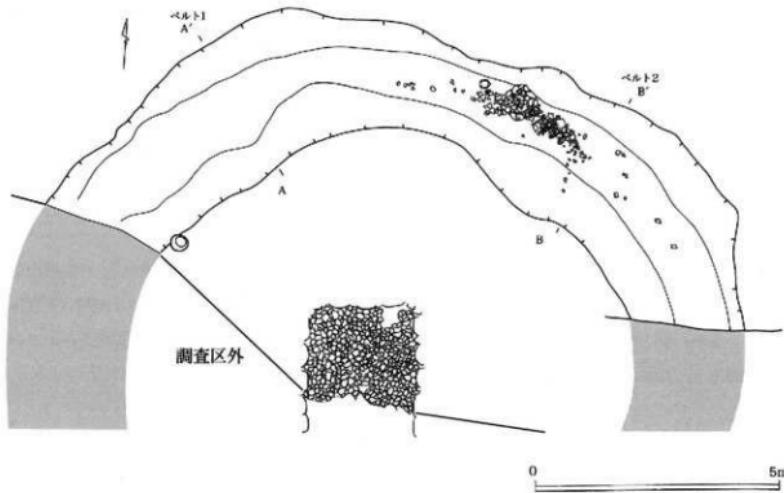
玄室（第93図・図版5）

石室の調査は、調査区の都合上、玄室の一部のみとなった。玄室内の崩落石材の向きは、立位・横位両者が混在しており、これは盛土などとともに石室内へ一気に崩落した結果であろう。この崩落土中には、遺物はほとんど確認されていない。玄室の残存状況は、奥壁・右側壁が床から3段目まで、左側壁が2段目までである。

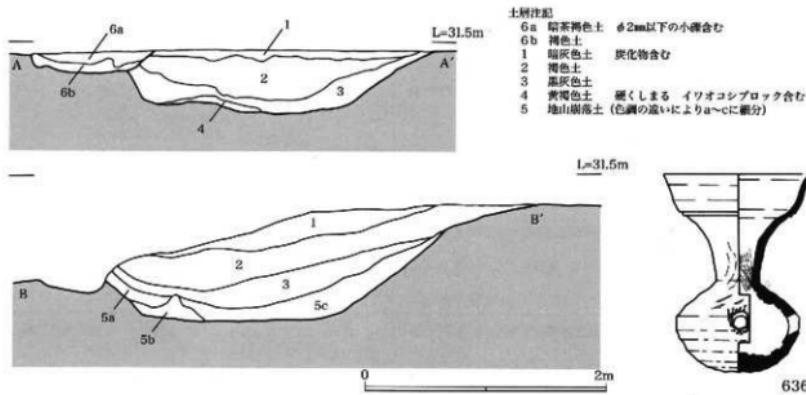
玄室の規模は、床面で奥行き1.9m+ α 、幅2.2mである。石材の積み方は野積みを基本とし、石材間の隙間には小振りの礫を詰めて補っている。また、工程によって、玄室内側に石材の正面・側面・小口面をみせており、積み方に変化をもたせる特徴がある（第37表）。4段目より上段は削平のため不明である。玄室床面は10～20cm角の平石がほぼ水平に敷かれる。敷石は一面のみであり、ほぼ隙間なく敷き詰められる。平石の上に小礫などが敷き詰められることはない。

第37表 野首1号墳の石室構築過程

工程	作業内容	石材の積み方	石種
I 工程	基底石5つを配し（奥壁1段目）、奥壁の位置を決定する。 次に、奥壁1段目両端の石材の正面に、石材を配する（両側壁1段目）。	正面 砂岩（隙間充填）	尾鈴山酸性岩類
	奥壁・両側壁ともに、基底石どうしのすき間に1個ずつ礫を詰める。		
	床面に平石が敷かれる。平石上に小礫を敷くことはない。		
II 工程	I段目の上に小振りの礫を補いながら石材を積む。 奥壁・側壁の接点には、奥壁両端よりに力石を積む。	側面 尾鈴山酸性岩類	
III 工程	2段目の上に小振りの礫を補いながら石材を積む。 2段目の石材よりも内側にわずかにせり出すことから、持ち送りを意識したものと推定される。	小口面 尾鈴山酸性岩類	
IV 工程～	IV工程以降、おそらく急に持ち送りながら天井へつながるものと予想される。 すでに削平を受けている。		尾鈴山酸性岩類



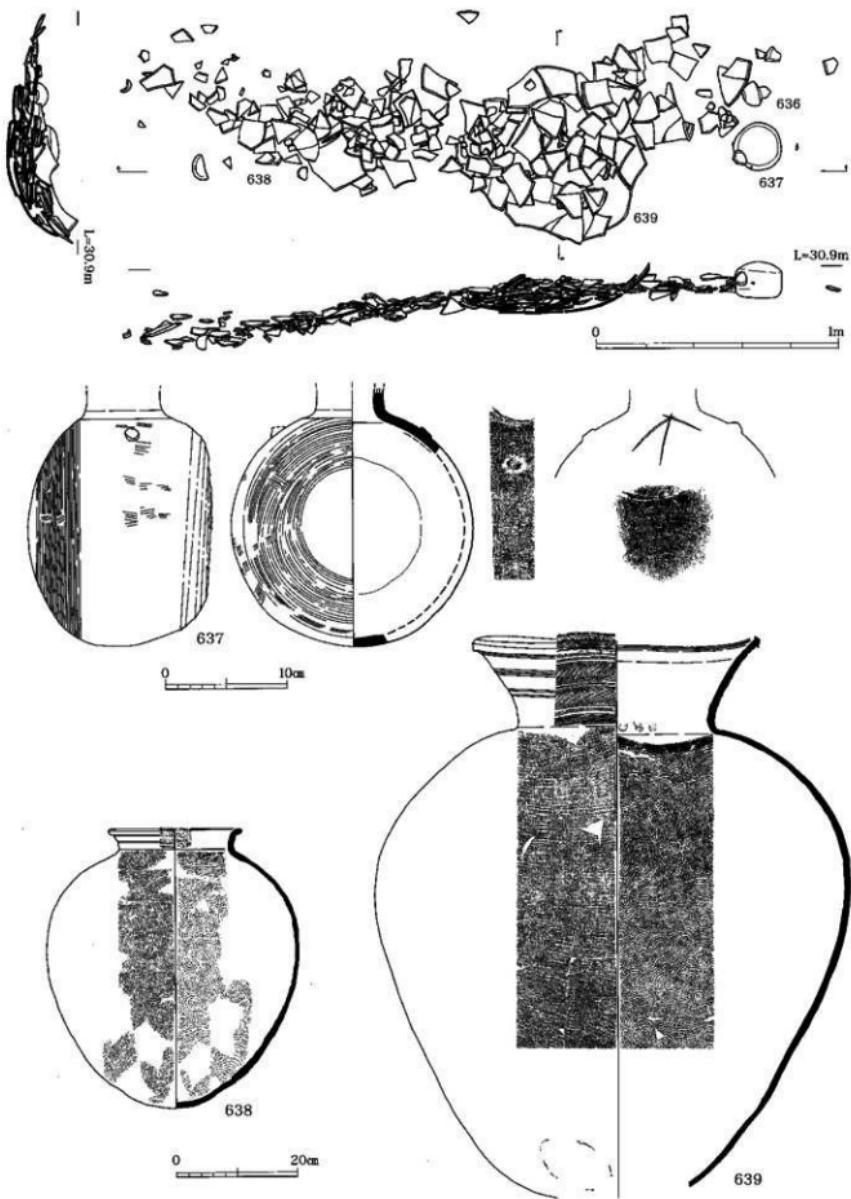
第88図 野首1号墳平面図



第89図 周溝土層断面図

第90図 周溝内出土遺物
実測図 (1)





第91図 周溝内遺物出土状況（上段）

第92図 周溝内出土遺物実測図（2）（下段）

なお、玄室内に崩落した石材の大半は、本来、玄室壁・天井を構成していた石材とみて大過ない。石種は尾鈴山酸性岩類であり、残存する玄室石材と同一である。明確に天井石と思われる大形の平石は確認できていない。

羨道

玄室奥壁から羨道に向かって6.5mの地点には、玄室幅の約1/2にあたる1.3m幅をもって石材が露出する。それは、羨道の両側壁が露出したものとも推定されるが、石室内での位置関係は明確にしない。

出土遺物

周溝内出土遺物（第90・92図・図版28）

大甕（639）・中甕（638）・提瓶（637）・甕（636）は、周溝床面直上でまとめて出土した。出土位置は、周溝奥側から順に、甕、提瓶、大甕、中甕と並んでいる。各器種の接合関係では、大甕のみ、周溝脇に占地するSA10埋土中に含まれた胴部片1点の接合があった。中甕・提瓶・甕の接合関係は、すべて周溝内で収まっている。

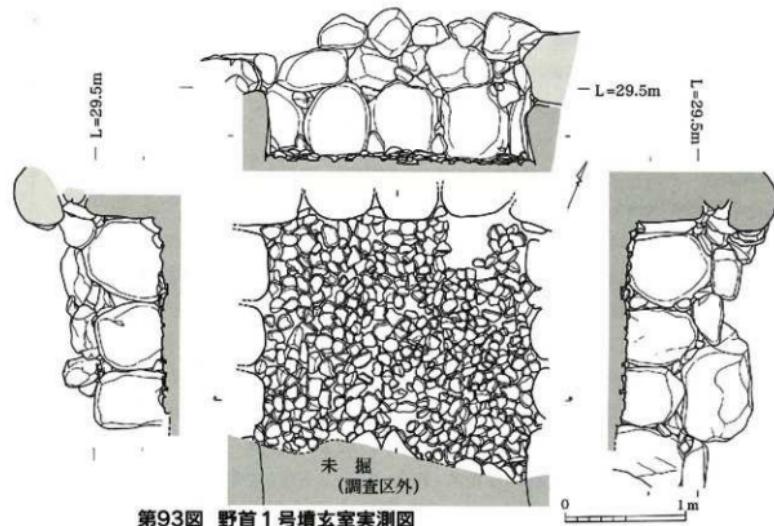
甕は、口頸部の基部は細く、上方に向かって大きく外反し、口縁部付近で一度段をなした後、さらに上方へ伸びる。体部は最大径が中央部やや上方にある偏球形をする。提瓶は、口縁部を失う。体部はカキ目調整で、把手2ヶ所は欠けている。体部と頸部の境にはヘラ記号がある。大甕は頸部下から胴部上半に最大径を持ち、器高は推定93.3cmと1m近い。整形は、胴部内面で同心円タタキ、外面で縱位に平行タタキがなされる。底部付近には直径12.6cmの円形の変色部と、それを囲むような自然軸の輪っか状の固着が4ヶ所みられ、これは焼成時の支え具の痕跡と推定される。底部は円形に失われ、調査区内では破片すら確認できない。中甕は胴部中央やや上に最大径を持ち、器高46.5cmと大甕の約1/2である。

玄室内 遺物出土状況（第94図・図版5）

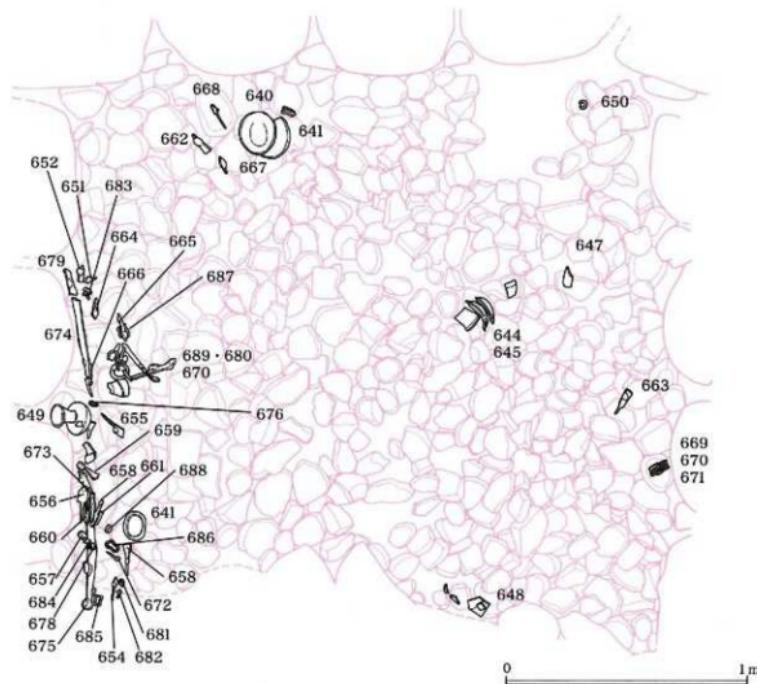
玄室床面上からは、須恵器壺身3、壺蓋2・土師器壺1・短頸壺1・脚付長頸壺1、装身具として耳環1、武器類として鉄鎌22・直刀2・銛2、馬具類として喰1対・轡関係と思われる鉗具3、斬7が出土した。須恵器壺身2点（642・646）は、玄室埋土中の出土である。

出土位置については、直刀や鉄鎌など武器類の大半は玄室左壁に接しており、鉄鎌の一部のみ右側壁側に散在していた。直刀や鉄鎌など長身の武具類はその長軸と玄室長軸がほぼ並行し、また鉄鎌の切先の向きには正逆がみられた。喰1対と轡関係の馬具類は、すべて玄室左壁に寄っていた。轡関係は奥壁側と手前側の2ヶ所に集中箇所がある。耳環は1点のみ、右壁側奥で確認された。

壺類は奥壁左側（640・643）、左壁側（641）、右壁側（644・645・647）の3群に分かれる。このうち、640・643、644・645は重なり合うような格好で出土した。641は単独である。脚付長頸壺は脚部が破碎された状態ではあったものの、直刀2振の間に石室左壁に寄りかかるように立っていた。短頸壺の破片の多くは玄室埋土中から出土しており、その残りの破片が他遺物と離れた右側壁側の手前より出土した。



第93図 野首1号墳玄室実測図



第94図 野首1号墳玄室内遺物出土状況

玄室内出土 須恵器・土師器 (第95図・図版26)

玄室内出土の須恵器・土師器の時期は、いわゆる隼上り編年を参照すると隼上りⅠ～Ⅱ期に収まる。

口径：器高の比や受け部の立ち上がりから、若干の型式差が存在する。

土師器坏 640の体部は外に開きながら丸く立ち上がり、口唇あたりでやや内傾ぎみとなる。口径14.1cm、器高4.3cmで、口径：器高=3.3:1となる。

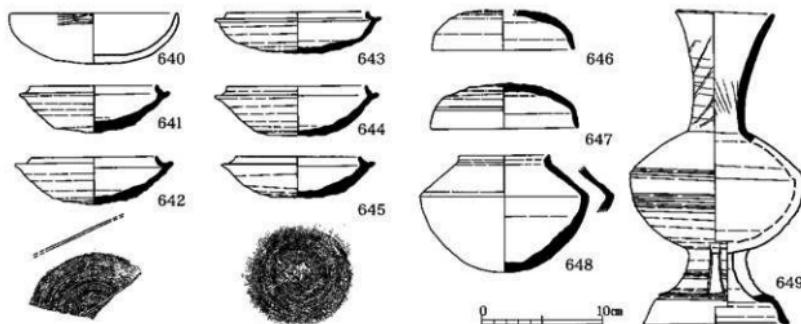
須恵器坏 641～645は身である。641は体部が外に向かって大きく開くように立ち上がり、受け部は内に向かって大きく倒れる。口径：器高は2.9:1となる。器厚も底部を中心に分厚いものが目立つ。外面底部付近の調整は粗雑である。焼き上がりは灰白色であり、他坏と比べ白っぽい色調をする。642・644・645は、体部・受け部の特徴が641と近いものの、相対的に大形である。642・645には底部に「一」のヘラ記号がある。3個体は口径平均10.8cm、器高平均3.8cmで、口径：器高=2.8:1となる。外面の調整は特に底部付近で粗雑である。焼き上がりは灰色から青灰色である。

643は、体部が丸く立ち上がる。受け部はまず内に大きく倒れ、強く屈曲してまっすぐ上方に立ち上がる。口径11.8cm、器高3.3cmで、口径：器高=3.6:1と低平である。焼き上がりはやや暗い青灰色である。他資料に比べ、若干古相か。

646・647は蓋である。天井部の調整は粗雑で、体部から口縁に向かって「く」の字状に屈曲し、647の外面には段がつく。口径平均12.1cm、器高平均3.5cmとなる。

短頸壺 648の1点である。玄室内出土ではあるものの、全体の1/3ほどが失われる。短頸壺について、脚付長頸壺(649)の体部と比較すると、加飾がない・丸みがないなど若干相違するものの、ともに肩部：胴部：最大径=1:2:5とほぼ一致し近い形状となる。

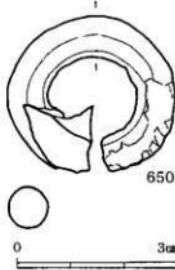
脚付長頸壺 649の1点である。頸部の調整は粗雑で、巻上げ痕や粘土滓の付着がみられる。また整形も厚ばつたい。肩と脚台部分の調整は丁寧で、特に脚台部分はミガキに近いナデとなる。体部は算盤形に近い。脚台部の透かしは3方向1段であり、体部との接着後に体部方向へ切り上げている。



第95図 野首1号墳玄室内出土土器

玄室内出土装身具 (第96図・図版27)

耳環1点がある。青銅製で、長さ2.9cm、幅3.1cm、断面厚は0.8cmの断面円形である。表面は金銅張りで、端部の方から捲れ上がっている。



玄室内出土 鉄製武器類 (第97・98図・図版27)

鉄鎌22・直刀2・鉗2がある。

鉄鎌 鉄鎌は三角形鎌 (651~658・667・668) が最も多く、そのほか方頭鎌 (659~663)・主頭鎌 (664~666)など各種形態のものが混在する。鎌身部から頭部にかけての個体差が大きい。三角形鎌には、鎌身部が細身で柳葉形に近いもの、三角形で闇が角張るものがあり、数量では前者7点・後者3点となる。669~672は鎌茎部である。なお、三角形鎌656・鎌茎部のみ672には纏維がらせん状に巻き付けられた痕跡が良好に残る。

673は断面方形の板状品で、先端に向かってやや幅広くなるものである。鉄鎌の一種か。

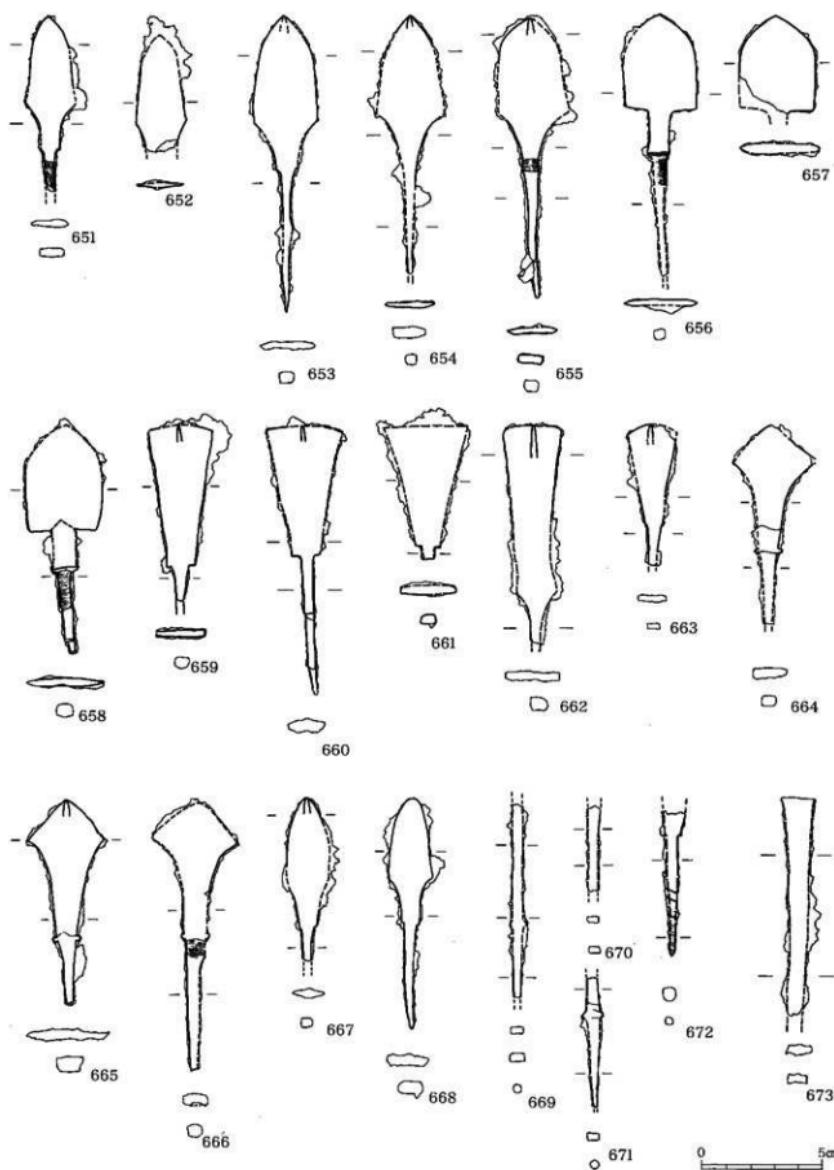
第96図 野首1号墳
玄室内出土装身具

第38表 野首1号墳周溝内出土遺物観察表

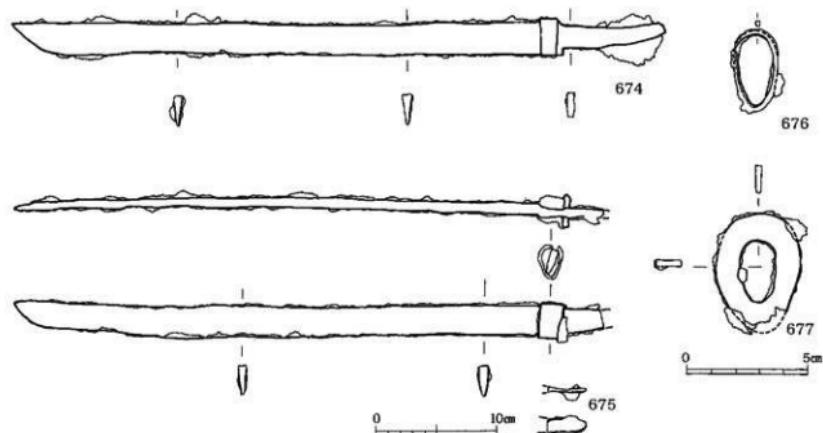
No.	器種	器 形	胎 土	調査 (内面/外面)	構成	合 調	備考
639	漆漆器	口径12.0cm 高さ16.5cm			腹輪	灰(5Y7/1)	円孔の周間に鉛錠あり
640	漆漆器	口径20.0cm	~3mm白色粘土	頭輪ヘラクレア・カキ又は む	腹輪	青灰(5B06/1)	(使用痕か) ヘラ記号(=)
641	漆漆器	口径22.0cm 高さ40.5cm	~5mm白色・真 灰粘土	頭輪ヘラクレア/平行引き足 半のみタキ施力目・口縁横ナデ	腹輪	灰7.5YR5/1・4/1~ オリーブ7.5YR4/2	
642	漆漆器	口径46.0cm 高さ推定93.0cm 大瓶	灰粘土	頭輪ヘラクレア/足方向に平行タキ ナ・口縁横ナデ	腹輪		

第39表 野首1号墳玄室内出土遺物観察表

No.	器種	器 形	胎 土	調査 (内面/外面)	構成	合 調	完成度	備考
640	土師器 杯	口径14.1 高さ4.3	0.1mm大白色粘 土 多數	横方向へラミガキ	やや軟	灰(5Y7/1) 硝青色(5YR5/6)	完存	摩擦著しい
641	漆漆器 杯身	口径10.6 高さ3.7 立上り高0.6 受部径12.4	0.1mm大白色粘 土 多數	上ヨコナデ中工具ヨコナデ底工具 1mm未溝透多ナデ 底	良好	灰(5Y7/1) オリーブ灰(2.5YR6/1)	完存	
642	漆漆器 杯身	口径10.6 高さ4.0 立上り高0.6 受部径13.3	~1mm大白色粘 土 多數	底工具ナデ色ヨコナデ 底(2回転ヘラ引り色ヨコナデ	良好	灰(7.5Y6/1)/ 灰(7.5Y6/1)	口縁部1/6 ヘラ記号(=)	
643	漆漆器 杯身	口径11.6 高さ3.3 立上り高0.6 受部径13.5	~1mm以下白色 粘土 多數	上ヨコナデ底工具ナデ/ 底(2回転ヘラ引り色ヨコナデ	良好	青灰(5B6/1)/ 硝青灰、地灰灰、青灰 銀	口縁一部欠 硝青灰、地灰灰、青灰 銀	
644	漆漆器 杯身	口径11.5 高さ4.1 立上り高0.7 受部径13.5	0.1mm大白色粘 土 多數	上ヨコナデ中工具ヨコナデ底工具 ナデ/ ナデ/底(2回転ヘラ引り色ヨコナデ	やや軟	青灰(10BGS/1)/ 灰(NG)	完存	
645	漆漆器 杯身	口径10.3 高さ3.4 立上り高0.55 受部径12.7	0.1~1mm大白 色粘多數	上・中工具ヨコナデ底工具ナデ/ 色粘多數 底(2回転ヘラ引り色ヨコナデ	良好	青灰(10BGS/1)/ 青灰(5B6/1)	完存	ヘラ記号(=)
646	漆漆器 杯底	口径11.6 高さ3.3	0.1~1mm大白 色粘多數	中工具ヨコナデ底ヨコナデ/ 又(1/2回転ヘラ引り色ヨコナデ	良好	灰(NG)	口縁部1/6	
647	漆漆器 杯底	口径12.4 高さ3.7	0.1mm大白色粘 土 多數	天井工具ナデ~中工具ヨコナデ ナデ/天井(1/2回転ヘラ引り色ヨコナデ	良好	硝青灰(5B6/1)/ 青灰(10BGS/1)	口縁部1/2	
648	漆漆器 短脚底	口径7.6 高さ14.0 強部厚0.8 体厚最大14.0	~1mm大白色粘 土 多數	丁寧な工具ヨコナデその他のヨコ ナデ	良好	青灰(5BGS/1)/ 青灰~硝青灰	強接1/3	脚部に施用の中 がみあり
649	漆漆器 脚付長脚底	口径9.2 高さ20.0 強部厚0.5 体厚最大14.6 高さ10.0 脚付長脚底	~1mm大白色粘 土 多數 脚付長脚底	脚部外工具~軸方向ナデ 草ナデ脚付2/3回転ヘラ引り台脚 外表面ヨコナデ/内面斜方向ナデ	良好	脚部オリーブ灰(5BY5/1) 青灰(10BGS/1)	完存	



第97図 野首1号墳玄室内出土鉄器（1）



第98図 野首1号墳玄室内出土鉄器（2）

直刀・鍔 直刀（674）は刀身長54.1cm・身幅3.4cm・刃厚0.8cm・茎口幅2.1cm・茎尻幅1.1cm・茎厚0.7~0.8cmである。674には676が接着しており、676は674の一部であろう。675も674とほぼ同規格である。いずれも鍔が残っている。677は橢円形をしたリングであり、おそらく刀剣の鍔であろう。

第40表 鉄器処理の流れ

鉄器の保存処理について

鉄器の保存処理は、株式会社京都科学に委託しておこなった。以下に示すのは、作業の簡単な流れであり、関連図版を次頁に掲載している。

【現状確認】

器種名の特定。資料表面を拡大観察し、有機質残存の有無などを確認・種類などを特定。

【一次クリーニング】

表面に付着した余分な土砂や鏽の除去。

【脱塩処理】

資料をアルカリ水溶液に浸漬し、鏽の進行を促進する働きを持つ塩化物イオンを除去。

【樹脂合浸】

脱塩終了後、資料の補強と防錆の目的からアクリル樹脂の誠圧合浸を実施。

【二次クリーニング】

資料を補強した後、一次クリーニングで除去しきれなかった余分な鏽を除去。

【整形・接合】

破損資料は、破損状況に応じてセルロース系、エポキシ系接着剤を使い分け接合。

破損の恐れのある箇所は、「セルロース系接着剤+充填剤」を充填し部分的に補強。

【樹脂塗布】

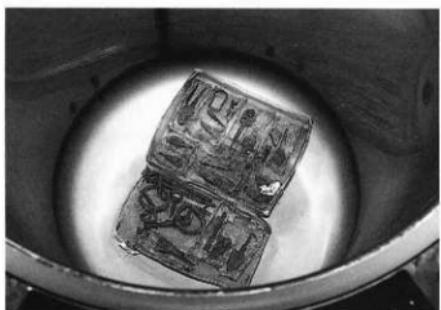
外気の影響を受けにくくする目的から、表面に樹脂を塗布。



一次クリーニング



脱 塩 处 理



樹 脂 合 浸



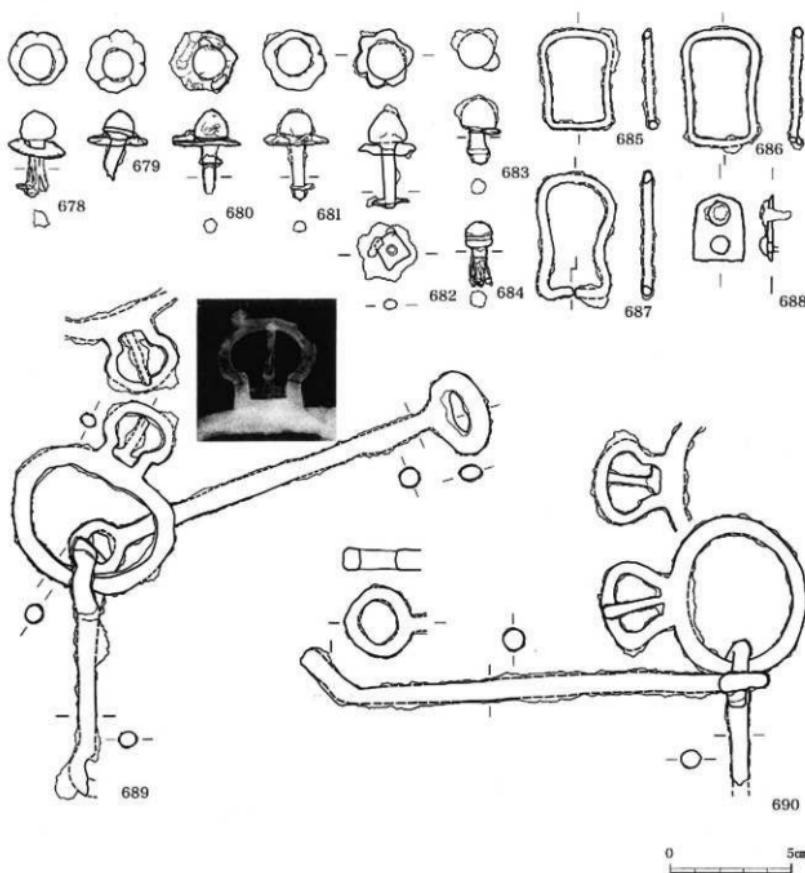
二次クリーニング



整 形・接 合



樹 脂 塗 布



第99図 野首1号墳玄室内出土鉄器（3）

玄室内出土 鉄製馬具類（第99図・図版26）

馬具類として轡1対・轡関係と思われる鉸具3、鋤7、板金具1がある。鋤（678～684）のうち、678・682・683は金銅張りである。おそらく他鋤も金銅張りであり、剥落したのであろう。682は、方形の板金具を留めていたのであろうか。鉸具（686・687）のX線透過画像から、輪下側の中程で分厚くなっているとわかった。厚みの中央には溝があることから、鉄棒の端部を重ねて鍛接されたと考えられる。688は鋤2ヶ所で留められた板金具である。

轡（689・690）は喰と引手で、断面円形である。立聞は、刺金基部に短い鉄棒が刺金に対して直角についており、全体が逆T字形となっている。X線透過画像（第99図中の写真）からは、この鉄棒は立聞の凹みにはめ込まれており、この鉄棒を軸として刺金が可動する構造であるとわかる。刺金の軸となっている鉄棒がはまっている深さも確認できる。また、引手上部の環は、外形が整った円であるが内部の形状は橢円で、特に上部の厚みが薄い。これは使用によって生じた変形（環同志が触れることで起こる摩滅）によるものとも考えられる。

3 土 坑

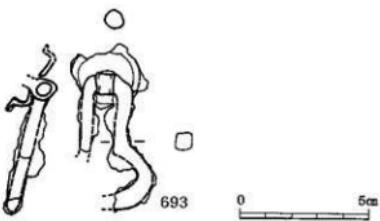
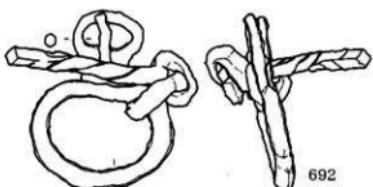
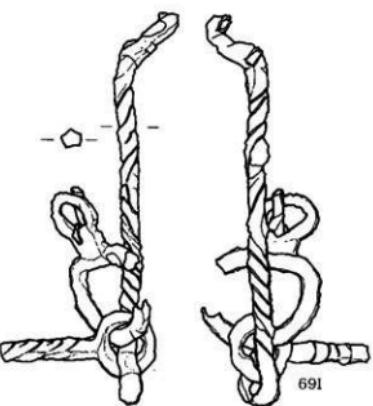
【SC28】

周溝から3.4m北側に位置する土坑である。土坑の大部分は攪乱を受けており、残りは非常に悪い。埋土は暗褐色土を基調とし、褐色ロームのブロックを多量に含むなど、汚い埋土であった。埋土中位と思われるあたりから鉄製馬具類が出土した。

SC28 出土遺物（第100図・図版26）

691・692は轡で、喰と引手にあたる。野首1号墳玄室出土の轡と比較して、小ぶりである。

引手・喰はねじられ、断面は歪な方形となる。素環と立聞の断面は円形である。立聞については、X線透過画像から、その中程に穿たれた穴に刺金の端部を通し、曲げることで刺金が可動する構造になっているとわかった。693は綴である。



第100図 SC28出土遺物実測図

第41表 野首1号墳玄室内出土鉄製武器・馬具類観察表

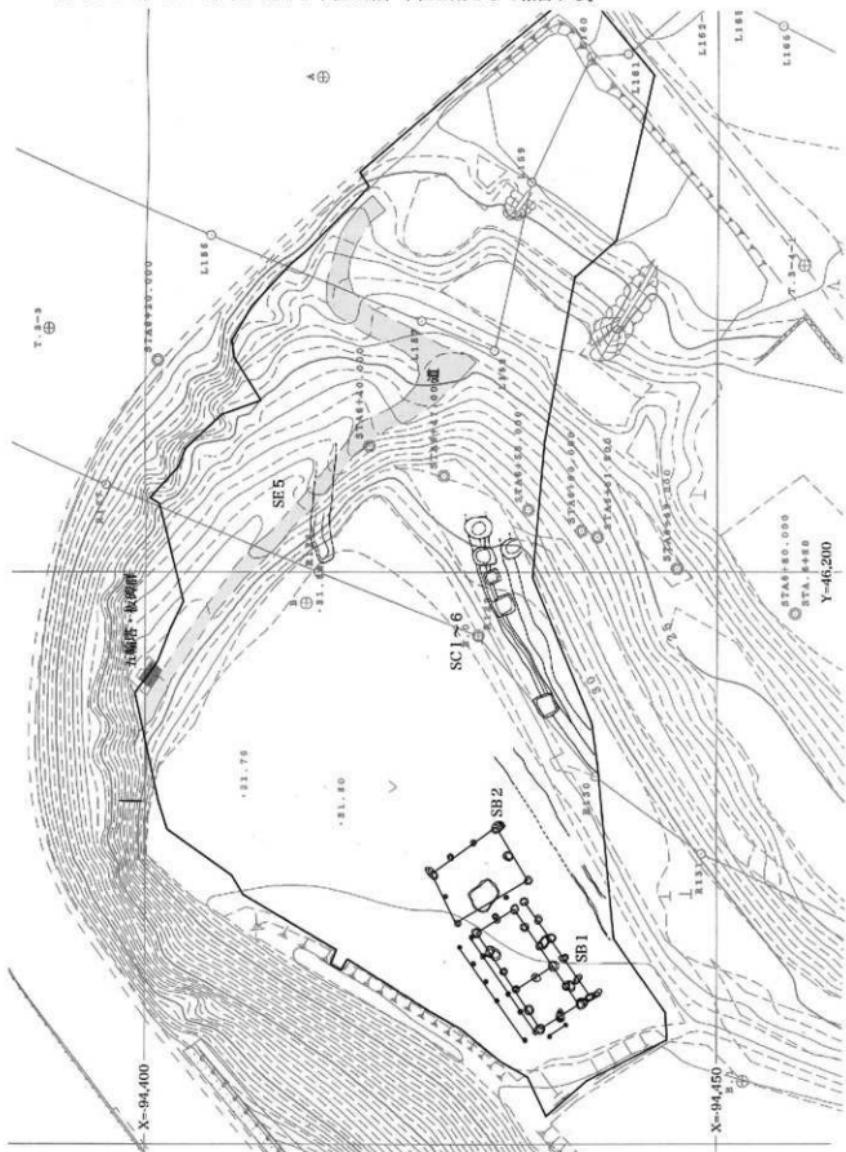
No.	種別	器種	横径長	幅	厚	地盤面重量	地盤面重量	備考
651	武器	三角形錐	7.4	—	1.6	0.4	9.0	12.9 頭身部長3.6cm サビによる腐食著しい
652	#	三角形錐	4.8	—	2.1	0.4	8.9	9.5 頭身部長3.7cm
653	#	三角形錐	12.4	—	2.7	0.5	12.9	19.8 頭身部長4.5cm
654	#	三角形錐	10.8	—	2.9	0.5	12.1	19.5 頭身部長4.2cm
655	#	三角形錐	11.8	—	2.8	0.5	15.6	20.3 頭身部長4.1cm
656	#	三角形錐	11.0	—	3.1	0.5	13.8	20.7 頭錐にらせん状に施錠を巻き付けた痕跡が良好に残存 頭身部長4.0cm
657	#	三角形錐	4.1	—	3.2	0.5	8.0	11.9 頭身部長4.0cm
658	#	三角形錐	9.8	—	3.2	0.5	14.2	18.0 頭身部長4.3cm
659	#	方頭錐	7.5	—	2.6	0.5	12.9	16.0 頭身部長5.9cm
660	#	方頭錐	11.3	—	3.2	0.5	12.2	17.7 頭身部長5.5cm
661	#	方頭錐	5.6	—	3.6	0.4	11.6	16.5 頭身部長5.0cm
662	#	方頭錐	9.0	—	2.5	0.6	21.4	26.0 方頭錐でなく、馬具等の可能性もある 頭身部長7.0cm
663	#	方頭錐	5.9	—	2.1	0.3	6.4	
664	#	金頭錐	8.3	—	3.2	0.5	11.8	13.5 頭身部長1.7cm
665	#	金頭錐	8.6	—	3.4	0.8	12.3	13.8 頭身部長1.8cm
666	#	金頭錐	11.3	—	3.5	0.5	12.9	15.8 頭身部長1.8cm
667	#	三角形錐	6.8	—	1.8	0.4	9.2	9.9 頭身部長3.4cm
668	#	三角形錐	9.6	—	1.7	0.5	7.8	10.0 頭身部長3.9cm
669	#	—	8.1	—	0.6	0.4	4.0	特異な形状で、上半は断面方形、下半は断面円形 断面方形
670	#	—	3.6	—	0.6	0.3	1.5	1.6
671	#	—	5.4	—	0.9	0.4	2.6	2.8
672	#	—	6.0	—	0.6	0.6	3.5	3.9 断面円形 頭部にらせん状に施錠を巻き付けた痕跡が良好に残存 断面方形
673	—	—	9.1	—	1.1	0.5	12.3	15.0 頭身部長1.1cm・頭身幅1.1cm・頭厚0.7~0.8cm
674	刀柄	直刀	54.1	—	3.4	0.8	290.4	直口幅1.1cm・直尻幅1.1cm・直厚0.7~0.8cm
675	#	直刀	49.0	—	3.7	0.9	262.7	直口幅1.1cm・直厚0.7cm
676	#	馬	3.6	—	1.8	0.3	2.0	馬の内側に一部木質が残存
677	#	銅	6.0	—	1.3	3.7	10.7	断面方形
678	馬具	筋	3.6	—	2.4	—	12.0	14.1 金頭貼り 木質残存
679	#	筋	3.0	—	1.3	—	6.9	
680	#	筋	3.5	—	2.8	—	12.6	
681	#	筋	3.9	—	2.7	—	11.1	13.7 金頭貼り
682	#	筋	4.1	—	—	—	—	方形頭あり 木質残存
683	#	筋	3.0	—	1.5	—	6.6	
684	#	筋	2.8	—	1.2	—	3.5	
685	#	劍頭	4.3	—	3.1	0.5	4.1	5.0 金頭貼り
686	#	劍頭	5.1	—	3.3	0.4	5.7	7.8 方形頭あり
687	#	劍頭	5.3	—	3.3	0.7	8.1 金頭貼り	
688	#	辻金具	2.8	—	2.1	0.3	4.0	4.5 頭部分は錆斑を多く
689	#	帶	—	—	—	—	126.5	
690	#	帶	—	—	—	—	106.6	

第42表 SC28出土鉄製馬具類観察表

No.	種別	器種	最大長	幅	厚	重量	備考
691	馬具	帶	—	—	—	46.9	策・引手はねじられる
692	#	帶	—	—	—	41.2	#
693	#	帶	6.6	3.0	0.7	12.7	断面方形

第5節 中世の遺構と遺物

中世の包含層は、大半が表土によって削平されているものの、従来の編年を参照すると大きく2時期に分けられる。そこで、古い方から中世Ⅰ期、中世Ⅱ期として報告する。

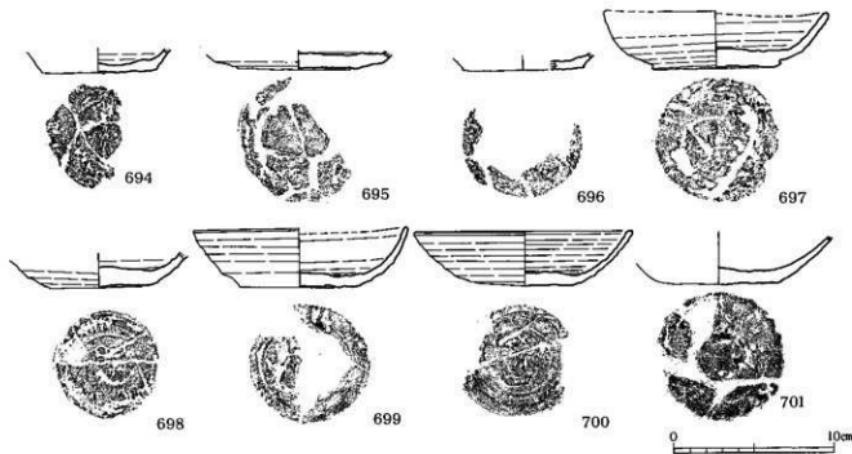


第101図 中世・近世の遺構分布図

1 中世Ⅰ期の遺構と遺物 (第102図)

中世Ⅰ期は、遺物のみ確認された。遺構については時期不明のピット群等に含まれている可能性がある。

遺物は土師器壺であり、最大で9個体分が確認された。出土位置は、694・695・699・700はA1区北東のSA5付近の包含層より比較的近接して出土した。697・699・700については、体部内・外面には段が付くほど明瞭な調整痕が残り、また口径：器高=3.5~4:1と扁平である。体部は大きく外反し、口縁部に向かってごくゆるく内湾気味となる。体部と底部の関係をみると、境が明瞭な一群(694・696・701)、丸く立ち上がる一群(695・697~700)に大別される。底径は8個体で6.1~8cm、平均7.3cmである。底部切り離しは、すべてやや難なハラ切り技法であり、697のように張り出し気味のものもある。



第102図 中世Ⅰ期遺物実測図

第43表 中世Ⅰ期遺物観察表

No.	出土位置	基種	底径 (cm)	口径 (cm)	底高	底面状況	胎土	基成	内面	外面	
694	SAS付近	环	-	-	7.1	底脚のみ	5mm以下の赤褐色粒・1mm以下の灰白色粒を少量含む	△	異形	横 (SYR7/6)	横 (SYR7/6)
695	SAS付近	环	-	-	7.8	底脚のみ	3mm以下の中褐色粒・1mm以下の灰白色粒を少量含む	×	にかい縁 (7.5YR6/3)	にかい縁 (5YR7/4)	
696	SAS付近	环	-	-	7.6	底脚のみ	3mm以下の中褐色粒・灰褐色・微細な明瞭な火災鉄粒を含む	×	異形	(SYR7/6)	にかい縁 (5YR7/4)
697	SAS付近	环	14.0	3.8	8.0	完形	4mm以下の褐色粒・1mm以下の灰白色粒を含む	×	にかい異形 (10YR7/4)	にかい異形 (10YR7/4)	
698	SAS付近	环	-	-	6.3	口縁欠	2mm以下の赤灰・赤褐色粒、1mm以下の灰白色粒を含む	×	混異性	(7.5YR6/4)	にかい異形 (5YR7/4)
699	SAS付近	环	13.2	3.8	7.5	完形	1mm以下の赤褐色粒を少量含む	×	白 (10YR8/2)	混異性 (7.5YR6/3)	
700	SAS付近	环	13.7	3.5	6.1	完形	1mm以下の赤灰・赤褐色粒を少量含む	×	混異性 (7.5YR6/3)	混異性 (7.5YR6/3)	
701	A2区	环	-	-	7.7	完形	3mm以下の赤褐色粒・1mm以下の灰白色粒を少量含む	×	横 (SYR7/6)	横 (SYR7/6)	
レシ-4		环	-	-	-	底脚のみ	5mm以下の赤褐色粒・1mm以下の灰白色粒を少量含む	×	にかい異形 (10YR7/4)	にかい異形 (10YR7/4)	

2 中世II期の遺構と遺物

中世II期は、掘立柱建物2棟、土坑1基、五輪塔・板碑群1と土坑中より中国産灰陶等が確認された。切り合ひ関係から、土坑はSB2より新しい。また、SB1の柱材については放射性炭素年代測定を実施した。SB1・SB2の前後関係は不明である。

掘立柱建物 丘陵中央部にあたる、A2区西側で2棟検出された。建物間距離は1.2mと非常に近い。切り合ひはなく、また時期を示すような遺物は出土していない。SB1の柱穴①埋土中から柱材が検出され、それは放射性炭素年代測定に用いた。

第44表 掘立柱建物一覧

	主 軸	面 積 (m ²)	規 格	備 考
SB1	N-50°-E	40(身舎)・58(庇)	桁行5間・梁行2間	二面庇付き 北西側に5間、南西側に1間の小柱穴
SB2	N-28°-W	44.3	桁行3間・梁行2間	SC32より古い

(注) 掘立柱建物に関しては、柱穴=柱詰り方、柱(柱痕跡)=柱そのもの(その痕跡)を指す。以下の記述も同じ。

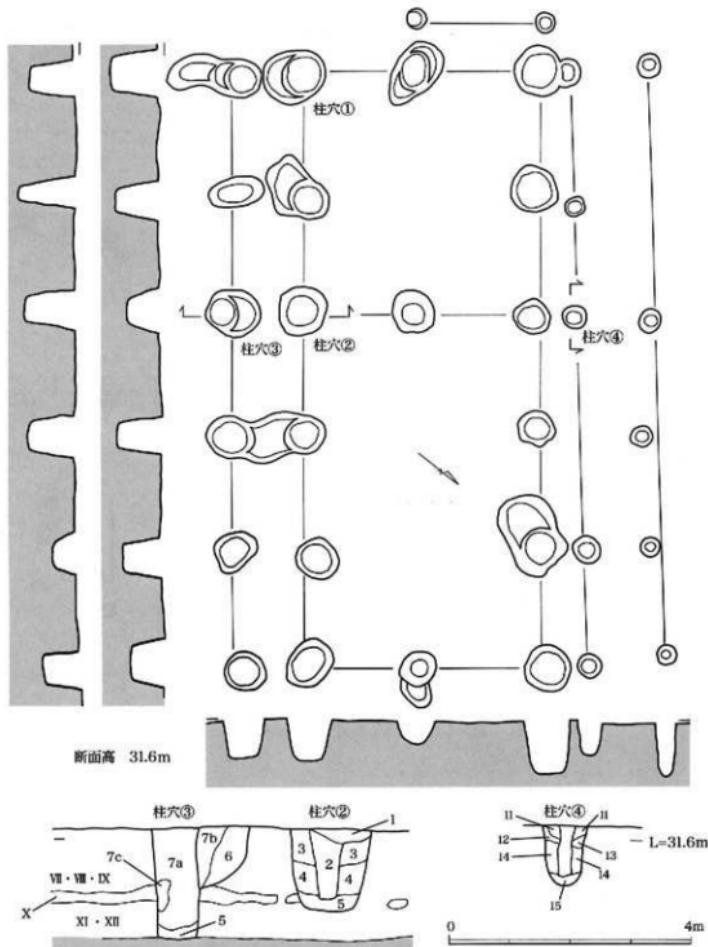
【 SB1】(第135図・図版7) 桁行5間×梁行2間の掘立柱建物で、左右の桁に並行して庇が廻る。柱穴は身舎・庇ともに円形で、身舎の柱穴平均径0.82m、南東側庇の柱穴平均径0.73m、北西側庇の柱穴平均径0.38mとなる。身舎の南西2間目の棟通りに柱穴があり、身舎はここで間仕切られた可能性がある。

柱痕跡は、平面では捉えにくく、断面で明確である。柱痕跡は身舎の柱穴②、庇の柱穴③④でのみ断面を図化した。柱穴断面からは、柱の周囲を突き固めた状況が明白であり、また、柱穴の底面はX層イワオコシやXI層(明黄褐色土層)など、より硬質の面をあてることが多かった。柱の下や周囲は、VII・VIII層(AT下位の硬質の層)、X層(イワオコシ)、XI層(明黄褐色土層)の混じった暗褐色土で突き固められている。暗褐色土には硬い部分とそうでない部分がある。また、いくつかの柱穴には、柱の抜取り痕が見られた。

柱穴②は身舎にあたり、径0.77mである。柱痕跡が見られ、柱径0.25mを測る。柱穴の底面は、ねじりが断たないほどに突き固められ、柱はその硬質の部分にのる。柱周辺の埋土は、その下部がやや硬い程度で、柱穴検出面付近で再び硬さを増す。

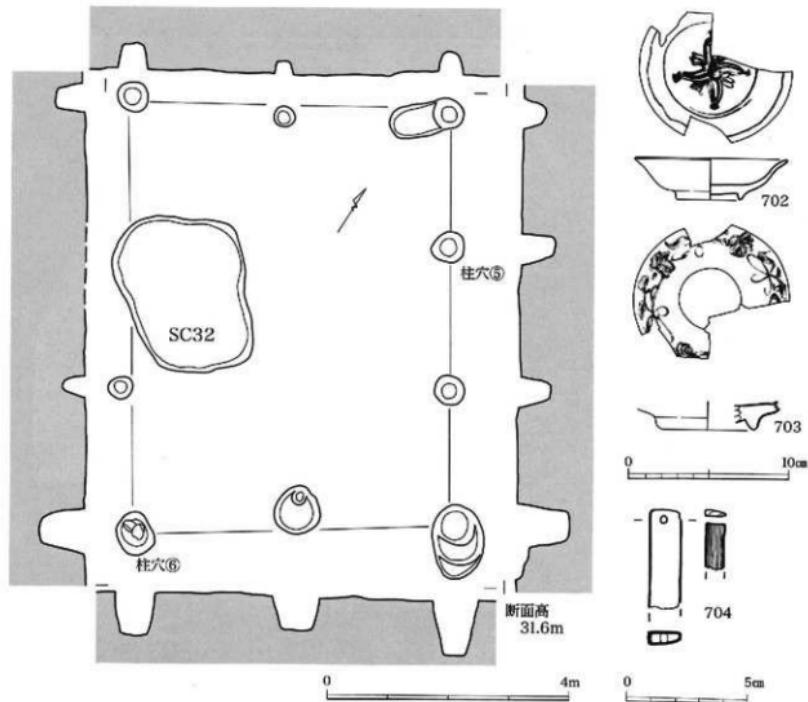
柱穴③は南東側庇にあたり、径0.84mである。縄文時代の土坑を切る。柱穴埋土の底部は硬く突き固められ、その上は軟らかく、しまりがない。柱痕跡は明確でないが、柱穴埋土中～下部に、炭化物の密で、非常にしまりのない土質が見られた。柱の立ち腐れか。

柱穴④は北西側庇にあたり、径0.31mである。柱痕跡が見られ、柱径0.12mを測る。埋土状況は柱穴②に近く、最下部は非常に硬く突き固められる。



- SB 1 柱穴断面圖注記**
- 系土色は、暗褐色土をベースとし、各種の土が混入する
1層：やわらかい、炭化物を少額含む（2層に比べ量は少ない）。
2層：やわらかい、炭化物を多く含む。X層（イワオコシ）の粒を含む。
3層：やわらかい、VII・VIII層（始真Tn下位の暗色帶）のブロックを含む。
4層：やわらかい、VII・VIII層（始真Tn下位の暗色帶）のブロックを少額含む。
5層：含有物等は4層に同じであるが、非常に硬くなっている。
6層：VII・VIII層（始真Tn下位の暗色帶）の大きさでブロックを含む。
7層：7a～7c層はもとは同一層。7a・7b層は6層に比べ明るい色調である。
VII・VIII層（始真Tn下位の暗色帶）のブロックを含む。
X層（イワオコシ）粒・IX層（暗色帶下の褐色土）も含む。
7c層はしまりがなく、指で踏めただけでボロボロと崩れる。
7a層に比べ色調は暗く、また炭化物が非常に目立つ。
- 10層：やわらかい炭化物を多く含む。
11層：VII・VIII層（始真Tn下位の暗色帶）のブロックを含む。
12層：X層（イワオコシ）のブロックを多く含む。
13層：VI（始真Tn）のブロックを多く含む。
14層：やわらかい、VII・VIII層（始真Tn下位の暗色帶）のブロックを含む。
15層：含有物等は14層に同じであるが、非常に硬くなっている。

第103図 SB 1 実測図



第104図 SB2・SC32実測図およびSC32出土遺物

【SB2】(第104図・図版7) 柱穴⑤は礫が集中しており、一見すると縄文早期の集石様である。当初、集石として調査していたが、調査中に遺構配置・埋土状況から柱穴と認識できた。柱穴⑤は、検出面付近で礫の集中があり、礫下に暗褐色土をはさんで埋土中位に再び礫の堆積がある。礫は縄文早期の集石構成礫と同一である(図版7・3段目左)。柱穴⑥は、平らな梢円礫が2枚、柱穴底部に向かって斜めに落ち込んでいた(図版7・3段目右)。

【SC32】(第104図) SB2の柱穴を切る土坑である。2.8m×2.1mの平面梢円形、残深0.3m。埋土はしまりない黒色土で、埋土中より染付皿・青磁碗・青銅製品が出土した。

SC32出土遺物 702は高台を持つ端反り皿であり、口径9.4cm・器高2.6cm・底径3.9cmである。高台はヘラ削り、斜めに面取り・砂敷きで焼成。外面胴部には牡丹唐草文、見込に十字花文。小野分類の皿B群VI。703は龍泉窯の青磁碗。復元底径5.8cm。704は青銅製で、4.1cm+α×1.3cm×0.6cm・重量7.8gで、端部には径3mmの孔が貫通する。断口方形の筒状で、中には木質が残っている。

SB1柱穴①検出の炭化材に関する自然科学的分析の内容

I. 樹種同定

方法 炭化材を削折して新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、落射顕微鏡によって75,750倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行なった。

結果 炭化材は、クロマツ *Pinus thunbergii* Parl. マツ科と同定された。クロマツは仮道管と放射柔細胞、放射仮道管及び垂直・水平樹脂道を取り囲むエビセリウム細胞から構成される針葉樹材である。本州、四国、九州に分布する常緑の高木で、高さ35m、径2mに達する。材は耐久性、保存性が中庸で、水温によく耐え、広く用いられる。また、材は樹脂を多く含み、燃料にも適する。同定の根拠となつた特徴は以下のとおりである。

横断面：早材から晚材へのやや移行は急で、垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野孔は窓状で、放射仮道管の内壁には比較的緩やかな網状の肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同心放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは筋鉢形を呈する。

文献 佐伯浩・原田浩 (1985) 針葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.20-48.

佐伯浩・原田浩 (1985) 広葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.49-100.

島地謙・伊東隆夫 (1988) 日本の遺跡出土木製品観、雄山閣、p.296.

II. 放射性炭素年代測定

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
№1	試料1(大)	炭化物	酸-7kH ₂ O-酸洗浄、石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
№2	試料1(小)	炭化物	酸-7kH ₂ O-酸洗浄、石墨調整	加速器質量分析(AMS)法

2. 測定結果

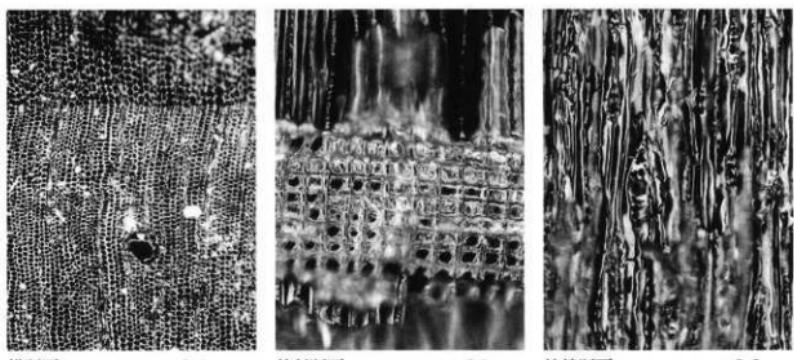
試料名	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年BP)	層年代 (西暦)	測定番号 (NUTA2-)
№1	-26.5	335±30	交点: cal AD 1520, 1590, 1625 1σ: cal AD 1485-1535 cal AD 1540-1635 2σ: cal AD 1465-1645	2386
№2	-27.5	345±30	交点: cal AD 1520, 1595, 1620 1σ: cal AD 1480-1530 cal AD 1545-1635 2σ: cal AD 1450-1645	2383

※NUTA2は、名古屋大学年代測定資料研究センターの測定番号(2号機)

1) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値 試料の測定 $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

2) 補正 ^{14}C 年代値 ^{13}C 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。 ^{14}C の半減期は国際慣例に従って5568年を用いた。

3) 層年代 過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を較正することにより算出した年代。較正には年代既知の樹木年輪の ^{13}C の詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と ^{14}C 年代の比較により作成された校正曲線を使用した。最新のデータベース("INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40(3))により、約19,000年BPまでの換算が可能となっている。層年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と層年代較正曲線との交点の層年代値を意味する。 1σ (68%確率)および 2σ (95%確率)は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線上に投影した層年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1σ ・ 2σ 値が表記される場合もある。



横断面———: 0.4mm

放射断面———: 0.1mm

接線断面———: 0.2mm

炭化材1 クロマツ